

鶯は、ふみなぎにもめで  
たき物につくり、聲よりは  
じめて、さまかたちも、さ  
ばかりあてにうつくしきほ  
ごよりはこゝのへのうちに  
なかぬそいさわるき。人の  
さなんあるさいひしをさし  
もめらじと思ひしに、十  
せばかりさぶらひてきし  
に、まことにさらにおさも  
せざりき。さるは竹もちか  
く、こうばいもいさよくか  
よひぬべきたよりなりか  
し。まかでてきけば、あや  
しきいへの見ごころもなき

る。  
鶯は、和歌漢詩にも愛たきものに詠まれ、鳴  
く聲の美しきを第一とし、其の容姿も氣高き  
ものなるが、容姿は如何やうにもあれ、九重  
の雲深き禁中にては、唯だ一聲をも鳴かぬこ  
そ奇怪なれ。或る人曾て鶯は禁中にては鳴か  
ぬものなりと言ひしを、然る事あるまじと思  
ひ居たりしに、已れ中宮に侍ひしより十年ば  
かり此の方、未だ一たびも聞きたることなし。  
和漢朗詠には、「西樓月落花間曲、中殿灯残  
竹裏聲」とて、曉天の鶯を宮中に聞きけるを  
詠みけるに、中殿は清涼殿にて、中宮の御局

梅などには、花やかにぞ鳴。  
夜るなかぬもいぎたなきこ  
ちすれども、いまはいか  
せん。夏秋の末まで、お  
いごゑになきて、むしくひ  
など、ようもあらぬものは、  
名をつけかへていふぞ、く  
ちをしくすごきこゝちす  
る。それもすめなごやう  
に、つれにあるさりならば、  
さもおほゆまじ。ほるなく  
ゆゑこそばあらめ、さした  
ちかへるなごをかしきこゝ  
に、哥にもふみにもつくる  
なるば、なほ春のうちなら  
ましかば、いかにをかしか  
らまし。人をも人げなう、

も此處にあり、竹も近く、紅梅も植ゑられた  
れば、鶯の來鳴く便りもあるものを、さりと  
は不思議の事ごもなり。尤も禁中を出で、里  
家に行けば、賤が家の垣根の、之ぞと見る程  
にもなき梅などには、却りて盛んに鳴くを聞  
くなり。それも晝ならで夜鳴かんに、一沙  
の興あるべけれど、夜鳴かざるは眠を貪るよ  
と思はれて、いぎたなき心地すれど、鶯の夜  
鳴かぬは天性なれば、如何とも詮方なし。但  
し春のみならで、夏秋の末の頃まで、老聲に  
鳴くものから、下賤の者は、名を呼び變へて、  
蟲喰など、言ふも、口惜しく凄まじき心地せ

世のおぼえあなづらばしう  
なりそめにたるをば、そし  
りやはする。さびからすな  
ごの上は、見れきいれ  
なごする人世になしかし。  
さればいみじかるべきもの  
さなりたればさおもふに、  
心ゆかぬこゝちする也。ま  
つりのかへさ見るさて、う  
りんあん知足院などのまへ  
に車をたてたれば、郭公  
もしのばぬにやあらんなく  
に、いさようまればにせて、  
木だかき木ごもの中に、も  
ろこゝになきたるこそ、さ  
すがにをかしけれ。郭公は  
猶さらにいふべきかたな

らる。それも雀などの如く、世に有りふれた  
る鳥ならば、口惜しくもあらねど、春鳴く鳥  
と定まりたればこそ、拾遺集にも、「あらず  
の年立ちかへるあしたより待るゝものは鶯の  
聲」とありて、歌にも詩にも詠まるゝなれ。  
されば夏秋の末までも老聲には鳴かで、唯だ  
春ばかり鳴くものならんには、如何ばかり愛  
らしかるらんと思はる。之を人に見るも、人  
として人らしからず、世に疎まれ侮られたる  
ものを、誰かは誇りやはせん、誇れりとして誇  
り甲斐もなければなり。又た同じく鳥にはあ  
れど、鶯鳥などを面白しと見、其の鳴く聲を

し。いつしかしたり顔にも  
きこえ、哥に卯花はな橋な  
ごにやごりをして、はた  
かくれたるも、ねたげな  
る心ばへなり。五月雨の  
みじか夜にれざめをして、  
いかで人よりさきにきかん  
さまたれて、夜ふかくうち  
いでたる、こゝのらうく  
じうあいぎようづきたる、  
いみじうこゝろあくがれ、  
せんかたなし。みなづきに  
なりぬれば、おさもせずな  
りぬる、すべていふもおろ  
かなり。よるなくもの、す  
べていづれもいづれもめで  
たし。ちごごものみぞ、さ

善しと思ひて、耳を傾くる人もなし。されば  
鶯は、鳥の中にも殊に優れて、愛せらるゝも  
のと定まりたりと思へばこそ、老聲に夏秋の  
末までも鳴くを口惜しとし、晝のみにて夜鳴  
かぬを物足らぬとぞ言ふなる。然は言へど、  
春のみならず、夏の始めに鳴くも、亦た興あ  
るものなり。賀茂の祭に供したる人々の歸る  
さの模様を見んとて、己れ紫野に出で行きて、  
雲林院知足院などの前に車を止めて見てあり  
しに、頃は四月の半なれば、郭公も恐び敢へ  
ずして鳴くに、鶯も其の聲を學び似せて、高  
き木の中に、郭公と共に鳴きたるは、春なら

しもなき。」

ねども流石に面白かりけり。尤も郭公の面白  
きは、更に言ふまでもなし。夏の初の夜々を、  
我物顔に振舞ひて鳴くやうにも聞え、歌など  
には、卵の花、花橘などに宿るよと詠まれな  
ごすれど、夫れも見つけ難く、木蔭に隠れた  
るも、嫉ましきまでに愛らしく、五月雨の短  
夜に夙く起きて、人よりも先立ちて其の一聲  
を聞かんものと、未だ曉遠きに家を出づれば、  
鳴く聲の朗々として愛らしきに、甚く感に打  
たれて、我身を忘るゝ程なり。さても六月に  
なりぬれば、其の聲遂に聞き得ずなりぬるこ  
そ、四季常に鳴くなるに比ぶれば、一汐勝れ

【廿六】 あてなるもの  
うすいろにしらがされのか  
ざみ。かりのこ。けづりひ  
のあまづらにいりて、あた  
らしきかなまりにいりた  
る。すぬさうのす。藤の  
花。梅のはなに雪のふりた  
る。いみしうつくしきち  
このいらごくひたる。」

【廿七】 むしは

て愛らしきことはいふも愚なり。されば郭公  
のみには限らず、夜鳴くものは何れも皆愛で  
たけれど、唯だ乳兒の夜泣するは愛すべきに  
あらず。

【廿六】 あてなるもの  
氣高く清けにて貴なるものは、薄紅色の衣に、  
白の汗衫を上に重ねたる、童女の初夏の装束。  
鴨の卵子。削りたる氷を、今の世の砂糖代りの  
甘葛に和せて、新しき金椀に入れたる。水晶  
の珠數。藤の花。梅の花に雪の降りたる。最  
と美しくしき稚兒の苺食へる状などなり。

【廿七】 虫は

すゞむし。松むし。はたお  
り。きりくす。てふ。わ  
れから。ひをむし。ほたる。  
みのむしいさあはれなり。  
おにのうみければ。おやに  
にて。これもおそろしき心  
ちぞあらんさて。おやのあ  
しききぬひきよせて。今秋  
風ふかんをりにぞ。こんす  
る。までよさいひて。にげ  
ていにするもしらす。風の  
おさきしりて。八月はか  
りになれば。ちよよくさ  
はかなげになく。いみじく  
あはれなり。ひくらし。ぬ  
かづき虫。又あはれ也。さ  
る心に道心おこして。つき

鈴虫、松虫、機織虫、蟋蟀、蝶、藻に住むわ  
れから、蝟、螢など多くあるが中に、簞虫は  
最と哀れに面白し。鬼のやうなる簞着たる親  
に似て、其の子も恐ろしき心ならんとて、親  
虫の悪き衣を引き着せて、秋風吹かば再び來  
ん程に、夫れ迄は待ち居れよと、其の子に言  
ひ教へて、逃げ行けるをも知らず、八月の頃  
になれば、子虫は風の音を聞き知りて、ちよ  
よくと親呼ぶやうに悲しげに鳴くぞ、誠に  
哀れなり。蝸、叩頭虫も亦た哀れなり。叩頭  
虫は俗に米春虫とて、墓なき虫ながらも菩提  
心を起して、額づき禮拜するなるべし。又た

ありくらん。又おもひかけ  
すくらき所などに、ほごめ  
きたる聞つけたるこそをか  
しけれ。はへこそにくきも  
のようちにいれつべけれ。  
あいぎやうなくにくき物  
は、人々しうかきいつべき  
物のやうにあらねど、よろ  
づの物に居、かほなどにぬ  
れたるあししてぬたるなど  
よ。人の名につきたるは、  
かならず必かたし。夏むしいさを  
かしく、らうのうへさびあ  
りく、いさをかし。ありは  
にくけれど、かるびいみじ  
うて、水のうへなごを、た  
ゞあゆみありくこそをか

暗き所にておもひかけず、ことごとく額づく音  
のするを、聞きつけたるなど可笑し。蠅は、  
憎き物の中に數ふべし。尤も愛嬌なく憎氣な  
るものを、人並に此處に書き記すべくもあら  
ねど、蠅は煩さくも總ての物の上に止りゐて、  
濡れたる足の心地悪くも、人の顔に取り付き  
なごするものから、書き記さでは止み難し。  
且つ夫れ名利に趨りて、他人を譏するが如き  
小人は、昔も今も蒼蠅に喩へられて憎まるゝ  
ものなるが、此等小人が爲す所を遂げんこと、  
必ずや難きものあるなり。青蛾は最と可笑し  
く、廊下などの上を飛び廻り、蟻は其の形の

けれ。」

七月ばかりに、風のいたう  
ふき、雨などのさわがしき  
日、大かたいさすゞしけれ  
ば、扇もうちわすれたるに、  
あせのかすこしかゝへたる  
きぬのうすき、引かづきて  
ひるれしたるこそ、をかし  
けれ。」

【廿八】 にげなきもの

かみあしき人の、白きあや  
のきぬきたる。しらかみた  
るかみにあふひつけたる。あ  
あしき手を、あかき紙にか

憎氣なれど、最と身軽にて、水の上を其のま  
歩むなごは可笑し。

七月の頃、風吹き騒ぎ、雨降りしきる日、涼  
しきまゝに扇も忘れられて、少しく汗の香を  
移し止めたる薄衣を引き被きて、午睡したる  
は可笑しきものなり。

【注意】

右に記せる「七月ばかりに風のいたうふき」の  
一節は、「虫は」さ言へる一段に入るべくもあら  
ず覺ゆれど、今敢て濫りに取捨せず

【廿八】 にげなきもの

頭の髪の毛の悪しき婦人が、白の綾衣を着たる。  
賀茂の祭の日、葵蔓を亂れたる白髪頭に飾れ  
る。赤き紙に、悪筆にて文かきたる。賤が伏

きたる。げすの家に、雪の  
降たる。又月のさし入たる  
も、いさ口をし。月のいさ  
あかきに、やかたなき車に  
あひたる。又さる車に、あ  
めうしかけたる。老たるも  
の、はらたかくて、あえぎ  
ありく。又わかき男もちた  
る、いさ見ぐるしきに、こ  
さ人のもさにゆくさて、れ  
たみたる。老たる男のれま  
ごひたる。又さやうにひげ  
がちなるをさこの、しひつ  
みたる。はもなき女の、梅  
くひてすがりたる。げす  
の、くれなぬのはかまきた  
る。此比それのみこそあめ

屋に、雪の降たる。又は月影の射し入りたる  
など、似つかはしからず。月影清き夜は、心  
して善き車に乗るこそ似合ふなるに、無蓋車  
に乗れる人に出會たるは口惜し。さては然る  
無蓋車に、立派なる黄牛を繋けて引かせたる  
も似合はず。老婦の懷妊して腹高く持ち上り  
たるが、呼吸苦しげに歩める。或は老婦にも  
不似合なる、若き男を夫に持ちたるが、既に  
見苦しきに、其の男に忍び女ありとて嫉妬す  
るは、更に似つかはしからず。又た年老たる  
男の忍び歩きして、女の許に寝過したるも見  
苦しく、總角などの童兒が、椎の實を拾ふは

れ。

ゆげひのすけのやかう、かりぎぬすがたもいさいやしげなり。又人におぢらるゝうへのきぬ、はたおごるゝくしく、たちさまよふも、人見つけばあなづらほし。げんぎのものやあると、た

似合はしけれど、年老たる髭男の、之を摘み拾ふは似つかはしからず。或は齒も抜け落ちたる老女の、梅を食ひて酸がりたる顔の、彌が上にも皺寄せたる。下賤の女の緋袴着けたる皆々不似合なれど、殊に當世は、下賤の者の高貴なる風を粧ひて、謂ゆる狝猴にして冠するの類、甚だ多し。

靴負の佐は、左右衛門の佐にして、弓箭を帶する宮門守護の官職なれば、禁庭を夜行して非常を警むるなるが、其の本職の夜警にはあらで、女の許に忍び歩きする狩衣姿は、最ど賤しげなり。殊に其の上衣は赤の袍にて、人

はむれにもさがむ。六位藏人うへのほうぐはんさうちいひて世になくきらくしき物におぼえ、里人けすなごは、此世の人さだに思ひたらず、目をだに見あはせで、おぢわなゝく人の、うちわりのほそこのなごに、しのびて入ふしたるこそ、いさつきなけれ。そらだき物したるきちやうに、うちかけたるはかまの、おもたげにいやしう、きらくしけんもさ、おしはからるゝなごよ。さかしらにうへのきぬわきあけて、われすみのをのやうにて、わ

目驚く色なれば、見るも仰々しき状なるに、其の状にて忍び彷徨へば、見る人必ず輕蔑すべく、將た又た非常嫌疑の者ありて、斯くは彷徨ひ巡ぐるにやと、戯れにも人に咎めらるべし。或は六位の藏人として、靴負の尉にして藏人を兼ねたる者、又は上の判官として、檢非違使の尉にして昇殿を聽されたる者などは、世にも勝れて立派なる人達なれば、都人は兎も角も、里人下賤の者などは、人間以上の尊さに思ひて、行き逢へども目を擧げて見ることさへせず、懼れ戦けるに、何事ぞ其の人達が、夜中忍び歩きして、禁中の廊下に局した

がれかけしたらん程ぞ、に  
げなきやかうの人々なる。  
此つかさのほごは、れんじ  
てまゝめてよかし。五位の  
藏人も。」

る女房の許に入り臥したるなど、誠に不都合  
千萬なり。其の局に薰物したる香の匂の几帳  
に、彼の藏人檢非違使の尉などの、荒々しき  
袴の打ち掛けられたるは、さも重たげにて賤  
しく見え、たとひ其の袴の綺羅びやかなるに  
もせよ、此等の人達のは、侮らはしく思はる  
ゝなり。其の上衣の袍とても、賢こげに細く  
腋を明けたるが、鼠の尾のやうに見えたるを、  
疊みもせで曲げて輪にしたるまゝに、几帳に  
掛けたるなごは、本職を外にしたる意外の夜  
行の人々なりけり。斯る宮門警護の官職にあ  
る六位の藏人上の判官などは、能く其心を用

ほそごの人に人さあまたあ  
て、ありくものごも、みや  
すからすまびよせて、もの  
なごいふに、きまげなるを  
のこ、小舎人、わらはなご  
の、よきつゝみぶくろに、  
きぬごもつゝみて、さしぬ  
きのこしなごうち見えた  
る。ふくろにいりたるゆみ、  
矢、たて、ほこ、たちなご、  
もてありくを、たがぞこ  
ふに、ついで、何がしご

ひて、女房の局に忍び歩きすることは、断じ  
て止むべきなり。五位の藏人とても、亦た然  
り。  
禁中の廊下に、女房達の多く集まり居て、通  
行する人々を、見苦くも呼び寄せて物語りす  
るに、爽洒たる見目好き男、少童の舎人、又  
は舎人ならざる兒童などが、立派にして手頃  
なる包袋に、衣類などを包めるが、指貫の腰  
のあたりが袋の口より見えたるを携へ、或は  
弓矢楯鉞劍などの武官の調度、舞樂の道具な  
ごの袋に入りたるを持ち運ぶに、そは誰の品  
々なりやと問へば、跪坐て叮嚀に、何某殿の

の、さいひて、行はいさよ  
し。けしきばみやさしがり  
て、しらすささいひ、き  
もいれでいぬるものは、い  
みじふぞにくきかし。」

つきよ  
月夜にむなぐるまありきた  
る。きよげなるをさこの、  
にくげなるめもちたる。ひ  
げぐるにくげなる人の、  
年おいたるが、物がたりす  
る人の兒もてあそびたる。」

品なりと答へて、立ち去るは宜しけれど、中  
には容子を作りて、優しげに打ち笑みなどし  
ながら、知らずと言ふもあれば、又た初より  
聞かぬ態して、行き去るもあるは、甚だ憎々  
しきものなり。

つきよ  
月夜には、車に乗りて月を見ありくこそ然る  
べけれ、人も乗らざる空車を引き歩くは、似  
氣なきものなり。或は美男子の醜婦を妻に持  
てる。又は髭面の年老たる男が、僅に物言ひ  
始めたる計りの人の兒を、さも愛で慈むやう  
にて弄べるなど、何れも似つかはしからず見  
ゆるものなり。

さのもりづかさこそ、  
なかしきものはあれ。下女  
のきは、さばかり浦山し  
き物はなし。よき人にせさ  
せまほしきわざ也。若くて  
かたちよく、なりなごつれ  
によくあらんは、まして  
よからんかし。年老て物の  
例なごしりて、おもなきさ  
ましたるも、いさつきく  
しうめやすし。さのもりづ  
かさのかほあいぎやうづき  
たらんをもたりて、さうぞ  
く時にしたがひて、からき  
ぬなごいまめかしうて、あ  
りかせばやさこそおぼゆ  
れ。なごは、又するじん

このもりづかさ  
主殿司とて、禁殿の洒掃などを司る女官は  
善きものにて、禁中の下臈の分限にては、此  
の職は、美人にこそ爲せたきものなれ。年若  
くして容貌艶麗なるが上に、風姿衣裳も常に  
優美なるは、申分なく善し。されど年老たる  
女にても、古例なごに通じて、物に耻ぢ怖ぢ  
ざる風態したるは、最と見易く似つかはしき  
ものなり。されば人の親となりては、主殿司  
の容貌善く愛嬌づきたる娘を持ちて、四季の  
装束を其の折々に着飾らせ、當世風の唐衣な  
ご着せて、都大路を狭しと歩かせて見たく思



こそあめれ。いみしくび、しくをかしき君達も、すゐじんなきはいさしらくし。辨など、をかしくよきつかさおもひたれども、したがされのしりみじかくて、すゐじんなきぞいさわるきや。」

しきの御ざうしの、西おもてのたてしきみのもこにて、頭辨の、人さ物をいさひさしくいひたち給へれ

ば、さし出てそればたれぞさいへば、辨の内侍なりとのたまふ。なにかはさもかたらひ給ふ、大辨見えばうちすて奉りて、いなん物をさいへば、いみしくわらひてたれかかゝるこさをさへいひきかせけん、それさなせそさ、かたらふなりさの給ふ。いみしく見えて、をかしきすぢなごたてたる事はなくて、たゞありなるやうなるを、みな人さのみしりたるに、猶おくふかき御心さまを見しりたれば、おしなべたらすなご、御前にもけいし、又さしろしめし

はるなり。又た男は、隨身を召し具するこそあらま欲しけれ。如何に立派なる美々しき善き公達も、隨身を召し連れざるは、見すばらしきものなり。又た名家儒家などの人にて、禁中の右筆其の他の諸事を奉行する大中少の辨官は、立派なる善き官職なりと思ひたれど、其の服装を見るに、下襲の裾短くて見すばらしく、尙ほ且つ隨身を賜はらざれば、餘りに好ましからず覺ゆ。

職の御曹司とは、中宮職の御事にて、中宮定子の在す禁中の御局なり。此の御局の西面の立部所にて、藏人頭兼權在中辨たる頭辨行

成卿が、或る女房と長時間立ち話したまひければ、已れ差し出で、其の女房は誰なりやと問へば、行成卿、こは中宮の御方の女房にて、辨の内侍なりと申さるゝに、何の御物語なりやは知り侍らねど、辨の内侍には大辨てふ善き人あれば、今にも大辨見え給は、内侍は御身を捨て、去り行かんものを、夫れとは知らで、然も睦じげに御物語せらるゝものよと申せば、行成卿甚く笑ひ給ひて、大辨と内侍との事を、誰か清少納言に言ひ聞かせたるにや、我今内侍に語る所は即ち其の事にて、たとひ大辨見えたりとも、我を見捨てなせぞ

たるを、つれに女はおのれ  
をよるこぶものゝためにか  
ほづくりす、士はおのれを  
しれる人のためにしぬさい  
ひたるさ、いひあはせつゝ  
申給ふ。さほたあふみの  
はまやなきなど、いひかは  
してあるに。」

と申し居るなりと戯れ給ふ。元來己れは、行  
成卿と親しければ、外の見る目にも、格別の  
間柄のやうに見らるれど、定まりたる夫婦に  
もあらず、又た猥りがはしき行なごして、世  
評に上りたることもなく、誰だ世の常の交際  
に過ぎざることは、皆人の知る所なれど、而  
かも行成卿の智慮深きを、己れ能く見知りた  
れば、尋常一様の人物にはあらずと、中宮に  
も申し上げ、中宮も亦た然なりと思召し給へ  
るを、行成卿、唐土の豫讓の言葉を引きて、  
女は己を悦ぶ者の爲めに容づくり、士は己を  
知る者の爲めに死すとて、暗に己れに對する

わかき人とは、たゞいひに  
くみ、見ぐるしきことども  
など、つくるはずいふに、  
此きみこそうたて見にくけ  
れ。こそ人のやうにぞきや  
うし、うたうたひなごもせ  
ず、けすさまじなごせしる。  
さらにこれかれに物いひな  
ごもせず。女はめはたてざ  
まにつき、眉はひたひにお  
ひかゝり、ばなばよこさま  
にありとも、たゞ口つきあ

心の中を、豫讓の言葉に言ひ合はせ給ひぬれ  
ど、己れには既に言ひ交はしたる遠江介則  
光あれば、行成卿の心を承引がたし。  
さるを年若き女房達は、行成卿と己れとの間  
柄を妬み憎み、見苦しく聞き苦しき事なごを、  
向き付けに言ひなごして、行成卿を誘るやう  
には、此の君こそは、世の常ならず見憎くけ  
れ、他の人のやうに、佛道に入りて讀經する  
ことなく、又た歌を謠ひて樂みもせず、氣難  
しき無風流者にて、なか／＼近付き難く、誰  
れ彼れの女房などに碌々物も言はずとて、惡  
しざまに嘲けれども、行成卿が女に對する理

いきやうづき、おさがひのした、くびなどをかしげにて、こゑにくからざらん人なん、おもはしかるべき。さはいひながら、猶かほのいさにくげなるは、心うしさのみの給へば、まいておさがひほそく、あいぎやうおくれたらん人は、あいなうかたきにして、御前にさへあしうけいする。物なごけいせせんさて、其はじめいひそめし人をたづね、しもなるをもよびのぼせ、つばれにもきていひ、里なるには文かきて、みづからもおほして、おそく

想として、たとひ目は堅に付き、眉は額を蔽ひ、鼻は盤坐かきて横ざまになりたりとも、唯だ口元に愛嬌ありて、頤の下豊肥かに、首筋細く、聲は珠を轉がすにも似たらんこそ善けれ、尤も顔の美醜は問はずとは言ひながら、も、餘りに醜きは心地善からずと申さるれば、儲こそ頤細く尖りて、愛嬌に乏しき女房達は、味氣なくも行成卿を敵視して、中宮の御前にさへ悪口讒言するなれ。されば行成卿が、中宮に申し上ぐる事を取り次ぎさせんにも、他の女房には更に申し入れず、始めより申し次ぎたる己れを探し尋ね、若し中宮の御前に侍

まゐらば、さなん申たるを、まうしにまゐらせよなどの給ふ。其人のさふらふなどいひいづれど、さしもうけひかすなごぞおほする。あるにしたがひさだめず、何事ももてなしたるをこそ、よき事にはすれど、うしろみ聞ゆれど、わがもこの心の本性のみの給ひつゝ、あらたまらざる物は心なりさの給へば、さてはゞかりなしさは、いかなる事をいふにかさ、あやしがれば、わらひつゝ、申よしなど人々にもいばるゝ、かうかたらふさならば、何かはづる。

らずして下に居る時なども、わざ／＼呼び上げ、或は己のが局にも来て、申次を頼まるゝもあり。時に家里に歸り居れば、文にても亦た自から來られなごしても申し語られ、折悪しく己れ不在なる時は、留守居なごに申し残し置かるゝには、清少の歸りなば、予が申したるやう中宮に參り啓せられよと傳へられたしと、言ひ含めさせ給へり。されど己れのみ中宮に申し次ぎ啓せずとも、他に尙ほ申し次ぐべき女房あるにと申せども、行成卿更に承引き給はざれば、是れと定めずとも、何事も有るまゝの物を用ひて、誰れ彼れを擇ばず、

見えなごもせよかしこの給ふを、いみしくにくげなれば、さあらんはえおもはじこの給ひしによりて、見え奉らぬさいへば、げにくくもぞなる、さらばな見えそきて、おのづから見つべきかりも、かほをふたきなどして、まごころに見給はぬも、まごころにそらごとし給はざりけりさおもふに、三月つごもり比、冬のなほしのきにくきにやあらん、うへの衣かちにて、殿上のさのぬすがたもあり。つごめて日さし出るまで、式部のおもさ、ひさしにれ

申し次がしめなば宜しかるべきにと、御注意迄に申せごも、そは予が本来の性質として、始より定めたるを改めんとはせず、將た又た心なるものは、然のみ容易く改まるべきものにあらすと申さるれば、さては孔子も過ちて改むるに憚るなかれと言はれしは、如何なる意味なりや、斯る場合にこそ思ひ出で給はめと怪み申すに、行成卿笑ひ給ひて、御身との間柄は最と親密なりとて、人に評判せらるれど、唯だ斯様に眞面目なる物語のみするに、何の耻づる所かあらん、さるを何故にや御身は顔をも見せず、耻ぢ隠れんとはするぞと申

たるに、おくのやり戸をあけさせ給ひて、うへのおまへ、宮の御前出さ給へれば、おきもあへすまごふを、いみしくわらはせ給ふ。からきぬをかみのうへにうちきて。このぬものも、なにもうづもれながらあるうへに、おはしまして、ぢんよりいでいるものなご御らんす。殿上人の露しらすで、よりきて物いふなごもあるか、けしきなみせそさわらはせ給ふ。さてたしせ給ふに、ふたりながらいざおほせらるれど、今かほなごつくるひてこそさてまゐら

されければ、否々人に耻づるにはあらず、顔の醜きは心憂しと仰せられたるにより、己れは醜ければ、見え参らせぬなりと答ふるに、左程までも自から醜しと思は、心憂くならんも憎げなれば、御身の心に任せて、我には顔を見せ給ふなど仰せつ、自然殿上にて出逢ふ折にも、行成卿其の目を蔽ひて、誠に己れを見給はざるこそ、前の言葉の虚言ならざりしよと思ひ居たるが、頃は三月の晦日、行成卿冬の直衣の着心地悪しきにや、唯だ袍のみにて殿上の宿直姿なりしが、此日の朝己れは、同じ中宮の御方の女房なる式部の御許と

す。いらせ給ひて、なほめでたき事ごもいひあはせてぬたるに、南のやり戸のそばに、き帳のてのさしいでたるにさはりて、すだれのすこしあきたるより、くろみたるもの、見ゆれば、のりたかゝぬたるなめりさおもひて、見もいれて、なほ事ごもをいふに、いさよくえみたるかほのさしいでたるを、のりたかなめり、そはさて見やりたれば、あらぬかほなり。あさましきわらひさわぎて、き帳ひきなほし隠るれど、頭辨にこそおはしけれ。見えたてまつ

共に、日の射し出づるまでも、庇の間に寝てゐたるに、奥の遣戸を開けさせ出で給ひたるは、畏くも主上の御前と中宮の御前なりければ、寝衣姿の起きもならず、さりとして寝たる儘にも居られず、如何はせんと思ひ惑ふを、両御所には甚く笑はせ給ふ。斯くてあるべきにあらねば、兎も角も唐衣を頭の髪の上より打ち着て、畧式ながらの禮儀のみはしつれど、臥具も其の儘に押し埋れながらある所へ、両御所共に入らせ給ひて、衛門の官人等の宿直所なる陣より、出入するを御覽するに、殿上人等は、此處に両御所の在すとは露知らず、

らじさしつるものをさ、いさ口をし。もろさにもあたる人は、こなたにむきてゐたれば、かほも見えず、たちいで、いみしくなごりなくも見つるかなごのたまへば、のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし。なごかは見じさのたまひしに、さつくくさほさいふに、女はれおきたるかほなん、いさよきさいへば、ある人のつばれにゆきて、かいばみして、又もし見えやすくてきたりつるなり。まだうへのおはしつる折からあるを、えしらざりけるよとて、

女房達の所に寄り来て、何事か物語る者もあるを、両御所の此處に在すとは氣色にも見せなせぞと仰せられて笑はせ給ふ。斯くて立ち歸らせ給ふに當り、式部の御許と己れとの二人ながら、いざ御供に参れよとの仰せなれど、寝姿の儘にては畏れ多ければ、唯今顔などを繕ひて後にこそ参り奉らめとて、庇の間に留まりながら、両御所の御後姿を見送り奉りて、式部の御許と共に、君が代の八千代を祝ぎまつれる時しも、何者か几帳の手の差し出でたるに觸れて、簾の少し開きたる間隙より、黒みたる物の見ゆるに、さては藏人則隆なる

それよりのちは、つぼれの  
すだれうちかづきなごし給  
ふめり。」

べしと思ひ悔りて見も遣らず、尙ほ式部と語  
り續け居たるに、最と能く見知りたる顔の差  
し出でたれば、そは則隆ならんとて見遣りた  
れば、豈計らんや則隆にはあらで、頭辨行成  
卿なりければ、顔も繕はざる寝起き姿を、見  
せ參らすことの淺ましと笑ひ騒ぎて、几帳引  
き寄せ隠れたれど、事既に遅く、顔見せ參ら  
すまじとしつるに、斯く見られ奉ることの口  
惜しさよ。されど式部の御許は、奥の方に向  
きて居たれば見えざりしが、今は行成卿、几  
帳の内に立ち顯はれ給ひて、残りなく顔見る  
を得たりと申されければ、已れ答ふるやう、

殿上のなだいめんこそ、猶

藏人則隆とこそ思ひ悔りたれば、油断して見  
られ侍れ、されど見まじとて目を蔽ひなごし  
つる御身が、なごかは斯くも熟々と見給ひし  
やと問ひ責むれば、女の寝起きたる顔は、格  
別に美しくそこを聞けば、唯今或る局に行きて  
覗き見したるが、此處にても亦た御身の寝起  
き顔の見えもやすらんと思ひて來りつるな  
り。○まだ主上の在しつる時より、此處に來て  
ありしを知らざりし事よとの給ひて、此の以  
後は巳が局の簾を打ち被きなごして、行成卿  
の入らせ給ふこと屢次なるに至れり。  
殿上人の名對面とて、宿直の侍臣等に巳が名

をかしかしけれ。御前に人さふ  
らふをりば、やがてさふも  
をかし。あしおさごもして  
くづれ出るを、うへの御つ  
ぼれのひんがしおもてに、  
みよおさなへてきくに、し  
る人のなのりには、ふさむ  
れつふるらんかし。又あり  
さもよくきかぬ人も、此  
をりにきよつけたらんは、  
いかおぼゆるん。なのり  
よしあし、きよにくよさだ  
むるもをかし。はてぬなり  
さきくほごに、たきぐちの  
弓ならし、くつの音そよめ  
きいづるに、藏人のいさ高  
くふみこほめかして、うし

を呼ばれて、主上に名乗り聞え上ぐるなるが、  
之を名謁と言ひて、見聞するに面白きものな  
り。中宮の御前に侍ふ折などは、己が名を問  
はれて各々名對面する聲の、近く聞えて可笑  
し今しも名對面のために、人々の参り上る足  
音して、ごやくと崩れ出る状の物騒しけれ  
ば、上の御局なる中宮の御室の東表にて、耳  
を塞ぎながら聞くに、知る人の名對面の聲は、  
ふと耳に入りて胸に轟くばかりなり。又た日  
頃は然る人ありとも知らざりし名を聞き  
は、珍らしき感あるべし。斯くて善き名なり、  
悪しき名なりと、聞き悪くも女房達の品評す

さらのすみのかうらんに、  
たかひさまづきさかやいふ  
あすまひに、御前のかたに  
むかひて、うしろさまに誰  
々が侍るさ、さふほごこそ  
をかしかしけれ。ほそうたかう  
なのり。また人々さふらは  
ればにや、なだいめんつか  
うまつらぬよしそうする  
も、いかにささへば、さば  
ることさし申に、さきよて  
かへるを、まさひるほきか  
すさて、君達のをしへけれ  
ば、いみじうはらだししが  
りて、かんがへて、たきぐ  
ちにさへわらはる。みづし  
所のおものだなさいふもの

るも可笑し。然る中に殿上人の名對面も濟み  
ぬと聞く程に、續きて禁中護衛の武士たる瀧  
口の名對面とて、弓絃を鳴らし、沓音高く來  
るに、中にも六位の藏人は、殊に沓音高く踏  
み鳴らして、清凉殿の良の隅の高欄に、其の  
藏人は高跪とか申すなる姿勢にて、主上の御  
方に向ひ、瀧口の面々には背向になりて、誰  
々が侍ると、一々其の名を問ひ、或は細く或  
は高き聲にて、名對面すること可笑しけれ。  
但し事故ありて参候せざる者は、藏人より其  
の理由を糺すに、名對面仕らぬ故障の次第を  
瀧口の答へ申すを、藏人聞き諒して歸るなる

に、沓をおきて、はらへいひのゝしるを、いさほしがりて、たが沓にかあらんえしらすさ、このもりづかさ、人々のいひけるを、やゝ、まさひろがきたなき物ぞや、そりに來てもいささわがし。

が、此處に左馬權頭時明の子息にて、源方弘と言へるは、極めて粗忽なる人なりければ、若き公達等は、面白半分に虚構して、方弘の名對面せざる故障の理由を聞かざりしと言へば、方弘案に違はず、粗忽にも立腹して、故障の理由を申し次がざりし瀧口の、解怠の罪を定めなごするものから、そは早まりたる事なりとて、其の真相を説き聞かされて、瀧口にさへ笑はれなごしつ。又た或時は、御厨子所の御物棚とて、清涼殿の西の庇にある御膳所に、粗忽にも沓を置きたれば、御膳所の別當なり預役などが、穢らはしとて清め拂して

わかくてよろしきをのこの、げす女の名をいひなれて、よびたるこそいさにくけれ。しりながらも、何さかや、かたもじはおぼえていふはをかし。みやづかへ所のつほれなごによりて、夜などぞおぼめかんは、あしかりぬべけれど、この

言ひ罵るを、主殿司及び其他の人々は、方弘を保護して、誰が沓ならん知り申さずと言ひ居たるに、稍ありて方弘自から其の沓を取りに來たり、そは已が穢き沓なりとて、怯めず憶せず言ひ現はすも、亦た最と騒がしかりき。年若き美男子が、下賤なる女の名を言ひ馴れて呼ぶは憎し。たとひ其の名を知りながらも、何とかや言ひしとて、其の名の半分を忘れたらんやうに言ふこそ宜しけれ。但し禁中に奉公する局などにては、夜は其の名を明に呼ぶべきものにて、片文字を臆氣に言ふは悪しかるべし。されど夫れも自から呼ばずとも、禁



もりづかさ、さらぬごころにてはさふらひ、藏人ごころにあるものをぬてゆきて、よばせよかし。手づからば、こゑもしるきに。はしたもののわらはばなごは、されごよし。」

中にては主殿司、其他にては侍か、但しは攝家などにもあるべき藏人所の者を連れ行きて、呼ばしめなば宜しかるべし。自身にて呼ぶは、聲をも知られて悪し。されど下司童女などの名は、言ひ馴れて呼ぶも差支あるべからず。年若き人と稚兒とは、肥え太りたるが善し。又た受領なごの國司は、地方の牧民官なれば、肥え太りて重々しきが善し。餘り瘠せ枯れたるは、短氣なるべく推量せらる。偕て牛飼の童の服装風采卑しげなる者を持てる主人こそ何よりも第一に悪し。同じ召使の童にても、牛飼ならぬ童は、車の後に付き添ひ行くもの

ごしりにたちてこそいけ。さきにつまもられいくもの、きたなげなるは心うし。車のしりに、こゑなる事なきをのこごもの、つれだちたるいさ見ぐるし。ほそらかなるをのこすぬじんなど見えぬべきが、くろきばかまのすそごなる、かり衣は何もうちなればみたる。はしる車のかたなごに、のごやかにてうちそひたるこそ、わがものさは見えれ。なほ大かたなりあしくて、人つかふはわるかりき。やれなご時々うちしたれど、なればみてつみなき

なれば、左迄で風采を擇ばざれど、牛飼の童は、車の前にある者なれば、服装風采の穢きは心憂きものなり。又た車の後に、身分卑しげなる男ごもの、連れ立ちて付き来るは見苦し。さては細やかに爽洒たる従僕隨身なごを召し連れずして、紫なごの裾濃なる袴も、汚れて黒ずみたるを穿き、狩衣の襟も袂も、萎れたるを着たる従者なごを、供に連れたるは見苦し。或は急ぎ走る車の後より、従者の緩々と付き添ひ行くは、我が従者とは見えす。殊に服装卑しき者を召し使ふは宜しからず。其の衣服は所々破れなごしつ、而かも着馴れ

は、さるかたなりや。「つかひ人などはありて、わらはべのきたなげなるこそは、あるまじく見ゆれ。」家にあたる人も、そこにある人さて、使にても、まらうさなごのいきたるにも、をかしきわらはのあまた見ゆるは、いさをかし。」

人の家のまへをわたるに、さふらひめきたる男、つちにをるものなごして、をのこまの十ばかりなるが、かみをかしげなる、ひきはへても、さばきてたるも。又いつゝ六つばかりなるが、

たれば罪もなく見ゆれど、是も召し使ふは宜しからず。又た小間使などの童女は、清げなるこそ然るべきに、形振りの穢きは悪し。其の家に居る者にて、使に出づる者にて、同じく其の家の召使の童なれば、立派にして奇麗なるが善く、來客の際などにも、善き召使童の多くあるが面白し。人の家の前を車にて過ぎ行くに、侍やうの男と下人などが、十歳ばかりと五六歳ばかりの男の子を遊ばせ居るに、其の十歳ばかりなるが、美しき髪して、引き延ばして結びたるも、亦は捌きて垂れたるも、何れにもあれ、其の

かみはくびのもさにかいくみて、つらいさあかうふくらかなる。あやしき男、しもさだちたる物など、ささげたるいさうつくし。車さゝめていだきいれまほしくこそあれ。」又さていくに、たきもの、香のいみじくかへたるいさをかし。」よき家の中門あけて、びらうげの車のしるうきよげなる、はしすはうの下すだれの、にはほひいさきよげにて、しちにたちたるこそめでたけれ。五位六位などの、下がされのしりはさみて、さゝのいさしるき、かたにう

五六歳なるが、髪を襟元に掻き包み、赤ら顔の豊頬なるにて、玩具の弓鞆などを捧げ持てる状の愛らしければ、抱き上げて、車に乗り入れま欲しく思はる。斯くて過ぎ行くに、馥郁たる薰物の香の、或る家より漏れ匂ふも面白し。立派なる家の中門を開けて、其處には白く清らかなる檳榔毛の車の、下簾の端は蘇芳に染めたる色の美しきが、榻に轆を掛けたるが見ゆるこそ芽出たけれ。五位六位などの人々が、下襲の裾を帯に挟みて、白糸付けたる笏を、肩の上なる首筋に挿しなごして、甲斐々々し

ちおきなごして、さかくい  
きちがふに、又さうぞくし、  
つばやなぐひおひたるすぬ  
じんの出る、いさつき  
ふくしくりや女のいさきま  
げなるがさし出て、なにが  
しごの、人やさぶらふなご  
いひたるをかし。」

【廿九】 たきは  
おさなしの瀧。ふるの瀧は、  
法皇の御らんじにおほしけ  
んこそめでたけれ。なちの  
たきは、くまのにあるがあ  
はれなる也。さるるきの瀧  
は、いかにかしがましくお  
そろしからん。」

く行き違ふもあれば、立派に装束して、矢筒  
なる壺胡籙を、脊に負ひたる隨身の出入する  
もあるは、其の高貴の家に似合はしく、さる  
程に厨女の、顔も身扮も善きが出で来りて、  
某殿の侍ふにやと、呼び尋ぬるも可笑し。

【廿九】 瀧は  
山城國大原の音無の瀧は、「戀ひわびぬ、ねを  
だに聞かん聲たて、いづこなるらん音無の  
瀧」と拾遺集に見えたり。大和の布留の瀧は、  
宇多法皇の行幸ありて、御覽せられたるこそ  
芽出たけれ。紀伊國熊野の那智の瀧は名高く、  
陸奥の轟の瀧は、定めて耳を聳する計りの恐

【三十】 川は  
あすか川、ふち瀨さだめな  
くはかなからむさ、いさあ  
はれなり。おほぬ川。いづ  
み川。みなせ川。みま川。  
又なに事を、さしもさかし  
くきけんさ、をかし。お  
さなし川、おもはすなる名  
さ、をかしきなり。ほそた  
に川。たまほし川。ぬき川。  
さばだ川、さいばらなごの  
おもひほするなるべし。な  
のりその川、なきり川も、  
いかなる名をさりたるにか  
さきかまはし。よしの川。

ろしき瀧なるべし。

【三十】 川は  
大和の飛鳥川は、淵瀨定めなき川にて、人生  
の榮枯盛衰の墓なさにも喩へられて哀れに、  
「世の中は、何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ、  
今日は瀨となる」と古今集にも見えたり。山  
城にては大井川、泉川、水無瀨川、耳敏川な  
ごあり。泉川は崇神天皇の御世に、武埴安彦  
の叛ありて、官軍此の川を挟みて相挑みしよ  
り、舊稱の輪韓川を改めて挑川と言ひしを、  
後に訛りて泉川と言ふに至りしとぞ。耳敏川  
は、朱雀門前にて二條の南にあり。其の耳敏

あまの川、このしたにもあ  
るなり、七夕づめにやどか  
らんさ、なりひらがよみけ  
んも、ましてをかし。

きは、賢しくも何事を聞くならんと思はれて  
可笑しく、古今六帖に貫之の詠める「百敷の、  
大宮近き耳敏川、ながれて君を、聞きわたる  
かな」と言へる歌あり。紀伊國牟婁郡の音無  
川は、思も寄らぬ面白き名にして、拾遺集に  
「おとなしの川とぞつひに流れいづる、いは  
で物思ふ人の涙は」とあり。備中の細谷川、  
陸奥の玉星川、美濃の貫川、山城の澤田川。  
此の中、貫川と澤田川は、催馬樂とて神樂歌  
の謠物にて、「ぬき川の瀬々の、やはら手枕  
やはらかに、寝る夜はなくて、おやさくる」  
云々と言ひ、又た「澤田川、袖浸くばかり淺

【卅一】 はしは  
あさむつの橋。ながらのは  
し。あまびこの橋。はまな  
のはし。ひさつ橋。さの

けれど、はん淺けれど、くにの官人や、高橋  
わたす」とあるを思ひ出さる。名のりその川、  
陸奥の名取川などは、如何なる故に、斯る名  
を付けたるにや聞まほし。大和の吉野川、天  
の川も名高し。但し天の川は、大空に漲り巨  
る銀河をも言ふなれど、下界にも大和に天の  
川あり、河内國枚方の北にもありて、在原業  
平朝臣が、「狩くらし七夕づめに宿からん天の  
川原に我は來にけり」と詠めるも面白し。  
【卅二】 橋は  
あさむつの橋は、催馬樂に淺水とあり、水を  
むつに訛りたるにや。此の橋は、飛驒にも越

舟橋。うたじめの橋。さ  
ろきのはし。ながわの橋。  
かけはし。せたの橋。木曾  
路のはし。ほりえの橋。か  
さ、ぎのはし。ゆきあひの  
橋。なのうきはし。やま  
すげの橋。一すぢわたした  
る棚橋。心せばければ、名  
をきゝたるをかし。うた  
れの橋。」

前にもありて、名所に數へらる。長柄の橋は  
攝津にありて、古今集の序にも見えたり。あ  
まびこの橋は、今考ふべからず。遠江の濱名  
の橋。攝津國難波の浦の橋、此の橋は古今六  
帖に、「津の國の難波の浦の橋、君をしあ  
へばあからめせず」とあり。上野の笹の舟  
橋。山城の嵯峨の歌結の橋。大和の轟の橋、  
但し堀河百首に、「我妹子に、あふみなりせば、  
さりとはか、ふみも見てまし、轟の橋」とあ  
れば、又た近江にありとも見ゆ。小川の橋は、  
陸奥とも筑紫とも言ふ。棧橋は、飛驒にある  
を言ふなるべし。近江の勢多の橋。信濃の木

【卅二】 里は

曾路の橋。攝津の堀江の橋。鵠の橋は、攝津  
とも周防とも、又た土佐とも言ふ。但し淮南  
子に、烏鵲河を填めて橋を成し織女を渡すと  
ありて、天の織女星が、銀漢を渡るの橋に擬  
へるなり。ゆきあひの橋も、亦た鵠の橋と言  
ふに同じく、古今六帖には、「中空に君もなり  
けん鵠のゆき會の橋にあからめなせそ」と見  
えたり。小野の浮橋は、所定かならず。下野  
の山菅の橋は、唯だ一筋渡せる棚橋にて心狭  
ければ、名を聞かへ可笑しく、大和のうた  
ゝねの橋も、亦た可笑し。

【卅二】 里は

あふさかの里。ながめのさ  
さ。いさめの里。人づまの  
ささ。たのめの里。あさ風  
の里。夕日の里。さほちの  
ささ。伏見のささ。ながめ  
の里。つまさりの里。人に  
さられたるにやあらん。我  
さりたるにやあらんいづれ  
もをかし。

逢坂の里は、近江にあり。ながめの里、いさ  
めの里、人妻の里は、今皆明ならされど、い  
さめの里は古今六帖に、「東路のいさめの里は  
初秋の長夜を獨りあかす我名ぞ」と見えたり  
ば、今の東海道筋なるべし。信濃のたのめの  
里。大和の朝風の里。丹後の夕日の里。大和  
の十市の里但しとほちは、嵯峨の里なりとも  
言ふ。山城の伏見の里、又た大和にも伏見の  
里あり。長井の里も、亦た大和にも攝津にも  
あり。妻取の里は、妻を人に取りられたるにや、  
將た又た我の取りたるにや、何れにても可笑  
し。

【卅二】 草は

さうぶ。こも。あふひいさ  
をかし。祭のをり、神代よ  
りしてさるかざしとなりけ  
ん、いみじうめでたし。も  
のよさまもいさをかし。お  
もだかも、名のをかしき也。  
心あがりしけんさおもふ  
に。みくり。ひるむしろ。  
こけ。こだに。雪まのあな  
草。かたばみ。あやのもん  
にても、こさのよりはを  
かし。あやふ草は、きしの  
ひたひにおふらんも、げに  
たのもじけなくあはれな  
り。いつまで草は、おふる  
所いさばかなくあはれ也。

【卅三】 草は

菖蒲。莖細長き水草の蔭。葵は殊に芽出たし。  
賀茂の祭に葵を簾などに懸け、又た冠に挿し  
加へ、庶人に至るまで挿頭とするは、遠き神  
代の昔に始まりしと見えたり。圓き五稜を作  
したる葉の間に、白くして黄紫を帯べる五瓣  
の花を、開く姿の優しくて面白し。澤瀉は、  
面高に通じて、心驕慢なりと思はるゝさへ、  
其の名いと可笑し。三稜草は水澤の地に多く、  
其の葉、莖、花、實、共に三稜にして、莖は  
光滑に、花は黄紫色なり。蛇床子は、一に濱  
人參と言ふ。苦。鳶の一種なる苦丹。雪間に

岸のひたひよりも、これはくづれやすげなり。まことのいしげいなごには、えおひすやあらんもおもふぞわろき。事なし草は、思ふことなきにやあらんもおもふもをかし。又あしき事をうしなふにやさ、いづれもをかし。しのぶくさいさあはれなり。屋のつま、さし出たる物のつまなどに、あながちにおひいでたるさま、いさをかし。よもぎいさをかし。つばないさをかし。はまちの葉は、ましてをかし。まるこすげ。うきくも。あさぢ。あなつら。さく

芽出す青草など面白く、酢漿草は小き草にて、其の葉の形を紋所として、綾などの衣に付くは、他の紋所よりも面白し。危草は、岸などの断崖絶壁に、危く懸りて生る状の、如何にも哀れなり。いつまで草は、常春藤とも亦た佛甲草とも言ひて、壁などの間に生る状の、慕なく哀れにて、岸の額の断崖に其の根も危く懸る危草よりも、壊れ易き壁に生るこそ、更に墓なけれ。殊に石灰にて塗りたる白壁には、生へざるべしと思ふに付けて、尙も哀れなり。但し堀河百首には、「壁におふる、いつまで草の、いつまでも、枯れずとふべき篠原

ささいふ物は、風にふかれたらん音こそ、いかならんさ、おもひやられてをかし。なづな。ならしげ、いさをかし。はすのうき葉のらうたけにて、のどかにすめる池のおもてに、おほきなるさ、ちひさきさ、ひるごりたゞよひてありく、いさをかし。さりあげて物おしつけなごして見るも、よにいみじうをかし。やへむぐら。山すげ。やまぬ。ひかけ。はまゆふ。あし。くすの風にふきかへされて、うらのいさしろく見ゆるをかし。

の里」と見えたり。事なし草は、思ふ事なきによりて、此の名あるにや又た物忌などを付けて、簾冠などに着くるものなれば、悪しきを拂ふにやと思はれて可笑し。古今六帖に、「こりすまの松にはいと年ふれど、事なし草ぞ生ひ茂りける」又た一人にのみ、いはれの池のあやなくに、ことなし草の宿にさそはん」又た「君みてし、ほどのふる屋のひさしには、あふことなしの草ぞ生ひける」など見えたり。忍草は、垣衣とも瓦草とも書かる。家の軒端、又は差し出でたる物の端などの、僅かなる所にも強ひて生ひたる状、最と可笑

し。古歌には「獨りのみ、ながめふる屋の妻なれば、人を忍ぶの草ぞ生ひける」なご詠まれて、多くは男女の間に懸けられたり。蓬。茅花も可笑しく、濱茅の葉は、普通の茅よりは殊に可笑し。荆三稜。蘋萍。淺茅。青鞭草。木賊の風に吹かるゝ音は、如何に面白からんと思はる。薺。檜柴も面白し。蓮の葉の池に浮きたるは愛らしく、池の面長閑に水靜なる所、大小の蓮葉廣り漂ふ狀の面白ければ、其の二つを取り上げて、頭に被きなごして見るも可笑し。八重葎。山菅には實なければ、萬葉に、「山すげの實ならぬことを我により、

【卅四】集は古萬葉集。古今。後撰。

いはれし君は誰と寝ぬらん」と見えたり。山蘭。日蔭草。俗に狐の櫛。濱木綿。之は芭蕉に似たる草にて、紀伊又は伊勢の海濱に生るものなり。葦。葛。殊に葛の葉の風に翻へりて、白き葉裏の見ゆるは面白し。

【卅四】集は

古萬葉集とは萬葉集の事にて、撰者は橘諸兄とも大伴家持とも言ふ。新撰萬葉集、菅家萬葉集などに對して、後世の人は古萬葉集と言へり。歌集にては我國最古のものなり。古今和歌集は、延喜の御世に當り、紀貫之以下四人の撰に係り、歌風も亦た萬葉集とは其の趣



【卅五】 哥の題は

みやこ。くす。みくり。こま。あられ。さよ。つぼすみれ。ひかげ。こも。たかせ。なし。あさぢ。しほ。あをつら。なし。なつめ。あさがほ。」

【卅六】 草の花は  
なでしこ。からのばさら

を異にせり。後撰和歌集は、天曆五年梨壺の五人之を撰す。以上を三代集と稱せり。但し拾遺集の撰成りし後は、萬葉を別として、古今、後撰、拾遺を、三代集と言ふに至りぬ。

【卅五】 歌の題は

普通一般の歌題の外に、隱題にて詠むものは、都、葛、水栗即ち三稜草、駒、霞、笹、壺莖、羅即ち日蔭草、蔣、高瀬即ち川の瀬の淺き所、鴛鴦、淺茅、芝、青鞭草、梨、棗、牽牛花、等なり。

【卅六】 草の花は

瞿麥又た撫子に作る。唐土のは言ふまでもな

也。やまごのもしいさめでたし。なみなへし。ききやう。菊のさころくうつろひたる。かるかや。りんどうは、枝ざしなごもむつかしげなれど、こも花みな霜がれば、てたるに、いさ花やかなる色あひにて、さし出たるいさをかし。わざさこりたて、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげ也、名ぞうたげなる、かりのくるはなごも、しにはかきたる。かにひの花、色はこかられど、藤の花にいさよく似て、はるさ秋ささく、をかしげな

く、我國のも亦た愛でたし。女郎花。桔梗。菊の花の所々變り色になりたるも愛でたし。古今集に「秋をおきて、時こそありけれ菊の花、うつろふからに色のまされば」と見ゆ。刈萱も好し。龍膽は枝振り宜しからねど、外の花は皆霜に枯れ果てたるに、獨り鮮麗なる花の色が目立ちたるは面白し。鎌柄の花は、殊更に取りたて、人並に褒むるも如何なれど其の花は愛らしきものなり。唯だ鎌柄なごど名づけたるは面白からねど、雁來紅とも字には書かれ、俗に葉鶏冠とも言はる。岩菲は又た仙翁花と言ふ、藤の花に似たれど色薄く、

り。つぼすみれ、すみれ、おなじやうの物ぞかし。おいていけば、おなじなごうし。しもつけのはな。夕がほは、あさがほに似て、いひつゞけたるもをかしかりぬべき花のすかたにて、にくきみのありさまこそ、いさ口をしけれ。なごてきはたおひ出けん、ぬかづきなごいふものゝやうにだにあれかし。されど猶夕がほさいふ名ばかりはをかし。あしの花、さらに見ごころなけれど、見てぐらなごいはれたる、心ばへあらんさおもふにたゞならず、もえし

春秋の二季に咲くも可笑し。壺堇は、普通の堇と能く似たるものなれど、古い長けたるは、何れを夫れと見分け難きまで同じなるは心憂し。霜黄楊の花は、薄紫にて小手鞠に似たり。拾遺集に、「植ゑて見る君だに知らぬ花なれば我しもつげん事のあやしき」と詠めるは此の花なり。夕顔は朝顔に似たる花にて、朝夕と言ひ續けたるも面白けれど、其の實は鳴瓢とて、形状見憎きこそ口惜しけれ。如何で斯る見憎き形状の實を結ぶにや、せめては酸漿の實のやうに、愛らしきものにてあれかしと思はる。されど夕顔と言へる名のみは、最と面

も、すゝきにはおさられど、水のつらにて、をかしうこそあらめと覺ゆ。これにすゝきをいれぬ、いさあやしき人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、すゝきにこそあれ。ほさきのすはうにいさこきが、朝きりにぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いさ見ごころなき。色々にみだれ咲たりし花の、かたもなくちりたるのち、冬のすゑまでかしらいさしろく、おほごれたるをもしらで、むかしおもひ出がほになびきて、かひ

白し。蘆の花は、別段に見所とては無けれど、其の形の御幣に似たれば、又た御幣とも言はる。は、神前にあらん心ばへごも思はれて、尋常ならず面白く、其の蘆の芽の萌え出でたるは、薄にも劣らずと見られ、水邊に差し出でたるなども可笑し。既に蘆を書き記せる上からは、薄をも記さねば、似合はしからずと言ふ人もあるべければ、即ち書き加ふべし。そも秋の野の面白き景色は、専ら薄あるが爲めにして、穂先の色は濃き蘇芳にて、之を眞蘇芳の薄と言ふなるが、朝霧に濡れて、微風に打ち靡ける状の、左程に面白きものは外に

ろぎたてる人にこそ、いみ  
じうにためれ。よそふる事  
ありて、それをしもこそあ  
はれさもおもふべけれ。秋  
はいさいろふかく、えだた  
をやかにさきたるが、朝つ  
ゆにぬれて、なよ／＼さひ  
ろこりふしたる。さをしか  
の、わきてたちならすらん  
も心こそなり。からあふひ  
は、さりわきて見えれど、  
日のかげにしたがひてかた  
ぶくらんぞ、なべての草木  
の心さも覚えてをかしき。  
花の色はこかられど、さく  
山ぶきには。いはつゝじも  
こそなる事なけれど、をり

はあらず。但し秋の末になりて、穂の長けた  
る頃は、見所更に無く、種々に咲き亂れたる  
花も、既に枯れ落ちたる後、薄の穂のみは、  
白くなりたる儘にて、冬の末までも亂れ廣り  
たる状は、猶ほ白髪の老人が、其の昔紅顔の  
美少年たりしを思ひ出顔に、搔き廣がり立て  
るにも然も似たれば、白く長けたる薄の穂を、  
老果てたる白髪の老人に喩へんこそ哀れな  
れ。萩は花の色濃くて、枝も撓やかなるまで  
咲き盛り、朝露に濡れて、靡き廣がり伏した  
るも面白く、小男鹿の寄り添ひて、其の枝を  
鳴らすらんと思はれて、格別に面白き心地ぞ

もてぞ見るさままれたる、  
さすがにをかし。さうび  
は、ちかくて、枝のさまな  
どはむつかしけれどをか  
し。雨などは行たる水の  
つら、くろきのはしなごの  
つらに、みだれさきたる夕  
ばへ。

せらる。されば後撰集にも、貫之が「行かへ  
り折りてかざ、ん朝な／＼鹿たち鳴す野邊の  
秋萩」、又た「さを鹿の立ち鳴らす小野の秋萩  
に、おける白露われもけぬべし」と詠めり。  
さを鹿は、牡鹿と言ふに同じ。蜀葵は、又た  
花葵とも言ふ。別段取り立て、言ふ程の見所  
あるにあらねど、日影の移るに従ひて、其の  
方向に傾くこそ、一般の草木と異なる心ばへ  
の面白けれ。花の色は、白も紅も紫もありて  
濃からねど、咲く山吹の花には劣らずと見ゆ。  
千載集に、「あふひ草、照る日は神の心かな、  
影さす方にまづなびくらん」とあり。岩蹲躑

【卅七】おぼつかなき物  
十二年の山ごもりのほうしのめおや。しらぬ所に、やみなるに行たるに、あらは

も亦た特別なる花ならねど、後拾遺集に和泉式部が、「岩つゝし、折りもてぞ見る、兄子が着し、紅そめの色に似たれば」と詠みたるは、流石に面白し。薔薇は、人の親しく見馴れたるものにて、其の枝に針などありて煩はしけれど、雨降り止みたる水の邊、又は黒木のまゝにて削られざる階段の邊に咲き亂れたるが、夕榮に一際美しく色増したるこそ面白い。

【卅七】おぼつかなき物  
後撰集の詞書の中に、「男の、ほど久しうありて、まうできて、御心のいとつらさに、十二

にもぞあるさて、火もさもさで、さすがになみあたる。いまいできたるものゝ心も知ぬに、やんごさなき物もたせて、人のがりやりたるに、おそくかへる。ものいはぬちこのそりくつがへりて、人にもいだかれすなきたる。くらきにいちごくひたる。人のかほ見しらぬもの見。」

年の山籠りしてなん、久しう聞えざりつる」云々とありて、比叡山などに法師の立籠るを、其の父なる人は、行きて見るべからんも、母なる人は、女の身の登山も叶はず、十二年の永の月日を待ち暮らすこと。如何ばかり心もどなく、覺束なからんこそ思はるれ。闇夜に知らぬ人の家に行きたるに、燈火明くては、知らぬ人々の餘りに現はにて、相見ても極り悪かるべしとて、火も點さずして、並び居たるこそ覺束なけれ。また心も知れぬ新參の召使人に、大切なる物を持たせて、人の許に遣りたるに、其の歸り

【卅八】 たとしへなき物

來ることの遅きは、覺束なく心もとなし。  
まだ物も言ひ出でざる乳兒のむつかりて、人にも抱かれずして泣き叫べるは、賺せどもあやかせども、聞き入るべき術もなく、覺束なきものなり。  
莓は美しき色なれど、暗所にて食ひたるは、色も見えず覺束なし。  
祭の物見などにも、其の式に列なる供人伶人などを見知りてこそ、一入面白かるべきに、見知らぬ顔の人のみにては、興も薄くて心もとなし。

【卅八】 たとしへなき物

夏さ冬さのよるさひるさ。  
雨ふるさ日てるさ。わかき  
さ老たるさ。人の笑ふさは  
らだつさ。くろきさしろき  
さ。思ふさにくむさ。あわ  
さきはださ。雨と霧さ。お  
なじ人ながらも、心ざしう  
せぬるは、まこさにあらぬ  
人さぞおぼゆるかし。」

さきは木おほかる所に、か  
らすのれて、夜中ばかりに  
いれさわがしくおちまご  
ひ、木づたひて、れおびれ  
たるこゑになきたるこそ、  
ひるの見めにはたがひてを  
かしけれ。」

喩へん方なく變りたる反對の物は、夏と冬。  
夜と晝。雨天と晴天。幼者と老人。笑と怒。  
黒色と白色。慕ひ思ふと憎み思ふ。藍色と  
黄栗は、能く似て全く異なり。雨と霧とも亦  
た然り。同じく人なれども、人心の好悪。人  
情の反覆は、今も昔に異ならずして、人面獸  
心なるは、人にして人に非ずとぞ思はる。  
四季色變へぬ常盤木の、多く立ち籠めたる林  
に、峙を定むる鳥の群が、夜中寢惑ひて騒ぎ  
立て、木より木に、枝より枝に飛び傳ひなが  
ら、怖ぢ驚きて寢惚け聲に鳴きたるこそ、晝  
見たる憎げなる状とは反對に、最と可笑しき

しのびたる所にては夏こそ  
をかしけれ。いみじうみじ  
かき夜の、いさばかなくあ  
けぬるに、つゆれずなりぬ。  
やがてよるづの所あけなが  
らなれば、涼しう見わたさ  
れたり。猶いまますこしいふ  
べき事のあれば、かたみに  
いらへどもするほどに、た  
ゝぬたるまへより、からす  
のたかくなきてゆくこそ、  
いさげそうなる心ちしてを  
かしけれ。」

ものなれ。  
忍びて人に逢ふには、夏の夜を最も興ありと  
すべし。甚く短夜の明け易き墓なさに、少し  
も寝る間さへなく、四方開け放したるまゝな  
れば、曉の景色いと涼しう見渡さる。今尚ほ  
少し話すべき用事あれば、互に物語り合ひて  
は其の返答などする間に、直ぐ目の前より鳥  
の聲高く鳴きて飛び行くこそ、忍び人の現は  
なる心地して可笑しけれ。  
冬の極めて寒き夜、相思の人と同衾して、寢  
具の中より曉告ぐる鐘の音を聞けば、物の奥  
底にて鳴るやうなるも可笑しく、鶏の聲も曉

をかし。鳥のこゑも、はじ  
めははれのうちに口をこめ  
ながらなけば、いみじう物  
ふかくさほきが、つきく  
になるまゝに、ちかくきこ  
ゆるもをかし。」

遠き頃は、羽の中に口を籠めながら鳴くもの  
から、甚く物深く幽に聞ゆれど、一番鳥二番  
鳥と、次第に曉に近づくに従ひて、其の聲も  
亦た近く鮮明に聞ゆるも可笑し。  
我に懸想して來る人は言ふも更なり、唯だ物  
語のみに來る人、然もなくとも自から入り來  
る人の、簾の内にて許多の女房達と物語しつ  
ゝある所に来りて、急には歸る様子もなきを、  
其の供人なる男又は童僕が待ち侘びて、斧の  
柄も朽ちなんと言ひながら、厭はしく長々と  
欠なごして、此方を眺めつゝ、あゝ待ち遠き  
ことかな、煩惱苦惱とは此の事なり、今は更

て、みそかにさおもひてい  
ふらめども、あなわびし、  
ぼんなくうかな、いま  
は夜中にはなりぬらん  
ごいひたる、いみしう心づ  
きなく、かのいふものはさ  
かくもおぼえず、此ぬたる  
人こそ、をかしう見き、つ  
る事も、うするやうにおぼ  
ゆれ。又さばいるにいで、  
はえいはずあるさ、たかや  
かにうちいひうめきたる  
も、したゆく水のさいさを  
かし。たてしきみすいがい  
のもさにて、雨ふりぬべし  
なごきこえたるもいさに  
くし。よき人きんだちなご

開けて眞夜中にもなりぬべしと、歎息の聲を  
發するに、自分にては密かに言へる考ならん  
も、此方へは能く聞えたるこそ、甚く不謹慎  
不注意と言ふべし。其の斧の柄の朽ちなんと  
は、支那の晋の國に王質となん言へる人、石室  
山に往きて唯だ一局の圍碁を見てある間に、  
長き時日を過したるを知らず、斧の柄の朽ち  
たりし事の、述異記に見えたるを引きけるに  
て、古歌にも「斧のえは朽ちなば又もすげか  
へん憂世の中にかへらずもかな」とあり。但  
し下男下僕の事なれば、如何に歎聲を發した  
りとて、我等の氣にも懸げざれど、斯る下僕

のさもなるこそ、さやうに  
はあられ、たゞ人なごさぞ  
ある、あまたあらん中にも、  
こゝろばへ見てぞ、ぬてあ  
りくべき。」

を召し具したる主人こそ、日頃は此の人の言  
行を、優れたりと見聞きしたる感興も、今は  
醒め果つる心地せらるれ。又た其の供人が、  
己等以外の者のやうに、待ち侘びたる様子を  
顔色に見せもせず、煩惱苦惱なりなご、口に  
も言はずとて、而かも大聲に呻き、此方へ聞  
えよと計りに獨言するは、古歌に「心には、  
したゆく水の、なきかへり、言はで思ふぞ、  
言ふにまされる」とあるが如く、表面には歎  
かねども、下ゆく水の隠れたる心は、現はに  
言ふよりも却りて不都合なり。或は又た立蒔  
の邊、透垣の許なごに居ながら、雨降り來る

【卅九】 ありがたきもの  
しうさにほめらるゝむこ」  
又しうさめにおもはるゝよ  
めのきみ。ものよくぬくる

べしと言ひて、其の主人を驚かし促す供人な  
ご最と憎し。貴人公達なごの供人には、斯る  
者はあるまじけれご、通常一般の人の供人に  
は、往々にして之れあるものなれば、多くの  
召使の中にて、能く其の心ばへを見立て、召  
し連れざれば、主人自からの耻となるべきな  
り。

卷の四

三十九より四十四に  
至る六段より成る

【卅九】 ありがたきもの  
舅に能く事へて、其の意に適ひ褒めらるゝ、聲  
姑に此の嫁こそはと、大切からるゝ、若嫁。銀

しろかれのけぬきしうそ  
しらぬ人のすさ。露のくせ  
かたはなくて、かたち心ざ  
まもすぐれて、世にあるほ  
ごいさゝかのきすなき人。  
おなじ所にすむ人の、かた  
みにはちかほし、いさゝか  
の隙なくよういしたりと思  
ふが、つひに見えぬこそか  
たけれ。物語しふなご、  
かきうつすほんに、すみつ  
けの事。よき双紙などは、  
いみしく心してかけごも、  
必こそきたなげになるめ  
れ。男も女も法師も、ちぎ  
りふかくて、かたらふ人の  
末まで、中よき事がたし。

の毛抜の毛の能く抜くるもの。元來銀の毛抜  
は、鐵に及ばぬものなればなり。主人の悪口  
を言はぬ従者。露ほごも性癖なく、純朴清廉  
にして、容貌精神共に人に優れ、世に處して  
毫も缺點瑕瑾なき人。人は馴れては敬意を失  
ひ、耻をも忘れ易きものなるに、同じ所に住  
居して、互に耻ら慎み、聊かも油断隙間なく  
敬意を表して、曾て輕侮無耻の舉動なき者。  
物語本、歌集などを書き寫すに、美麗にして  
立派なる本には注意を拂へご、大方は墨つけ  
なごして、汚し損ふものなり。又た男女の間  
に限らず、俗世間を離れたる法師にても、親



つかひますんぞ。かいれりうたせたるに、あなめでたさ見えておこす。」

内のつぼれば、ほそごのいみじうをかし。かみのこしごみあげたれば、風いみじうふき入て、夏もいさ涼し。冬は雪あられなごの、風にたぐひて入たるもいさをかし。せばくてわらはべなごののぼりあたるもあしければ、びやうぶのうしろなごにかくしすゑたれば、こ

ご所のやうに聲たかくわらひなごもせで、いさよし。」

ひるなごもたゆまず心づかひせらる。夜るはたまして、いさゝかうちさくべくもなきが、いさをかしきなり。くつのおさの夜ひさよ聞ゆるが、さまりて、たゞおまび一つしてたゞくが、其人なゝりさ、ふさしるこそをかしかれ。いさ久しくたゞくに、音もせれば、れいりにけるさと思ふらん。れたくすこしうち身じろくお

密なる交際を續けて、生涯を和合圓滿に送る者。紅の練絹を打たせて光澤を出させたるに、善き使の者之を齎し來りて、嗚呼誠に立派なる衣なりと、心から褒め行く者など。皆々世にも有り難く稀なるものなり。

禁中の局にては、御廊下なる細殿こそ、最も面白けれ。其の細殿の上の小蔀を上げれば、風吹き入りて、夏の炎暑にも涼しさを覺え、冬は風と共に、雪霰なごの入り來るも興あり。家里的の童女など、偶々局に遊び來れるが、此の細殿に登り居なごすれど、狭ばくて危くもあり、見る人にも悪ければ、屏風の蔭に隠し

坐らせたるに、禁中なれば、童女ながら遠慮して、他の所のやうに、高聲にて笑ひなごせず、最も静に慎しやかなるは、健氣にて善し。宮仕する女房の我等は、晝夜共に心に油斷も出來がたく、晝は勿論心づかひに撓もなければ、夜は尙更ら心を弛まし難きぞ面白し。禁庭を行き交ふ人の沓の音は、夜もすがら間斷なく聞ゆるに、不圖其の沓音の止りて、己が局の戸を、密かに拊指一本にて叩けば、あゝ某の忍び來るぞと知らるゝも可笑し。久しく叩けごも、知らず顔に打ち捨て置けば、局の内静かなるを、寝入りたりと思ふなるべし。

と、きぬのけばひも、さな  
よりさおもふらんかし、あ  
ふぎなごつかふもしるし。  
冬は火をけに、やをらたつ  
るひばしのおさも、しのび  
たれごきこゆるを、いさご  
たゝきまさり、こゑにても  
いふに、かげながらすべり  
まりて、きくわりもあり。  
又あまたのこゑにて、詩を  
すし歌なごうたふには、た  
ゝかれごまづあけたれば、  
こゝへさしもおもはぬ人も  
たちさまりぬ。いるべきや  
うもなく、たちあかすも  
をかし。みすのいさあをく  
をかしげなるに、きちやう

されど餘りに叩くことの妬くて、身動きなご  
し、衣づれの音など立つれば、戸の外にては、  
未だ寝入らぬものと推量して、扇づかひの氣  
色ばみて聞ゆる音も著し。冬の夜は、火鉢に  
立つる火箸の音さへも静にすれど、戸の外の  
人に聞ゆれば、いよく強く叩き、終には聲  
を出して、此處開け給へと言ふにぞ、密と戸  
に寄り往きて、内蔭より其の人の状を聞耳立  
つることもあるなり。又た多人數にて、詩を  
吟じ歌を謠ひなごして、局の前を通り行く時、  
戸を叩かねども、其の詩歌の吟詠に感じ打た  
れて、此方より先づ戸を開ければ、此處へは

のかたびらいさあさやか  
に、すそのつますこしうち  
かさなりて見えたるに、な  
ほしのうしろにはころびた  
えすきたる君たち、六位の  
藏人のあをいるなごきて、  
うけばりて、やり戸のもご  
なごに、そばよせてえたて  
らす。へいの前なごに、う  
しろおして、袖うちあはせ  
てたちたるこそをかしかし  
れ。一またさしぬきいさこ  
う、なほしのおさやかにて、  
いるくのきぬごも、こぼし  
出たる人の、すをおしいれ  
て、なからいらたるやうな  
るも、さより見るはいさを

立ち寄るべしとも思はざりし人も、義理合に  
て立ち止りはしたれど、内に入るべき様子も  
なく、戸の外に長く立ち過すも召笑しく、さ  
ては局の内には、御簾の色青く美しく、几帳  
に用ひたる布帛の色鮮美にして、坐を占め居  
る女房の、衣の裾の襖の重なりたるが、几帳  
の許より少し見えたるなご艶なるに、直衣に  
綻のあるをも知らで着たる公達、黄にして青  
みある麴塵の袍を、上衣にせる六位の藏人な  
ごは、爲たり顔して遣戸の側近く立ちも得せ  
ず、極めて遠慮がちに、壁を背にして袖搔き  
合せ、慎み立ちたるこそ可笑しけれ。或は濃

かしからんを、いさきよげなるすゞりひきよせて文かき、もしは鏡こひて、びんなどかきなほしたるも、すべてをかし。三尺のきちやうをたてたるに、もかうのしもは、たゞすこしぞある。さにたてる人、内にゐたる人さ、物いふかほのもさに、いさにくゝあたりたるこそをかしかれ。たけのいさたかく、みじかゝらん人なごや、いかゞあらん。なほよのつれのは、さのみぞあらん。

紫の指貫を穿き、色鮮美なる直衣を着て、指貫の脇、又は袖口などより、色々なる下襲の見えたる人など、半身を簾の内へ入れたるは、外より見れば面白かるべきに、更に清げなる硯引き寄せて、半身を差し入れたるまゝ、文かきなごし、又は鏡を貸し給へとて、鬢の毛を掻き繕へるなどの状、すべて可笑しく、三尺の凡帳を立てあるに、簾を巻き上げたれば、其の簾に縁取りしたる帽額の下は、凡帳の高さと少し離れたる計りなれば、戸の外の人と、内に居る人との物語る顔の處に、恰當其の隙間の當るも可笑し。されど脊丈の勝れて高さ

ましてりんじのまつりのでうがくなごは、いみしうをかし。さのもりの官人などの、ながき松をたかくともして、くびはひき入てゆけば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしうあそび笛ふき出て、心こに思ひたるに、君たちの日のさうぞくして、たちさまり物いひなごするに、殿上人のするじんごもの、さきをし

人は、簾にて遮ぎられ、低き人は、几帳に隔てらるべし。通常の脊丈の人こそ、簾と几帳の間にて、其の顔を見合し得べし。殊に禁中にて面白きは、十一月に行はる、賀茂の臨時祭の調樂にて、樂人舞人などを、先づ試み整へらるゝことなり。此の時、主殿司の官人などは、長き炬火を點して高く捧げ、寒き夜なれば、首を縮めて襟に引き入れ歩めば、炬火の先を、物に差し付けん計りなるが、即がて管絃始まりて、笛の音面白く吹き出づれば、心も常に異なりて覺ゆるに、調樂に參る公達は、何れも皆束帯にて、晝の装束した

のびやかにみじかく、おのが君たちのれうにおひたるも、あそびにまじりて、つれに似ずをかしようきこゆ。夜ふけぬれば、猶あけてかへるをまつに、君たちのこゑにて、あらたにおふるさみ草の花さうたひたるも、此たびはいますこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらん、すぐくしうさしあゆみて出ぬるもあれば、わらふを、しばしや、なごさ夜を捨ていそぎたまふ、さありてなごいへご、心ちなごやあしからん、たふれぬばかり、もし人やおひて

るが、立ち止りて、女房達に物言ひなごする程に、殿上人の供の隨身なごも、夜中なれば、先を追ふ警蹕の聲も、忍びやかにて高からずつ唯だ主人の爲めのみに、静に短く先追ふ聲の、管絃の響に混じりたるも、今夜は殊に面白く聞ゆるなり。斯くて夜も更け行けば、寧ろ寢やらで、夜明けて彼の樂人舞人などの歸るを見んとて待つ程に、公達の聲にて、「新に生る富草の花」と謠ひ出づるなご、又た一層面白し富草とは稻のことにて、古歌にも「かな山に、かたく根させる常磐木の、數に生ひます國のとみ草」と見えたり。斯く面白く謠ふな

さらふるさ見ゆるまで、まごひ出るもあめり。」

しきの御ざうしにおはしますころ、こだちなごぼるかに物ふり、屋のさまも高うけごほけれど、すゞるにを

るに、如何なるまめくしき心強き人ならん、舞樂の果てたればとて、心づきなく、すぐくしくも急ぎ出づる者あるに、暫時待ち給へ、何とて左様に夜も明けざるに、見捨て急ぎ給ふにや、暫しの程こそ在られよと笑ひ言へご、心地悪しき爲めならんか、耳にも懸けず、倒れんばかりに急ぎて、後より人の追ひ来て、捕へられん時に逃ぐるが如く、狼狽へ惑ひて出づるもあるなり。職の御曹司とは、中宮の用部屋を申すなるが、中宮定子の君の、此の御用部屋に在す頃、物古りたる庭の木立、高くして人氣遠き屋形も、

かしうおぼゆ。もやはおにありさて、みなへだて出して、みなみのひさしに、御きちやうたて、またひさしに、女房はさふらふ。このゑのみかごより、左衛門の陣に入給ふ上達部のさきごも、殿上人のほみじかければ、おほさきこさきこ聞つけてさわぐ。あまた、びになれば、其聲ごも、みなきしられて、それぞかれぞといふに、又あらずなさいへば、人してみせなごするに、いひあてたるは、さればこそなごいふもなかし。ありあけのいみしうき

漫に立派なりと覺ゆれど、母屋には夜になりて、鬼などの化生の物、出で來ると言ひて怖れければ、皆々母屋を出で隔て、南の庇の間に、御几帳を立て、中宮の御座にしつらへ、其の又た庇に、女房達の侍へるに、近衛の御門なる陽明門より、左衛門の陣なる建春門内に入り給ふ上達部の、先驅の警蹕の聲は、夜中なれば忍び聲なるが、殿上人のは殊に靜に短ければ、此は大先驅にて上達部なり、彼は小先驅にて殿上人なりと、聞く度毎に女房達の言ひ騒ぐを、後には聞き馴れて、彼の警蹕の聲は、何の誰の通行するなりと言ふに、否

りわたりたる庭に、おりにありくをきこしめして、御まへにもおきさせ給へり。うへなる人は、みなおりにごしてあそぶに、やうくあけてゆく。左衛門の陣にまかりて見んさてゆけば、われもわれもおひ付てゆくに、殿上人あまたこゑして、なにかしこゑの秋さすんじているおきすれば、にげいりて物なごいふ。月を見給ひけるなご、めでうたよむもあり。よるもひるも、殿上人のたゆる折なし。上達部まかてまゐり給ふに、おほるけに

其の人にはあらずなど争ふやうになりて、人を遣りて見せしむるに、言ひ當てたる者は、夫れ見られよなご言ひて、鼻高々なるも可笑し。又た時には女房達と連立ちて、有明月に霧の罩めたる庭を、そゝろ歩きするに、中宮の聞き召して起きさせ給へば、御前に侍る上の女房達も、皆々庭に下りて遊ぶに、夜も漸く明け放れ行けば、己れ一人、左衛門の陣の様子を見んとて歩み出すに、外の女房達も、我もくと追ひ付き來れるが、陣には殿上人の許多集りて、池は冷にして水に三伏の夏なく、松は高くして風に一聲の秋あり」と言へ

いそぐこなきは、かならずまぬり給ふ。」

【四十】 あぢきなきものわざさおもひたちて、みやづかへに出立たる人の、ものうがりてうるさげに思ひたる。人にもいはれ、むづ

る古詩を、諸聲に誦じ居る聲の聞えければ、女房達みなく逃げて歸りて、四方山の話などするに、其の殿上人の中には、女房達の月見を賞で、歌詠み懸けたるもあり。斯く夜も晝も、殿上人の往來絶ゆる間もなく、上達部の禁中を退出する折、若くは參内の時なども、然まで急用ならざる場合には、必ず中宮の御許へも、御機嫌伺に參り給へり。

【四十】 あぢきなきもの面白からず詮なき事は、わざく親の思ひ立ちて、其の娘を宮仕させたるに、肝甚の娘が懶がりて、宮仕を厭はしげに思ひたる。さて

かしき事もあれば、いかでかまかでなんぞ、いふこそ草をして出て、親をうらめしければ、またまぬりなんぞいふよ。」さりこのかほ、にくさげなる。しぶくにおもひたる人を、しのびて聲にさりて、思ふさまならずさなげく人。」

【四十一】 いとほしげな

は宮仕は憂きものなりと人にも言はれ、我も亦た煩はしく悶へる事もありて、實に物憂く思ふものから、何とかして辭し歸らんと言ふを、口癖のやうにして、一旦其の家里に歸りはしつれど、親の強意見の恨めしくて、しぶくながら再び禁中に參るべしと言へるなごの、詮なく面白からざる事よ。又は折角迎へたる養子の、連れ添ふべき我に優しき顔せざる。或は氣に進まざる男を、我慢して聲に迎へながら、我が思ふまゝならずと啣つ人などいづれも味氣なきものなり。

【四十一】 いとほしげなきもの

きもの  
人によみてさらせたる哥の  
ほめらるゝ。されどそれは  
よし。」さほきありきする人  
の、つきくえんたづれて、  
文えんさいはすれば、しり  
たる人のがり、なほざりに  
かきてやりたるに、なまい  
たばりなりさばらだちて、  
返事もさらせて、むさくに  
いひなしたる。」

未練もなく頓着もなきものは、人の爲めに代  
詠して遣りたる歌の、出来ばへ善しとて褒め  
られたることにて、我には何の頓着もなけれ  
ど、夫れは褒められたるなれば、幸にも結構  
なる次第なり。されど遠國に行く人の、夫か  
ら夫へと縁を求めんために、添書を乞ひ頼ま  
れたれば、知己朋友の許へ、簡畧なる依頼状  
を發したるに、先方にては、書中の文句の粗  
雑なるを腹立ちて、返事も寄來さず、却りて  
使の者に、此方の無徳なるを惡ざまに言ひな  
せるは、たごひ頓着なく未練なしと言ふ中に  
も、彼の歌の褒められたるが如く善きものに

【四十二】 心ちよげなる物  
うづゑのこさぶき。神樂の  
にんぢやう。池のはちすの  
村雨にあひたる。御りやう  
ゑの馬おさ。又御りやうゑ  
のふりはた。」

はあらず。人の爲めに勞して、其の甲斐なき  
のみか、惡口雜言までも蒙るは、餘りに快か  
らぬものなり。

【四十二】 心地よげなるもの  
正月初卯の日、一年の惡魔拂とて、桃の木な  
ごにて作りたる卯杖、又た卯槌とも言ふなる  
を、左右兵衛府などより大内に奉る祝儀。御  
神樂の舞人樂人などの長。池の蓮の村雨に逢  
ひたる眺望。六月十四日の祇園の御靈會に、  
引き出す馬の掛役人の長。又た同じ御靈會の  
振幅の儀式など。後世には絶えられど、見る  
も心地よげなるものなりかし。

【四十三】 さりもてるもの  
くづつのごささり。除目に  
第一の國えたる人。

御佛名のおした、ちごくゑ  
の御屏風取渡して、宮に御  
らんぜさせ奉給ふ、いみ  
しうゆゑしき事限りなし。

是見よかしさおほせらるれ  
ご、さらに見侍らじさて、  
ゆゑしきにいへやにかくれ  
ふしぬ。雨いたく降つてつれ  
くなりさて、殿上人う  
へのみつぼれにめして御あ  
そびあり。みちかたの少納  
言、びはいさめでたし。な  
りまさの君、さうのこそ。  
ゆきなり、ふえ。つれふさ  
の中將、さうのふえなど、  
いさおもしろうひさわたり  
あそびで、びはひきやみた  
るほごに、大納言殿の、び  
はのこゑはやめて、ものが  
たりするこそおそろしさい  
ふ事を、すんじ給ひしに、

【四十三】 とりもてるもの

鬼儡の琴取さて、偶人を歌に合はせて舞はす  
るに、其の偶人の琴を取りて、自から謠うや  
うなるは面白く、正月縣召の除目に撰に入り  
て、而かも第一の大國を受領したる人など、  
外の見る目も得意らしくて心地よげなり。

【注意】

右の一節は、前段「心地よげなるもの」の中に  
加へたるもありて、此の段の「さりもてるもの」  
の中には、似つかはしかられど、暫らく此のま  
ゝに差し置きて、敢て改めず

御佛名とて、十二月十九日より三日の間、諸  
佛の御名を唱へて、六根の罪業を消滅せしむ  
る儀式の禁中に行はるなるが、此の時、地獄

の繪の屏風を立て廻さるが常例なり。さて御  
佛名の終りたる翌日、主上其の御屏風を上  
御局に取り寄せ給ひて、中宮に御覽せさせら  
れたるに、地獄の有様いまくしげなる事限  
りなければ、是れ見よと中宮の仰せらるれご、  
由々しければ見侍らじと申して、己が局に入  
りて隠れ伏しゐたるが、此日は雨甚く降りた  
れば、主上には徒然なりとて、殿上人を上  
御局なる中宮の御居間に召させて、いろく  
の御慰あらせらる。琵琶には六條少納言道方、  
箏には道方の弟なる阿波權守濟政、笛には頭  
辨行成、笙には左近中將經房など、各々其の



かくれふしたりしもおき出  
て、つみはおそろしけれど、  
猶物のめでたきは、えやむ  
まじさてわらはる。御こゑ  
などのすぐれたるにはあら  
れど、をりのこそさらにつ  
くりいでたるやうなりしな  
り。

妙技を窺聞に入れ奉る程に、今しも琵琶弾き  
止みたりと思ふ間もなく、大納言伊周卿、白  
氏文集の琵琶行の一節なる、「忽ち聞く水上琵琶  
の聲、主人歸るを忘れて客も發せず、聲を  
尋ねて闇に問ふ彈者は誰ぞ、琵琶の聲停みて  
語らんと欲すること遅し」と言ふ所を、吟誦  
し給ひしかば、己が局に隠れ伏しも居られず、  
感に打たれて中宮の御局へ出で行きけるに、  
地獄の繪を由々しとて見ざる罪は恐ろしけれ  
ど、斯る音曲吟詠の芽出たさには、地獄の繪  
も何程の事もあるまじとて、皆の人々より笑  
はれ侍りき。但し吟誦の聲の、朗々として美

頭中將のこゝろなるそらご  
さをきして、いみしういひ  
おとし、何しに人さおもひ  
けんなど、殿上にてもいみ  
しくもなんの給ふさきく  
に、はづかしけれど、まこ  
さならばこそあらめ、おの  
づからきまほし給ひてん  
など、わらひてあるに、くろ  
ごのかたへなど渡るにも、  
こゑなどするをりは、袖を  
ふたぎて露見おこせず、い

なるが爲めに、出で來りたるにはあらで、恰  
も然る出で行くべき場合に、差し當りたるな  
りけり。  
藏人頭中將齊信卿は、唯だ人の心に推し量  
りたる讒言を事實と信じて、甚く己を謗り嘲  
り給ひ、清少納言は人にあらずなご、殿上  
にても譏らるゝよと傳へ聞くからに、心もど  
なく面愧づかしけれど、そは讒言に依る事に  
て、固より事實にあらねば、何時かは自から  
聞き誤りなりしこと、明白なるべしと思へ  
ば、氣にも懸けずして、一笑に付し去り居た  
るに、清涼殿の北なる瀧口の戸の、西に當れ

みしうにくみ給ふを、さかくもいはず、見もいれでずぐす。二月つもごりがた、雨いみしうふりてつれくなるに、御物いみにこもりて、さすがにさうしくしくこそあれ、物やいひにやらましきなんの給ふさ、人々かたれど、よにあらじなごいらへてあるに、一日しもにくらしてまわりたれば、よるのおさゞにいらせ給ひにけり。なげしのしもに、火ちかくさりよせて、さしつごひて、へんをぞつく。あなうれしや、さくおほせなご見つけていへど、すさ

る黒戸の方へ、齊信卿の渡らるゝに際しても、己が聲なごする折は、若しや見も侍べらんかどて、袖にて顔を蔽ひ過ぎなごし給ふほごにも憎み給へごも、己は一言も申譯なごせず、又た齊信卿を悪しごまにも言はず、固より面會もせずして日を過しける間に、二月晦日、雨激しく降りて徒然なるに、況して齊信卿は、禁中の御物忌にて立て籠られければ、流石に淋しくて、斯る時こそ清少納言を呼び招きて、物語りせばやと申されたりとて、人々の傳へ告げけれど、齊信卿は己を疎み給へば、然ることはよもあらじと答へながら、此日一日は、

まじき心ちして、何しにのぼりつらんさおぼして、すびつのもさにあたれば、又そこにあつまりて物なごいふに、何がしさふらふさ、いさはなやかにいふ。あやしきいつのまに、なに事のあるぞさばすれば殿守づかさなり、たゞこゝに人づてならで申へき事なんさいへば、さし出てさふに、是頭中將殿のたてまつらせ給ふ、御かへりさくさいふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんさおもへど、たゞいまいそぎ見るべきにあられば、いれ

己が局に暮して、夜に入りて中宮の御前に伺候したるに、既に御寝ありし後なりしが、御居間の長押の下とて、敷居一つ隔てたる次の間に、燈火を近く引き寄せて、女房達差し集まり、偏突とて、文字の旁を隠して、偏のみにて其の字を言ひ當つる遊戯を爲し居る所なりければ、善くこそ來給ひつれ、あな嬉しや、疾く仲間に入り給へと勧められたれど、中宮も御寝なりたる後とて、氣にも進まず面白からねば、何の爲めに伺候し奉りたるにや、上り侍べりたる甲斐もなしと思ひつゝ、火鉢の傍に坐り居たるに、女房達も亦た皆火鉢の所

今きこえんきて、ふさころにひきいれていりぬ。猶人の物いふきよなどするに、すなはちちちかへりて、さらば其ありつる文を、給はりてこそなん、おほせられつる。さくくさいふに、あやしういせの物がたりなるやきて見れば、あをきうすやうに、いさきよげにかき給へるを、心さきめきしつるさまにもあらざりけり。らんしやうの花の時きんちやうのもさかきて、未ばいかにくさあるを、いかゞはすべからん、御まへのおはしまさば、御らん

に集り来て、物語などする程に、戸の外より清少納言の在すやと、聲明朗に訪ふ者あるにぞ、唯今こそ己が局より此處に参りたれ、僅かの間に、何事の用向の出来たるにやと思ふまゝに、人をして其の用向を問はすれば、我は使の者にて主殿司なり、人傳へには言ふべき事ならねば、清少納言に直接面會して申すべしと言ふに、さらばとて立ち出で、問へば、此の文を頭中將齊信卿より参らせ給ふ、御返事を急ぎ賜はれとの事なり。されど齊信卿は、甚く己を憎み給へるに、御文を参らせ給ふとは心得ぬ、如何なる文ならんと心懸りに思へ

せさすべきを。これがするしりがほに、たごくしきまんなにかきたらんも、見ぐるしなご思ひまはすほごもなく、せめまごはせば、たゞ其おくに、すびつのみえたるすみのあるして、草のいほりを誰かたづねんさ、かきつけてさらせつれど、返事もいばで、みなれて、つさめていささくつぼれにありたれば、源中將のこゑして、草のいほりやあるくさ、おごろくしうさへば、なごてか、さ人げなきものはあらん、玉のうてなもさめ給はましかば、い

ごも、唯今立ちながら急ぎ見るべきにもあらねば、使の者に向ひて、歸れよかし、直ぐ後より返事すべければと言ひて歸へし遣り、兎も角も其の文を懐に入れて、再び坐に着きぬ。夫れより尙も女房達の物語を聞きなごする中に、前の主殿司折り返し來りて、御返事なくば、其の文を持ち返り來よと仰せられたれば、疾く御返事をと急ぎ促すに、彼の長岡が母より、業平朝臣へ、頓の急ぎ文なりとて遣はされたるが記せる伊勢物語と、同じやうにやと思ひて披き見れば、青色の薄葉紙に、「蘭省花時錦帳下」と言へる白氏文集の一句

できこえてまじさいふ。あ  
なうれし、しもにありける  
よ、うへまで尋れんさしつ  
る物をさて、よべありしや  
う、頭中將のさのお所に  
て、す、し人々しきかざり、  
六位まであつまりて、萬の  
人のうへ、むかし今こた  
りていひしついでに、猶此  
ものむげにたえはて、のち  
こそ、さすがにえあられ、  
もしいひ出る事もやまて  
ど、いさゝか何さもおもひ  
たらず、つれなきがいされ  
たきを、こよひあしきもよ  
しきも、さだめきりてやみ  
なんかしきて、みないひあ

を、最と清げに書き給ひて、其の下は如  
何にと問ひ給ふ文にて、蘭省は支那の尙書省  
を言ひ、政治を行ふ所なれば、齊信卿は暗に  
清涼殿を指し含ませ、錦帳の下は、清少納言  
の中宮の御殿に侍ふを懸けたるなり。其の下  
の句は「盧山雨夜草菴中」と言へるにて、盧  
山の草菴は、白樂天の山莊なるを、齊信卿己  
が宿直の所を暗に示して、恰も今夜の雨なれ  
ば、徒然なるまゝに、清少納言を呼び寄せて、  
物語りせんとの心なれば、何事にかと心を騒  
がせ、胸を躍らしむる程の文にてはあらざり  
けれど、如何に返事せば宜しきや、中宮の御

はせたりし事を、只いまは  
見るまじきさて、入給ひぬ  
さて、このもりづかさきた  
りした。又おひかへして、  
たゞ袖をさらへて、さうざ  
いをさせず、こひさりもて  
こすは、文をかへしされさ  
いませめて、さばかりふる  
雨のさかりにやりたるに、  
いささく歸りきたり、これ  
さてさし出たるが、ありつ  
る文なれば、かへしてける  
かさうち見るに、あはせ  
てをめけば、あやししいかな  
る事ぞさて、みなよりに見  
るに、いみしきぬすびさか  
な、猶えこそすつまじけれ

寢ならざりせば、此の文を御覽に入れて、御  
意をも窺ふべきに、さても女ながら、漢詩を  
物知り顔に「盧山雨夜草菴中」と、覺束なげ  
なる漢字にて、書き遣らんも見苦しかるべし  
と、千々に思を碎く間もなく、使者なる主殿  
司が、急ぎ迫め惑はすものから、取り敢へず、  
齊信卿の文の奥に、火鉢にありたる消炭にて  
「草のいほりを誰かたづねん」と書きて、え  
参り侍らずとの心を含めて、返し遣りたるに、  
齊信卿よりの返事もなければ、女房達も己れ  
も、皆々臥せりて、翌朝早く、己が局に下り  
たるに、源中將經房卿の聲にて、草の廬や

と見さわぎて、これかもしも  
つけてやらん、源中將  
つけよなごいふ。夜ふくる  
まで、つけわづらひてなん  
やみにし。此事必かたり  
つたふべき事なりさなんさ  
だめしき、いみしくかたは  
らいたきまで、いひきかせ  
て、御名はいまは、草のい  
ほりさなんつけたるまで、  
いそぎたち給ひぬれば、い  
さわるき名の、未まであら  
んこそ、口をしかるべけれ  
さいふほどに、修理助のり  
みつ、いみじきよろこび申  
に、うへにやきてまゐりた  
りつるさいへば、なぞ、つ

此處にあるとて、仰々しくも訪れ給ひければ、  
草の廬のやうなる人氣なき淋しき所は、此處  
には侍べらず、玉の臺を求め訪ひ給はんには、  
出で、此方へ御案内申さんものをと答ふれ  
ば、經房卿、あな嬉し、此處なる局に在りけ  
るよ、中宮の御殿ならんかと思ひて、上まで  
尋ね行かんとしつる所なりとて、昨夜の有様  
を語り出でらるゝには、頭中將齊信卿の宿直  
所にて、人らしき物事の辨る者ばかり、六位  
の藏人以上のみ集まりて、いろくゝの人の品  
評、さては昔の事今の物語など、さまざまに  
言ひし序に、齊信卿の申さるゝには、此の節

かさめしありさもきこえぬ  
に、何になり給へるぞさい  
へば、いでまこにうれし  
き事のよへ侍しを、心もさ  
なく思ひあかしてなん、か  
ばかりめんばくある事なか  
りきさて、はじめありける  
とごも、中將のかたりつる  
おなじ事ごもをいひて、こ  
のかへりこにしたりがひ  
て、さる物ありさだにおも  
はじき、頭中將のたまひ  
しに、たゞにきたりしは、  
中々よかりき。もてきた  
りしたびは、いかならんさ  
むねつぶれて、まこにわ  
るからんは、せうさのため

清少納言とは、無下に疎遠になりたる以來、  
憎みながらも流石に談ひまほしく、讒言した  
る者の申し開きを言ひ出しもやせんと、日頃  
心待ちに待ち居れど、彼の女は聊かも念頭に  
懸けずして、不愛想なるが最と妬ましければ、  
今夜こそ彼我の善惡を定めて、何れとも結着  
を付くべしと、評定一決して、さてこそは試  
みに、蘭省の花時錦帳の下の句を、齊信卿の  
認められたるに、使の者の返事には、唯今は  
其の文を見るまじとて、内に入り給ひぬどの  
事なりしかば、再び使を追ひ遣りて、何はさ  
ておきても、清少の袖を捉らへて、否應言は

もわるかるべしとおもひしに、なのめにだにあらず、そこらの人のほめかんじて、せうきこそきけそのたまひしかば、した心にはいさうれしけれど、さやうのかたには、さらにえさふらふまじき身になん侍るさ申ししかば、こそくはへ、きしれさにはあらず、たゞ人にかたれさて、きかするぞさの給ひしなん、すこし口をしきせうこのおぼえに侍しかど、これももつつけ心見るに、いふべきやうなし。ここに又これが返しをやすべきなどいひあは

せず、返事を取り來たらすば、寧ろ其の文を取り戻れど嚴命して、あれ程の大雨の中を、無理やりに遣はしたるに、此の度は最と疾く歸り來りて、これぞ御返事なりと差し出すを見れば、前に遣はしたる文そのまゝなれば、さては返事もなくて、返しつるよと見るに、一同アツとばかり叫喚きければ、齊信卿怪みて、如何なる事ぞと申さるゝに、皆々打ち寄りて見れば、「草のいほりを誰かたづねん」とあるにぞ、餘りの出來ばへに妬ましくて、これぞ和歌の下の句なれど、白樂天の詩を盜める大盗人なり、されど其の歌捨つまじとて、

せ、わるき事いひては、申れたかるべしとて、夜中までなんおほせし。これは身のためにも、人のためにも、さていみじきまるこびには侍らずや。つかさめしに、少將のつかさえて侍らんは、なにさもおもふまじくなんさいへば、げにあまたしてさる事あらんさもしらで、れたくもありけるかな、これになんむれつおれとおぼゆる。此いもうさせうさゝいふ事をば、うへまみでみなしろしめし、殿上にも、つかさ名をばいはいで、せうさゝぞつけたる。物が

争ひて見騒ぐに、誰か此の歌の上の句を付け遣るべし、源中將こそ然るべしとて、我に其の大任を押し付けられたるぞ迷惑なる。深夜に至るまで考へたれども、思ひ浮はで遂に止みにき。されど此の事は、必ず世の物語に褒め傳ふべきものなりと、評定一決したりとて、詳しく片腹痛きまで言ひ聞かせて、さて御身の名は、爾來「草のいほり」と付けたりと笑ひ給ひて、急ぎ立ち歸られけるに、そは甚く口惜しき事どもなり、草の廬てふ悪き名の、末々までも残らんにはと言ふ間もなく、修理助則光入り來りて、非常なる歡び事あれ

たりなどしてゐたるほどに、まづさめしたれば、まゐりたるに、此事おほせちれんさてなりけり。うへのわたらせ給ひて、かたりきこえさせ給てのこどもみな扇にかきてもたるこ、おほせらるゝにこそ、あさましう何のいばせける事にかさおぼえしか。さてのちに、袖ぎちやうなどさりのけて、おもひなほり給ふめりし。

ば、それを申し傳へん爲めに、御身は中宮の御前に侍るなるべしとて、取り敢へず此處まで尋ね來れりと言ふにぞ、抑も歡び事とは何事ぞ、未だ司召の除目ありとも聞かざるに、さりとは何の官を拜命せられたるやと問へば、否とよ、我身の任官にはあらず、昨夜誠に嬉しき事のありたれば、早く御身に言ひ聞せま欲しくて、夜の明るを待ち遠しく思ひたり。斯程の面目ある事は、從來に無き所なりとて、源中將の語り給ひしと同じ事を話しながら、先に善惡共に、今夜の中に決すべしと、齊信卿の言はれたるを付け添へて、彼の

文の返事次第に依り、讒言の眞偽をも、御身の胸の中をも、見んものと定め合へりしが、始は主殿司の返事なくて歸り來りしは、なまじひの返事あるよりも、却りて宜しかりき。さて其の次に返事を持ち歸りし時は、善きか悪きか、笑はれて耻を搔もせずやと、胸も潰れん計りに心配して、若し悪き返事ならんには、此の兄人なる我身の爲めにも、面目なしと思ひ煩ひしに、計らざりき彼の草の廬を誰か尋ねんとの、優れたる返事なりしかば、一座の人々斜ならず褒め感じて、我に向ひ、兄人なる御身こそ、此の歌を善く聞き味へよと

言はるれば、心中には此上もなく嬉しけれど、歌の道には未熟なれば、上の句を付くべきやうの事は、更に出來申さすと答ふるに、否とよ、上の句を加へ試みよとにはあらず、此の返事の優れたれば、人にも語り傳へよとて聞かするなりと、齊信卿の申されける。元來此の兄人なる我身は、口惜くも歌道に不得手なれど、試みに其の上の句を加へ見んとて、索思苦腦したれど、到底及び難かりしが、一座の面々も、此の返歌を詠まんものと申し合せて、なかくに苦心の態なりしが、悪き歌詠まんも残念なりとて、眞夜中までも居坐りて、

頭腦を惱したりしかども、終に詠みえざりしは、御身の爲めにも、將た兄人なる我身の爲めにも、肩身廣き事にて、洵に此上もなき歡び事ならずや。司召の除目に、我たとひ少將に任せられたりとて、何程の悦びかあらん、昨夜の愉快には及ぶものもあらずと、事詳かに語り聞かせり。さては齊信卿を始とし、經房卿其の他の殿上人の、許多集まりて言ひ合はせし事とも知らず、然る返事しけりと思へば、口惜くもあり、胸も潰れん計りなり。さて此の修理助則光は、己れと親しき間柄なれば、則光を兄人と言ひ、己れを妹と言ふ



なるが、此の事何時しか主上にまでも知しめさせられ、宮中にも則光の官名を言はずして、皆々兄人と呼ぶに至りぬ。そは鬼もあれ、斯く則光と物語りする時しも、中宮よりの御召にて、少々の用事ありども、まづく來よとの御事なれば、即ち御前に参りたるに、彼の草の廬の返事を仰せられんが爲めに召されたるにて、そは主上には、中宮の御局に渡らせ給ひて、昨夜の事ども仰せ聞えさせ給ひ、殿上の男どもは皆々「草のいほりを誰か尋ねん」と扇に書き記し持てりと、仰せられける由を、知らせ給へるにてありき。何事の御用

かへるさしの二月二十五日に、宮、しきの御さうしに出させ給ひし。御さもにまゐらで、梅つぼにのこりゐたりし。又の日、頭中將

かと思ひ参りたるに、斯る御褒の御言葉賜はりしは、顧みて我身の淺ましくも、亦た足らはぬ勝の事多かるを、耻ぢ思はねばならぬ事にて侍りし。されど此の事ありてより後、齊信卿の心も、解け給ひしと見えて、凡帳なごにて他の見る目を遮らんがごと、袖もて顔を隠し給ふことの止み侍りしは、定めて疑念も晴れ給ひしと見えたり。其の翌年の二月廿五日の事なり。中宮には、職の御曹司なる御殿に出御あらせられ、己れは、凝花舎となん呼べる梅局の御殿に残りて、留守居してありしに、其の翌廿六日、頭中

のせうそこさて、きのふの夜、くらまへまうでたりしに、こよひかたのふたがれは、たがへになんゆく、まだあけざらんに歸りぬべし。かならずいふべき事あり、いたくたゝかせて、またそのたまへりしかど、つぼねにひさりはなごてあるぞ、こゝにあよさて、みくしげ殿めしたればまゐりぬ。ひさしくれおきておりたれば、よるいみしう人のたゝかせ給ひし、からうしておきて侍しかば、うへにかたらばかくなんぞ、のたまひしかども、よもきかせ

將齊信卿よりの消息あるには、御身の局に参りたくはあれど、昨夜鞍馬寺に詣でたれば、今夜は天一神にて、方角の塞りなれば、異所へ方違へに行きて、一夜を過すべし。さて其所よりは、御身の局に参るに、方角も善ければ、夜の明けざる中に歸り来て訪る、程に、餘りに局の戸を叩かさで、早く起きて待たれよかし、是非に話すべき用事ありとの通知なりしかど、中宮の御妹君にて、主上を始め奉り、中宮の御服などを取り扱はせらるゝ、御匣殿の司し給へるが、何とて梅壺に、唯だ一人にて居るぞ、此處に來よとて召し給へば、

給はじさて、ふし侍にきさかたる。心もさなの事やさて、きくほどに、さのもりづかさ来て、頭の殿のきこえさせ給なり、たゞいままかりいづるを、きこゆべき事なるあるさいへば、見るべきことありて、うへになんのほり侍る、そこにてさいひて、つぼねはひきもやあけ給はんぞ、心さきめきしてわづらはしければ、梅つぼの東おもての、はしこみあげて、こゝにさいへば、めでたくぞあゆみ出給へる。櫻のなほしいみしく花ばなさ、うらの色つやな

即ち御匣殿に参りたるに、此の夜は殊に寝過して、朝遅く己が局に下りたれば、留守居の婢の言ふやう、未だ明けやらぬ夜中に、甚く戸を叩く人のありければ、やう／＼にして起き出で侍りしに、頭中將の尋ね來りし由を、主人に告げよと申されしかど、主人には、夜中男を局に入れんことは、よも承引あるまじと答へて、夫より又た枕に着き侍りぬと語るを、さては齊信卿、我に懸想し給ふにやと思はれて、心もどなくも婢の話す所を聞きつゝある間に、齊信卿よりの使者として、主殿司の來りて言ふやう、頭中將には、唯今殿上

ど。えもいはず、けうらなるに、えびぞめのいさこきさしぬきに、藤のをり枝こさくしくおりみだりて、紅のいろうちめなど、かゞやくばかりぞ見ゆる。しだいに白きうす色など、あまたかさなりたる。せばきまゝに、かたつかたは、しもながら、すこしすのもさちかくよりぬ給へるぞ、まここにゑにかき物語の、めでたきここにいひたる、是にこそば見えたる。御前の梅は、西はしろく、ひがしはこうばいにて、すこしおちかたになりたれど、猶

より退り出で、此の御局に見えて、何事か御物語あらせらる、由なれば、左様思召されたしこの事なり。されど己れは、中宮に見参し奉る用事ありて、上の御殿に参るべければ、彼の所にて御面會の上、御用向を承はらんと答へ置きて、直ぐ中宮の御局に参りたるに、つらく思へば、上の局は、人や引き開けなんと心騒ぎせられて、甚だ思ひ煩はしければ、梅壺の東面の半蔀を上げて、此處にて面會し奉るべしと言へば、頭中將美々しき服装にて、歩み出で給ふを見るに、いと華麗しき櫻色の直衣の、裏の濃き蘇芳の艶々しさは、言葉に

をかしきに、うらくさ口のけしきのごかにて、人に見せまほし。すのうちに見ましてわかやかなる女房なごの、かみうるはしく、ながくこぼれかゝりなど、そひぬためる、いますこし見所ありてをかし、かりぬべきに、いささだすぎ、ふるんしき人の、かみなども我にはあらればや、さころくわなきちりぼひて、大かた色こさなる比なればあるかなきかなるうすにびごもあはひも見えぬきぬごもなごあれば、露のはえも見えぬに、おはしまされば、

ては形容も出来ぬ計りの清らかなるに、葡萄染の絲の色の濃き指貫を穿き、其の指貫には、藤の折枝を仰々しく織り亂したる模様ありて、直衣の下着は輝くばかりの紅色なるが見え、尚ほ其の下襲は、次第々々に白き薄色なるが、幾枚も重なりたり、而かも此の半蔀の下は狭き所なれば、簾の傍近く寄りゐ給ひて、腰など掛けたらんやうに、半身は下さまになりたれば、誠に昔の繪巻物語に巧に書かれたる姿も、實に斯くばかりなりと見えたり。殊に庭前の梅は、西にあるが白にて、東のは紅梅なるが、今は花の盛を過ぎて、少しく散り

いふきず、うちきずがたに  
てぬたるこそ、物ぞこなひ  
にくちをしけれ。しきへな  
んまぬる、こさづけやある、  
いつかまぬるなどのたま  
ふ。さてもよまあかしもほ  
て、されどもかかれてさい  
ひてしかば、まつらんさて、  
月のいみしうあかきに、西  
のきやうよりくるまゝに、  
つぼれをたゞしほご、か  
らうしてれおびれて、おき  
出たりしけしき、いらへの  
はしたなきなど、かたりて  
わらひ給ふ。むげにこそお  
もひうんじにしか、なごさ  
るものをばおきたるなど。

がたになりたれど、尙ほ美しきに、麗らかな  
る日影の景色さへ長閑なれば、此の場の光景  
を、人に見せま欲しく覺えたれ。若し簾の中  
には、年若き女房などの、つやくしき髪し  
て、而かも長々と垂れたるが、匂ひ溢る、計  
りの美麗にて、齊信卿と並び居たらんには、  
尙ほ一入の見所あらんに、惜いかな己れの如  
き姥櫻の、盛りを過ぎて年古びたる、殊に髪  
なごも、己れのは美しからず、又た房々と丈  
も長からずして、所々散りそ、げたるのみか、  
異色の衣を着るべき年配なれば、年若き女房  
と違ひて、花々しき色合の物を忌むものから、

げにさぞありけんぞ、いさ  
ほしくもをかしくもあり。  
しばしありていで給ひぬ。  
さより見ん人ばをかしう、  
内にいかなる人のあらんぞ  
おもひぬべし。おくのかた  
より見出されたらんうしろ  
こそ、さにさる人やさも、  
えおもふまじけれ。くれぬ  
ればまぬりぬ。御まへに人  
々おほくつごひひて、物語  
のよきあしき、にくき所な  
ごをぞ、さだめいひしろひ  
すうじ、なかつたがこさな  
ご、御前にもおさりまさり  
たる事など、仰られける。  
まつこれはいかにさこそわ

色薄くして、有るか無きか計りなる薄鈍なれ  
ば、下着の色も、襟袖口などに目立たぬ衣の  
みにて、露ほごも見榮えせざるに、此の梅壺  
には、中宮も在しませねば、畧式にて裳も着  
けず、袿のまゝの姿なれば、興も醒めん計り  
に遺憾なる。斯くて齊信卿、唯今より職の御  
曹司に在する中宮の御前に参るべければ、何  
か言傳てあらば申し次が、御身には何時頃、  
御前へ参らるゝやなど仰せられて、さて昨夜  
は、方違へに行きたる先にて夜も明かさず、  
兼ねて通知せ置きたる事なれば、約束ごほり  
待ち給ふらんと心せかれて、曉尙ほ遠ければ、

れ、なかつたゞがわらばおひのあやしさを、せちに仰らるゝぞなごいへば、何かは、きんなごも天人おるばかりひきて、いさわるる人也。みかごの御むすめやばえたるさいへば、なかつたゞがた人さ心をえて、さればよなごいふに、此事ごもよりは、ひるたゞのぶがまゐりたりつるを見ましかば、いかにめでまごはまじこそおぼゆれさ仰らるゝに、人々、さてまごさいにつれよりもあらまほしうなごいふ。まづその事こそけいせめとおもひて、まゐり侍りつる

月の光いと冴えたるに、西の京より尋ね來りて、局の戸を叩きに叩けば、留守居の下婢が寢惚け顔にて、やう／＼に起き出でたれど、其の應接振りの下卑さ加減など、話にもならずと笑ひ給へど、心には甚く慍を含ませられしと見えて、斯る下婢を何故に召使ふぞと言ひ給ひしこそ、實に慍らせるゝも道理なれと思はれて、氣の毒にも亦た可笑しくもありたれ。整くて暫時ありて、齊信卿には梅壺を出で、中宮の御前に參られける。斯く齊信卿と己れと物語するを、外より見ん人は、先づ齊信卿の華々しき扮装を見て、内には如何な

に、物がたりの事にまぎれてきて、ありつる事をかたりきこえさすれば、誰もく見つれど、いさかくぬひたるいさほりめまでやは、見さほしつるさてわらふ。西の京さいふ所のあれたりつる事、もろさにも見る人あらましかばさなんおほえつる。垣などもみなやぶれて、昔おひてなごかたりつれば、宰相の君の、かはらの松はありつやさいらへたりつるを、いみしうめで、西のかた都門をされるこそいくばくの地ぞ、くちすさびにしつる事な

る美はしき女房の居るならんかと思ふなるべく、又た奥の方より見ん人は、己が後姿の若からずして、髪も悪きなどを見て、外には美々しく華やかなる頭中將の、よも在さんとは思ひも寄らざるべし。さて日暮れて、中宮の御前に參りぬれば、人々多く集ひゐて、古き物語草紙の善悪、又は憎き所などを評し合ひて、其の所々を讀み誦しなごしつ。今も宇津保物語にある大將仲忠が事などの優劣を、中宮にも仰せらるゝ所なりければ、皆々己れに向ひて、いざ先づ仲忠に就きて、宇津保物語の記事の善悪を評せらるべし、中宮の御前に

ひしこそをかしかりしか

は、仲忠の幼少の生立より奇特ありて、母にも孝、琴も善く弾き、後には時の帝の第一の内親王をさへ、御降嫁の御沙汰を蒙りし程の者なりとて、深切にも仲忠を最負せらるゝなりと言ふにぞ、己れ答ふるやう、何とて然まで優れたる者ならんや、琴を善く弾きて、夏の空に雪を降らし、屋上の瓦を落し、天人も其の妙音に感じて降り來る計りなりとて、そは何程の事やあらん、國家の柱石たる丈夫として、は、却りて餘りにはしたなき業にて、最と悪き人なり。されど畏くも帝の皇女を北の方とし給ひしよと言へば、己れも亦た仲忠最

負ならんと心得て、然れば其の事よなど人々の言ふに、中宮の御詞とて、仲忠が事よりも、更に話すべき事こそあれ、そは今日の晝、頭中將齊信が参りたるを、清少納言に見せしめなば、如何に褒め稱へて、其の美しさに見惚れやせんと思はるゝよと仰せられければ、人々も皆、今日こそは誠に優れて美々しかりしよ、平常に斯くあらま欲しけれなど言ふに、實は私も其の美々しかりし事を言上し奉らんとて参りつるに、仲忠が事などの草紙の物語に紛れて、申し後れたりと申して、彼の華々しき櫻の直衣姿など、今朝ありつる儘

を言上したるに、此處にても皆々見つれど、其の縫ひたる糸の針の目までも、細かに見透したるは、御身一人なりとて、人々笑ながら、尙も齊信卿の、御前にての物語を話し出すやうには、西の京といふ所は、荒れさびたる街にて、同じ心の友達と共に見ましかば、一入哀れに感ずべかりしものを、垣なごも皆破れ、屋根には苔さへ蒸したりと言ふものから、宰相の君なる女房が、齊信卿に向ひて、さらば唐の驪山宮の荒れさびたるにも似たれば、瓦には松ありしやと問へば、齊信卿甚く其の博學強記に感じ賞で、白氏文集の樂府に見え

ささにまかせてたるに、殿上人などのくるも、やすからすぞ人々いひなすなる。いさあまり心に引いたりたるお

たる驪山宮の一節、「高々たる驪山の上に宮あり、朱樓紫殿三四重、遅々たる春日、玉甃暖に温泉溢れ、嫋々たる秋風、山蟬鳴きて宮樹紅に、翠華來らずして歲月久しく、牆に衣あり瓦に松あり、吾が君位に在ること己に五載、何んぞ一たびも其の中に幸せざる、西都門を去ること幾多の地ぞ」とあるを、誦吟しつることなど、囁しきまでに語り聞かせられたるこそ面白かりしよ。少しの賜暇を得て、家里に参りたるに、殿上人などの物語に来るを、怪しく容易からぬやうに評判すれど、己は然る評判せらるゝ程も、

ほえはたなければ、さいは  
ん人もにくからず。又よる  
もひるもくる人をば、何か  
はなしなごも、かやきか  
へさん。まことにむつまじ  
くなごあらぬも、さこそほ  
くめれ。あまりうるさくも  
げにあれば、此たびいでた  
る所をば、いづくさもなべ  
でにはしらせす。つれふさ、  
なりまさのきみなごばかり  
ぞ、しり給へる。左衛門の  
ぜうのりみつがきて、物が  
たりなごするついでに、き  
のふも宰相中將殿の、  
いもうさのありごころ、さ  
りさもしらぬやうあらし

心に耻づる所もなければ、一向氣にも懸けず、  
又た評判を立つる人をも憎みもせずあれご、  
日頃親しく交る人の、夜も来れば、晝も来る  
なるを、其の都度不在なりとて追ひ歸し、無  
下にも耻を搔かさんこと、如何で忍び得べ  
きや。然は言へ、眞實に親しくて見舞はるる  
にはあらで、心に一物を挟みて、尋ね来る者  
も無きにあらざれば、餘りに嫌厭くて、此度  
の賜暇歸省を、多くの人には語らず、固より  
己が家里の、何處なるやも知らしめざりしか  
ご、唯だ源中將經房と、阿波權守濟政との、  
二人の君のみは知り給へり。尤も修理亮兼左

さ、いみしうさひ給ひしに、  
さらにしらぬよし申しに、  
あやにくにしひ給ひし事な  
ごいひて、ある事あらがふ  
は、いさわびしうこそあり  
けれ。ほご／＼みみぬべか  
りしに、左中將のいさつれ  
なく、しらすかほにてお給  
へりしを、かの君に見だに  
あはせば、みみぬべかりし  
にわびて、だいはんのうへ  
に、あやしきめのありしを  
たゞさりにさりて、くひま  
ぎらばししかば、ちうけん  
にあやしのくひ物やご、人  
も見けんかし。されごかし  
こう、それにてなん申さず

衛門尉則光は、言はでも知り給へるなるが、  
此の則光の尋ね來りて、物語する序に言ふや  
う、昨日も昨日とて、宰相中將齊信卿が御  
身の家里は何處ぞ、兄人なる此の則光が、妹  
の居處を知らぬ筈なしと、頻りに問ひ給へご、  
更に知らざる由を申すに、生憎強ひて問ひ給  
ひければ、知れる事を知らずと争ふは、極め  
て難儀なるものにて、殆んど笑ひ出さん計り  
なりしが、左中將經房卿は傍にありて、最と  
愛想なき眞面目なる顔付にて、知らぬ振して  
居られたれば、漸く白状せずして濟みたれご、  
さても經房卿と顔見合はさば、互に知りたる



なりにし。わらひなましかば、ふようぞかし。まごさにしらぬなめりとおぼしたりしも、をかしうこそなごかたれば、さらになきこえ給ひそなご、いさゝいひて、ひごろ久しくなりぬ。夜いたくふけて、門おごろおごろしくたゞけば、何のかく心もさなく、さほからぬほごなたくらんさ、きよてさばすれば、たきくち成けり。左衛門の文きて、ふみをもてきたり。みなれたるに。火ちかくさりよせて見れば、あすみごきやうのけちぐわんにて、宰相中

同志の、吹き笑ひ出さんも計られずと思ひわづらひ、故意と臺盤の上にありたる怪しげの海藻を、手當り次第に掴み取りて、食ひ紛らしたれば、見ん人は定めて食時外なる怪しの食物かなと思ひしならんも、全く之れにて紛らし了せて、終に白状せずして止みたりき。若し此の時笑ひもせば、隠さんこと遂に無効なりしに、幸にして齊信卿の悟る所とならず、我等は誠に知らざるならんと思ひなされたるこそ、可笑しかりしと語るものから、此後とても、何人にも更に知らしめ給ふなど、念を押して別れたるが、夫より幾日かを経て、深

將の、御物いみにこもり給へるに、いもうさのあり所申せさせめらるゝに、すぢなし、さらにえかくし申まじき、そこさやきかせ奉るべき、いかに、仰せにしたがはんぞいひたる。返事もかゝで、めな一寸ばかりかみにつゝみてやりつ。さて後にて、一夜せめてさばれて、すまろなる所にゐてありき奉りて、まめやかにさいなむに、いさからし。さてさかくも御かへりのなくて、そまろなるめはしなつみて給へりしかば、さりたがへたるにやさ

夜仰々しく門の戸を叩く者あり。奥淺き家の戸を、何とて斯くも心もどなく、叩くことこの訝かしくて、下婢をして誰なるかを問はすれば、則光が使者の瀧口なり。此の時則光は、左衛門尉にて藏人なりければ、則ち瀧口を使に寄來せるなりけり。皆々寝たれば、燈火近く引き寄せて、則光よりの文を披き見るに、明日は内裏にて、大般若御讀經の結願終日なれば、宰相中將齊信卿は、持戒潔齋にて引き籠り給へるに、御身の居處を申せ、と迫め問はるれば、今は隠さん術もなく、又た到底隠し了るべきにあらず、寧ろ言ひ聞かさ

いふに、あやしのたがへ物や、人のもさにも、さる物つゝみておくる人やはある。いさゝかもこゝろえざりけるさ、みるがにくければ、物もいばで、すゞりのあるかみのほしにかづきする

あまのすみかは

そこなりさ

ゆめいふなさや

めをくはせけん

さかきていだしたれば、哥よませ給ひつるか、さらに見侍らしきて、あふぎかへして、にげていぬ。かうかたみに、うしろみかたらひ

なごする中に、何事ともなくて、すこし申あしくなりたるころ、文おこせたり。びんなき事侍さも、ちぎりきこえし事はすて給はで、ようにてもさぞなごは、見給へさいひたり。つれにいふ事は、おのれをおぼさん人は、歌なごよみてえさすまじき、すべてあだかたきさなんおもふべき。いまはかぎりありて、たえなんと思はん時、さる事はいへこいひしかば、此返しに

くづれよる  
いもせの山の  
中なれば

ばやと思ふなるが、但し御身の意見に従ふべければ、否や御返事ありたしとの文意なり。されど返事は書き遣らず、唯だ一寸計りなる海藻を紙に包みて、先日巧みに言ひ紛らしたる夫れと同じ方法を行ふべしとの意を含ませ遣りたるが、其の後、則光の來て言ふやう、彼の時、齊信卿より一夜寝もやらず迫め問はれて、困じ果てたれば、何處ともなく引き連れ歩き、知らぬ状に紛らしたれど、尙ほも頻りに迫め怨まれて、ほどく迷惑を極めたりしが、さても彼の時、何の返事もなく、唯だ漫に海藻の端片など包みたりしは、定めて

返事の文ど取り違へたるならんと言ふにぞ、されば怪しき違へ物なるよ、何の心もなく、海藻やうの物を人に贈るべき筈あらんや。既に贈るべき筈ならぬ物を贈るからには、如何でか取り違ふ譯もあるまじきなり。さるを己が心も知らざる男かなと思へば、顔見るさへも憎く、無言のまゝ、硯引き寄せ、其處にありつる紙片に、  
かづきする海人の住家はそこなりと  
ゆめいふなとやめをくばせけん  
と、一首を書きて差し出しぬ。  
かづきするとは、海人の漁することにて、海藻

さらによしの、  
川さだに見じ  
さいひやりたりしも、まこ  
さに見すやなりにけん。返  
事もせず。さてかうふりえ  
て、さほたあふみのすけな  
ごいひしかば、にくくして  
こそやみにしか。

と言はんが爲めに、海人を引き出でたれど、  
かづきは又た衣被に通ふべければ、高貴の婦  
人の服装にも思ひ寄せられて、清少納言自身  
を暗示すとも聞え、「めをくばせけん」とは、  
海藻を贈りたるを、胸するに懸けたるにて、  
一首の意は、彼の海藻を贈りたるは、夫れを  
漁る海人ならぬ我身の、住家を知らすまじと、  
目色にて教へ諭せしなりと言ふにてありき。  
之を見たる則光は、歌詠み給ひけるよ、我は  
歌道の心得なければ、手に取り上げて讀まん  
も無益なりとて、歌書ける紙を、扇にてあふ  
ぎ返しなから、逃げ歸りぬ。斯く則光と己れ

と、互に心距てなく語り合ひなごしたる、親  
しき間柄なりしかど、其の後、何事もなきに  
疎遠になりて、聊か隔意あるやうになりたる  
頃、則光より文を送り來て、其の書中に、た  
とひ便なく恨めしき事あらんとて、從來の  
親交に免じて、兄人ともまでも言はれし此の則  
光を、外ながらもそれぞと見給ひて、幸に忘  
れ給ふなど記されたり。尤も則光は、平常よ  
り歌を好まずして言ふやうには、我と相思の  
人達は、決して歌詠みて送られまじきぞ、若  
し歌詠みて送られなば、我は仇讐敵視すべけ  
れば、交際も今は是れ迄なりとの絶交の場合

に於てのみ、最後の通牒として、歌詠み出づべしと言へりしかば、彼の海人の住家知らせぞとの歌を見て、絶交の通牒なりと推量したるべければ、さては何事もなきに、其の後隔意あるに至りしものなれ。今此の文に對してぞ、誠に最後の通牒として、返歌一首を詠み遣りぬ。

くづれよる妹脊の山の中なれば

さらに吉野の川とだに見じ

妹脊の山は、妹の山と脊の山にて、則光を兄人と言ひ、清少を妹と言ひて、妹兄の契深かりしに懸け、古今集に「流れては妹脊の山の

【四十四】物のあはれしら

せがほなる物

はなたるまもなくかみて、ものいふこそ「まゆぬく

中に落る吉野の川のよしや世の中とあれば、吉野川は妹脊の山の中を流れ落つるものと見えたるを取りて、さて契深かりし妹脊の中も、斯くは崩れたる今日なれば、最早御身を吉野川の好しとも見ずして、却りて憎ましく思ふなりとの意なれば、則光も眞實に斷念したりけん、其のまゝ返事も寄來さずなりぬ。さて其の後、位官昇進して遠江介となりしが、見るも憎くて、交際も絶え止みにき。

【四十四】物のあはれしらせ顔なるもの

頻りに涕打ちかみて、泣き聲に物言ふ状。痛さを堪へて、涙ぐみながら眉毛を抜く状は、

も」  
さてその左衛門のちんにい  
きてのち、里に出てしばし  
あるに、さくまぬれなど、  
おほせ事のはしに、さゝも  
のちんへいきしあさぼらけ  
なん、つれにおぼしいでら  
るゝ。いかでさつれなく、  
うちふりてありしならん。  
いみしくめだたからんごこ  
そおもひたりしか、なご仰  
せられたる御返事に、か  
しこまりのよし申て、わた  
くしには、いかでかめでた  
しと思ひ侍らざらん。御前  
にも、さりさも中なるをさ

物の哀れを知らせ顔なり。  
さて中宮の、職の御曹司に在す頃、或る朝早  
く、月を見ながら庭内を逍遙ふ折、左衛門の  
陣を見んとて、女房達と共に行きたる事あり  
し後、賜暇を得て、家里に曹時歸省し居たる  
が、中宮より疾く参れとの御文の端に、女房  
などの左衛門の陣へ行きたる彼の朝ぼらけの  
景色を、常に思ひ出づるなるに、其方は強顔  
にも、此の好き景色を外にして、禁中の事を  
忘れ、なご長々しう家里住居するならん、彼  
の朝ぼらけの景色を賞で、早く歸り来るべ  
しと思ひしにと、仰せられたれば、其の御返

めさば、おぼしめし御らん  
じげんさなん、おもひ給へ  
しと聞えさせれば、たち  
歸り、いみしくおもふべか  
めるなり。たがおもてふせ  
なる事をば、いかでかけい  
したるぞ、只今宵のうち  
に、よろづの事をすて、ま  
あられよ、さらすは、いみ  
じくにくませ給はんさな  
ん。仰せごあるさあれば、  
よろしからんにてだにゆゑ  
し、ましていみしくさある  
もじには、命もさながらす  
てしなんさてまゐりにき。」

事に、里住居して宮仕を怠ること、懼れ多  
き由を申し上げ、且つ中宮の御前にも、左程  
まで思召さるゝ朝ぼらけを、なごか此の私と  
て、賞で申さるることのあるべき。されど宇  
津保物語に見えたる、中なる少女のやうに、  
世間見ずの我儘者にて、家里に引き籠るには  
候はねど、さ思召し給ふならんも、御無理と  
は存じ侍べらずと申し上げたるに、御使の女  
房、再び立ち歸り来て、中宮には早く御身を  
呼び連れ参れとて、甚く御待ち兼ねの御容子  
にて、中なる少女のやうなりとの面伏せなる  
事を、誰も啓し申さぬに、如何で左様には申

しきのみざうしにおはしま  
すころ、西のひさしに、ふ  
だんの御ごきやうあるに、  
佛なごかけ奉り、法師のお  
たるこそ、さらなる事なれ。  
二日ばかりありて、えんのも  
もきに、あやしきものよこ

すなるぞと仰せらる。何は兎もあれ、今宵の  
中に、萬事を擲ちて参られよ。然もなくば、  
甚く御機嫌を損ふべしとの事なれば、「それに  
て宜しからん」との文の詞さへ、宜しからざ  
る大事なるに、況して「いみじく」とあるか  
らは、今は一命を捨つとも厭ふべきにあらず  
と思ひて、即ち御前に参りたりき。  
中宮の、職の御曹司に在します頃、其の御曹  
司の西の庇の間にて、春秋二季の定め御讀  
經にはあらで、唯だ平常の御祈禱を行はせら  
れ、佛像の掛物を掛け、法師も其處に居たる  
は申す迄もなきが、己れ家里より再び参りて、

ゑにて、猶その佛供のおろ  
し侍りなんさいへば、いか  
でまだきにはさいらふる  
を、何のいふにかあらんご、  
たち出て見れば、老たる女  
のほうしの、いみしくす  
けたるかりばかまの、つ  
さかやのやうに、ほそくみ  
じかきを、おびより下五寸  
ばかりなる、ころもさかや  
いふべからん、おなじやう  
にすけたるをきて、さる  
のさまにていふなりけり。  
あれはなに車いふぞさいへ  
ば、ころもひきつくるひて、  
佛の御弟子にさふらへば、  
ほさけのおろしたべし申す

二日ばかりしたる或日の事、一人の乞食、椽  
の所に来り、怪しき聲にて、佛前の供物の下  
したるを乞へるが、未だ供物を下すべき時な  
らねば、興へんには日尚ほ早しと、法師など  
の答ふるにぞ、何事を言ふにやと思ひて、立  
ち出で見れば、老たる尼法師の、甚く穢れた  
る袴を着けたるが、而かも竹の筒のやうに、  
細くて且つ短ければ、帯の下五寸ばかりなり。  
其の着たる物も、衣と言へば衣ならんと思  
はる、程のものにて、之も袴と同じく煤け汚  
れたれば、打ち見たる所は、猿のやうにて物  
言ひ居れば、彼の者は何事を言ふぞと、傍の

を、此御ぼうたちのをしみ  
給ふさいふ。はなやかにみ  
やびか也。かゝるものは、  
うちくんじたるこそあはれ  
なれ。うたてもはなやかな  
るかなさて、こゝ物ほくは  
で、佛の御おろしをのみく  
ふが、いさたふさき事かな  
さ、いふけしきを見て、な  
ごかこゝ物もたべざらん、  
それがさふらはればこそ、  
さり申侍れさいへば、くだ  
もの、ひろきもちひなどを、  
ものにさりいれてさらせた  
るに、むげに中よくなりて、  
まろづの事をかたる。わか  
き人々いできて、男やある、

人に問へるに、其の乞食、哀れげなる聲作り  
にて、己れに言ふやう、私は佛の御弟子にて  
尼法師なれば、佛前の供物の下したるを賜は  
れと乞へども、法師達は惜みて與へ呉れずと  
言ふ。其の聲華やかに明朗なれば、斯る者の  
世に埋れて、打ち屈したるこそ氣の毒なれ、  
殊に外の物は食はずして、佛前の供物の下し  
たるをのみ乞ふは、殊勝なる心懸なりと言へ  
ば、彼の乞食之を聞きて、然にはあらず、外  
の物にても、如何でか食はざる事のあるべき、  
食はんにも其の物なければこそ、佛前の供物  
を乞ひたるなれと言ふにぞ、さらばとて、果

いづこにかすむ、なご口々  
にさふに、をかしき事、そ  
へごさなごすれば、うたは  
うたふや舞などするかさ、  
さひもはてぬに、まろはた  
れされん、ひたちのすけさ  
れん、れたるはだもよし、  
これがすまいさおほかり。  
又をさこ山の峰の紅葉は、  
さぞ名はたつくさ、かし  
らまろがしふる。いみし  
くにくければ、わらひにく  
みて、いれくさいふもい  
さをかし。これに何さらせ  
んさいふをきかせ給ひて、  
いみしう、なご、かくかた  
はらいたき事はせさせつ

物菓子、大なる餅などを、器物に入れて與へ  
たるに、直ぐさま善く懐きて、己に馴れ親み、  
種々の物語すれば、若き女房達も出で來りて、  
其方に男はありや、何處に住むやなど、口々  
に戯謔ひ問へば、噴飯に堪へざる程の可笑し  
き事、さては問はず語りの副へごさなごして  
話すものから、皆々面白がりて、歌は謠ふや、  
舞も知れりやと、言ひも終らぬに、夜は誰と  
寝ん、常陸介と寝ん、寝たる膚も好し」と謠  
ひ出せり、此の歌の末は尙ほ長けれど、此處  
には省きつ。さて此の歌を謠ひ終れば、又も  
「男山の峯の紅葉は、さぞ名は立つく」と

る。えこそきかで、みよなふたぎてありつれ。そのきぬひさつさらせて、さくやりてよさおほせ事あれば、さりて、それ給はらするぞ、きぬす、けたり、しるくてきよさて、なげさらせられたば、ふしながみて、かたにぞうちかけてまふものか、誠ににくくて、みな入にし。のちにはならひたるにや、つれに見えしらがひてありく。やがてひたちのすけさつたり。きぬもしるめず、おなじすゝけにてあれは、いづちやりにけんなどにくむに、右近の内侍の

謡ひ跳りて、頭を振り廻はす状の、餘りに淺ましく憎ければ、皆々笑ひ憎みて、歸り去ねと言ふも可笑し。さて何を與へなば宜しからんと言ふを、中宮には聞しめされて、何とて斯くも甚じく片腹痛き事を爲せつるぞ、餘りに聞くに堪へずして、耳を蔽ひてありつれ、併し其の衣一つを與へて、早く歸らしめよと仰せあれば、即ち其の衣を取りて、それ此の好き衣を、御前より賜はりたるぞ、煤け汚れたる衣に代へて、此の白き清らかなるを着よと言ひて、投げ遣りたれば、伏し拜みて、肩に打ち掛けて舞ふ状の、見るも憎氣なれば、

まゐりたるに、かゝるものなん、かたらひつけて置たる、かうしてつれにくるこそ、有しやうなど、小兵衛といふ人して、まればせてきかせ給へば、あれいかで見侍らん、かならず見せさせ給へ、御さくいなり、さらによもかたらひさらしなど笑ふ。其のち、又あまなるかたはの、いさあてやかなるがきたるを、又よび出て、ものなごさふに、これははづかしげにおもひてあはれなれば、きぬ一つ給はせたるを、ふしながむはされどよし。扱うち

皆々内に入りぬ。されど今日に馴れて、此の後絶えず来て困らされたれば、終に常陸介と名付けたり。然るに衣も白き清らかなるを着ず、同じ煤け汚れたるまゝなれば、與へたる衣を如何にせしやと、言ひ憎む程に、前に翁丸の所に見えたる女房の右近内侍が、中宮の御前に参りたれば、中宮には彼の常陸介の尼法師の事を御物語ありて、斯る尼法師を語らひ付けて置きたるが、常に來て、斯様な事を言ひもし、跳りもするよとて、女房の小兵衛と言へる年若き侍女をして、尼法師の有様を真似て聞かしめ給へば、内侍の申し上ぐる



なきよるこびて出ぬるを、  
はや此ひたちの介、いきあ  
ひて見てけり。其のちいさ  
久しく見えれど、誰かは思  
ひ出ん。」

やう、そは曾て見侍べりし事も候はず、此の  
次に彼れ参りなば、是非に見させ給へかし、  
御前の御得意の者なれば、必ず横取は仕らず  
さて笑ひたりし。然るに其の後、彼の尼なら  
ぬ別人の尼法師の不具者なるが、品好く美し  
き顔して來れるを、又た呼び止めて、話し懸  
けなごするに、此の尼は常陸介とは異なりて、  
耻かしげなる状の愛しければ、中宮には、衣  
一つ與へさせられたるを、伏し拜めるは善け  
れど、餘りの有難さに、悦び泣きて退り出づ  
るを、恰も常陸介、途中にて行き會ひたれば、  
之を見て妬くや思ひけん、其の後久しく來ら

さてしはすの十餘日のほど  
に、雪いさたかうふりたる  
を、女房どもなどして、も  
のふたにいれつゝ、いさ  
おほくおくを、おなじくは  
庭にまことの山をつくらせ  
侍らんさて、さふらひめし  
て、おほせ事にていへば、  
あつまりてつくるに、殿守  
司の人にて、御きよめにま  
ぬりたるなども、みなより  
て、いさたかくつくりな  
す。宮づかさなど、まゐり  
あつまりて、こそくはへこ

ざれど、誰も乞食の尼法師を、慕ひ思ふ者も  
あらざれば、其の儘にて日は過ぎ行きけり。  
斯くて十二月の十日過になりて、雪多く降り  
たれば、女房ども打ち寄り、物の蓋などに雪  
を盛り運びて、山のやうに積み置くに、同じ  
くは庭に眞實の雪の山を作らせばやと、中宮  
に申し上げて、侍の男を召し、中宮よりの仰  
なりと傳ふれば、多人數集りて、雪の山を作  
り始めたるに、殿守の下司などにて、洒掃に  
参り居たる者どもなど、皆々寄り集りて、高  
く作り成すを、宮司とて、皇后宮職の大夫、  
亮、大進、少進などの人も、來りて指揮すれ

さにつくれば、所のしう三  
四人まゐりたる、殿守つか  
さの人も二十人ばかりにな  
りにけり。里なるさふら  
ひ、めしにつかはしなごす。  
けふ此山つくる人には、ろ  
く給はずべし。雪山にまゐ  
らざらん人には、おなじか  
らず、さめんなごいへば、  
開付たるは、まごひまゐる  
もあり。里さほきは、えつ  
げやらず。つくりはてつれ  
ば、みやづかさめして、き  
ぬ二ゆひさらせて、えんに  
なげ出るを、一つづゝさり  
にまりて、ながみつゝこし  
にさして、みなまかでぬ。

ば、藏人所の衆も、三四人馳せ加はり、殿守  
司も二十人計りになれるを、尙も家里に歸り  
居る侍士にも、使を遣りて召し出され、今日  
の雪山を作る者には、褒美を賜はるべし、加  
勢に參らざる者は、賜り物なしと傳へしむれ  
ば、家里にある侍士にて、之を聞き付けたる  
者は、宙を飛んで惑ひ來るもあり。されど遠  
き家里には、告げ遣らざりしが、斯くて出來  
上りたれば、衣二束を褒美として、椽端に出  
し遣れば、皆々一つ宛を取りて禮拜し、包み  
て腰に挿して退り出でぬ。但し袍を着たる人  
達は、其の半數ほども残り居て、狩衣に着更

うへのきぬなごきたるは、  
かたへさらで、かり衣にて  
ぞある。これいつまであり  
なんぞ、人々のたまはする  
に、十餘日はありなん、た  
ゞ此ころのほごを、あるか  
ぎり申せば、いかにささは  
せ給へば、む月の十五日ま  
で、さふらひなんぞ申を、  
御前にも、えさはあらじと  
おぼすめり。女房などは、  
すべて年の内、つごもりま  
でもあらじとのみ申に、あ  
まりさほくも申てけるか  
な、げにえしもさはあらざ  
らん、ついたちなごに申べ  
かりけるを、下にはおもへ

へて侍べりつるに、此の雪山は、何日頃まで  
消えずありなんと、人々評定しけるを、十日  
餘りは支えぬべしと言ふ者のみにて、其の然  
らざる者とても、十日前後を多く隔て、言ふ  
者なければ、其方は如何に考ふるやと、中宮  
の仰せなるを、さん候、正月十五日までは、  
大丈夫に侍るべしと申し上ぐるに、中宮にも、  
其の頃まではよも消えずにはあるまじと、思  
召さる、御模様にて、女房達は何れも皆、年  
の内なり、晦日までは何ごかあるべきと申す  
に、さては己一人のみ、餘り遠く申しけるか  
な、實に人々の言はる、如く、正月十五日ま

ご、さばれ、さまでなくさ  
いひそめてん事はさて、か  
たうあらがひつ。

二十日のほごに、雨なごふ  
れご、きゆべくもなし。た  
けぞ、すこしおさりもてゆ  
く。しら山のくわんおん、  
これきやさせ給ふなご、い  
のるも物くるほし。さてそ  
の山つくりたる日、式部の  
ぞうたゞたか、御使にてま

では、到底支ふくべもあらず、正月朔日あた  
りと申すべかりしものをと、心の内には思ひ  
たれご、一旦左程短き日數にては、消えもや  
らずと言ひ出でたるを、軽々しくも言ひ改む  
べきにあらずと決心して、堅く前言を主張し  
置きぬ。

夫より十日ばかりしたる廿日の頃、雨降りた  
れご消えもせず。但し高さは稍減り行きたれ  
ば、古今集に「消え果つる時しなれば越路  
なる白山の名は雪にぞありける」と見えて、  
加賀の白山は、四季共に雪の消えざれば、此  
の白山に安置し奉れる十一面觀音に祈願し

ありたれば、しとれさし出  
し、物なごいふに、けふの  
雪山つくりせ給はぬ所なん  
なき。御前のつばにも、つ  
くらせ給へり。春宮、弘徽  
殿にもつくりせ給へり。京  
極殿にもつくりせ給へりな  
ごいへば

こゝにのみ

めづらしさみる

雪の山

まころぐに

ふりにけるかな

さ、かたばらなる人してい  
はすれば、たびくかたぶ  
きて、返しはえつかふまつ  
りけがさじ、あされたるみ

て、此の雪山を消えさせ給ふなど、一心籠む  
るも我ながら狂氣の沙汰なり。さて此の雪山  
を作りたる日、式部丞忠隆、主上よりの御使  
にて、中宮の御許へ参りたれば、先づ座布團  
を進めて、挨拶などする程に、忠隆の言ふや  
う、今日は何處も、雪山を作らせ給はぬ所と  
ては無し、中宮の御前の前裁は言ふも更なり  
三條院なる春宮にも、内親王の在する弘徽殿  
さては藤原道長卿の京極殿にも、作らせ給へ  
りと言へば、取り敢へず、

こゝにのみめづらしと見る雪の山

まころぐにふりにけるかな

すのまへにて、人々にを  
たり侍らんさてたちいき。  
哥はいみしくこのむさき、  
しに、あやし。御前にきこ  
しめして、いみしくよくさ  
ぞ、おもひつらんさぞ、の  
たまばする。つごもりがた  
に、すこしちひさくなるや  
うなれど、なほいさたかく  
であるに、ひるつかた縁に  
人々出ぬなごしたるに、ひ  
たちの介出きたり、なごい  
さ久く見えざりつるさいへ  
ば、なにか、いさ心うきこ  
さの侍しかばさいふに、い  
かに何事ぞさふに、猶か  
くおもひ侍しなりさて、な

と詠みて、傍に居たる人をして、忠隆に此の  
歌を告げしめたるに、忠隆たび／＼首肯き感  
じて、さて返歌を詠まんにも、却りて名吟を  
汚すの恐れあれば、返歌は詠み申すまじ、但  
し歌心ある風流の女房達の簾の前にて、此の  
歌を披露し侍るべしと言ひて、立ち歸りぬ。  
尤も此の歌は、雪の降りたるを古りたるに懸  
けて、珍らしと言へるに對照したるにて、雪  
の山は此處ばかりにて、珍らしと思ひ居たる  
に、何ぞ圖らん、請所方々に作られ古りたり  
と聞けば、珍らしと見ることこの甲斐もなしと  
言ふ意なり。さて忠隆は、歌好きなりと聞き

がやかによみいづ  
うらやまし  
あしもひかれず  
わたつうみの  
いかなるあまに  
ものたまふらん  
さなん思ひ侍しさいふを、  
にくみわらひて、人のめも  
見いれれば、雪の山にのぼ  
り、かゝつらひありきて、  
いぬるのちに、右近の内侍  
に、かくなんさいひやりた  
れば、なごか人そへて、こ  
ゝには給はせざりし、かれ  
がはしたなくて、雪の山ま  
でかゝりつたひけんこそ、  
いさかなしけれさあるを、

及びしに、返歌もせで歸りつるは奇怪なるが、  
之を中宮の聞き召されて、そは秀歌を詠み出  
でんと思ひたれば、生半なる歌ならば、寧ろ  
詠まざるに若かずと、考へし爲めなるべしと  
仰せられにき。斯くて十二月の晦日になりぬ  
るに、此の雪山は少しく小さくなりたるやう  
なれど、尙は高々としてあるぞ心強し。さて  
此日の晝時頃、女房達など椽端に出で居たる  
所へ、尼法師の常陸介の來れば、何故久しく  
見えざりしぞと問ふに、何事か心憂きこと侍  
りしなればと言ふ。さらば心憂きこと、は、  
何事ぞと重ねて問へば、斯く思ひ侍りしとて

又わらふ。さてゆきやまは。  
つれなくて、さしもいへり  
ぬ。」

一口に話すべかりしを、長々しくも歌に詠み  
出づ。其の歌は、

うらやまし足も引かれずわだつうみの

いかなるあまに物たまふらん

彼の品善き尼に、衣を賜ひしを妬み言ふなり

彼の尼、不具の跋なれば、許多の衣を賜はり

て、足も重げに歸り行く状を、足も引かれず

と言ひ通はせ、尼を海人に懸けて、渡津海と

言ひたるなり。斯る嫉妬の意憎くければ、皆

々笑ひ遠ざけて、見遣りもせず追ひ歸へしけ

れば、常陸介案に相違の手持不沙汰にて、雪

の山に登り、はらくと思ふも知らず、雪に

ついたちの日、又雪おほく  
ふりたるを、うれしくもふ

懸り歩いて行き去りぬ。後にて右近の内侍に、  
此の事を言ひ遣りたれば、なごか其の常陸介  
に人を付け添へて、此方へは寄來させ給はざ  
りしよ、彼が寄る邊もなくて、哀れにも雪の  
山までかゝづらひ歩きけんこそ、最と悲しけ  
れと言はれしかば、左程までに彼の乞食を思  
ひ遣らるゝにやとて又た笑ふ。然る程に年も  
暮れたれど、雪の山は強顔くも、其のまゝに  
消えもやらで、茲に年立ちかへる新玉の春を  
迎へぬ。

正月元日には、又た雪多く降りたれば、こ  
は有り難し、嬉しくも雪山に降り積みたるよ

りつみたるかなさおもふに、これはあいなし、はじめのをばおきて、今のをばかきすてよき仰せらる。うへにて、つぼねへいささうおるれば、さふらひのをさなるもの、ゆのはのごさくなるこのぬきぬの袖のうへに、あをきかみの松につけたるをおきて、わなゝき出たり。そはいづこのぞさへば、齋院よりさいふに、ふさめでたくおぼえて、さりて参りぬ。まだおほさのごもりたれば、もやにあたりたるみかうしおこなほんなど、かきよせて、ひさり

と、思ひしも仇なれや、愛もなく中宮の御詞とて、始めよりの雪は其のまゝに、今日降りたるは掻き捨てよとの仰なり。此の夜己れば、中宮の御許に侍りて、翌朝早く己が局へ下りたるに、村上天皇の御姫宮なる選子内親王、此の姫宮は、圓融院より後一條院まで、五代の齋院なれば、大齋院とも亦た齋院とも申し上ぐるなるが、此の姫宮よりの御使とは知らず、侍士の長なる者、袖の葉のやうなる粗末なる宿直の直衣を着たるが、其の袖の上に、青き紙の文を松の枝に付けたるを置きて、寒さに震へながら來りたれば、そは何處よりの

れんじてあくる、いさおもし。かたつかたなれば、ひしめくに、おごるかせ給ひて、なごさはするこのたまはすれば、齋院より御文の候はんには、いかでかいそぎあげ侍らざらんさ申に、げにいささかりけりさて、おきさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卵鍬二つを、うづゑのさきにかしらつゝみなごして、山たちばな、ひかげ、山すげなど、うつくしげにかざりて、御文はなし。たゞなるやうあらんやばさて、御らんすれば、うづち

文なりやと問へば、齋院よりと言ふにぞ、こは思も懸けぬ芽出度ことなりと存じ、其の文を受取りて上に参りぬ。されど中宮には、未だ御寝なりしかば、母屋の方の御格子を開けばやなど、彼よ此よと心積りして、先づ其の開け難き御格子を、纖弱き力もて、一心に念じて開くるに、なか／＼重く、殊に片重りして、轟々と音するに、中宮驚き醒め給ひて、如何なれば斯くも急ぎ開けて、轟めかすぞと仰せらるれば、齋院より御文の参り候へば、急ぎ開け侍るなりと申し上ぐるに、實に早き開け方なりとの給ひて、起きさせ給ふ。即か

のかしらつゝみたるちひさ  
きかみに、

山ごよむ

をのゝひゞきを

たづぬれば

いはひのつゝの

おさにぞありける

御返しにかゝせ給ふほども、

いさめでたし。齋院には、

これよりきこえさせ給ふ。

御返しも猶心ここにかけ

がし、おほく御ようい見え

たる。御つかひに、しろき

おり物のひさへ、すはうな

るは梅なめりかし。雪のふ

りしきたるに、かづきてま

あるも、をかしう見ゆ。此

て御文披き御覽すれば、五寸ばかりの長さな  
る卯槌二つを、卯杖に先の付けて、紙にて卯  
槌の頭を包み、山橋、女羅、山菅などを、美  
しく飾りたれど、文の詞は見當らず。されど  
是のみにあるまじ、文の詞なくては叶ふま  
じけれとて、御覽じ給へば、卯槌の頭包の小  
き紙に、

山ごよむ斧のひゞきを尋ぬれば

祝のつゝの音にぞありける

その一首を記されたり。歌の意は、山中に響  
き渡る聲は、柚人の斧の音ならんと思ひて、  
其の音を尋ね行けば、然にはあらで、正月初

たびは御返事をしらすな  
りにしこそ、口をしかりし  
か。

卯の祝の卯杖つきて、一年の病魔災厄を拂ふ  
音なり、と言へるにてありき。されば中宮に  
も、此の御返し歌を詠み給ひしこそ、洵に芽  
出たき次第なれ。之を始めとして齋院には、  
此の後しばし文通させ給ふ。さて今日の  
御返歌は、度々書き直しなごし給ひて、中宮  
の御用意の深さも拜察せらる。御使の侍士の  
長には、白の織物の單衣、表白く裏は濃き蘇  
芳の梅の衣など、正月に相應しき色合の衣を、  
祿として取らすれば、雪の降りしきる銀色の  
中を、赤色帯びたる衣を、肩に懸け行く状も  
面白し。されど此度は、齋院よりの御返歌の

雪の山は、まことにこのし  
にやあらんぞ見えて、きえ  
げもなし、くろくなりて、  
見るかひもなきさまぞした  
る、かちぬるこゝちして、  
いかで十五日まちつけさせ  
んぞねんすれど、七日をだ  
にえずぐさじと猶いへば、  
いかでこれ見はてんぞ、み  
な人思ふ程に、俄に三日、  
うちへいらせ給ふべし、い  
みしう口をししく此山のほて  
をしらすなりなん事と、ま  
めやかにおもふほどに、人  
もげにゆかしかりつるもの

あらざりしは、聊か遺憾なりしかし。  
さても雪の山は、眞實に越路の白山にてもあ  
らんかど見らるゝ迄に、尙ほ消え行く模様も  
なし。唯だ日數を経るまゝに、雪の色黒み渡  
りて、見る甲斐もなき状にはなりたれど、年  
の内に消えざりしこそ、最早言ひ勝ちたる心  
地すれば、尙ほ此の上は、如何にもして、十  
五日まで消えずあらま欲しと念するに、他の  
人々は、よも七日までは持ち得ずと争へば、  
此の勝敗の結果如何を見届けたしと、皆々思  
ふ程に、三日、中宮には俄に職の御曹司より、  
大奥へ入らせ給ふ事となりたれば、最と残念

をなごいふ。御まへにも、  
おほせらる。おなじくはい  
ひあてゝ御らんせさせん  
ぞ、おもへるかひなければ、  
御物のぐはこび、いみしう  
さわがしきにあはせて、こ  
もりさいふものゝ、ついぢ  
のほごに、ひさしきしてあ  
たるを、えんのもさちかく  
よびよせて、此雪の山いみ  
しくまもりて、わらはべな  
ごに、ふみちらさせこぼた  
せで、十五日までさふらは  
せ、よくくまもりて、其  
日にあたれば、めでたきろ  
く給はせんぞす。わたくし  
にも、いみしきよるこびい

にて、此の雪山の最後を見届けえまじと、忠  
實しく思ふに付けても、人皆も實に床しかり  
つるものをと、名残を惜むに、中宮にも亦た  
同じ心に在しませるとの仰せなり。されど、  
同じくは十五日までと言ひし事を、言ひ當て  
御覽せさせんと思へども、今は其の甲斐な  
ければ、御入内の御道具を運び騒ぐ最中に、  
築土塀の所に廂を差し懸け居る、庭木番の老  
爺を、椽端近く招き寄せて、此の雪山を大切  
に守りて、童女などに踏み散らせせず、十五  
日まで壊れずにあらしめよ。善く守りて其日  
に至らば、公にも立派なる御褒美物を賜はる



ほんなごかたらひて、つれにだいたん所の人、げすなごにこひて、くるくた物やなにやき、いさおほくさらせたれば、うちゑみて、いさやすきこと、たしかにまもり侍らん。わらははなごぞ、のぼり侍らんといへば、それをせいして、きかざらんものは、このよしを申せなご、いひきかせて。いらせ給ひぬれば、七日までさふらひて出ぬ。其ほごも、これがうしろめたきまゝに、おほやけびき、すまし、なごめなごして、たえずいましめにやり、七日の

べく、私にも亦た充分の悦びを申し述べしと、言ひ聞かせて、御臺所の人々、又は下司などの爲めに、常に申し受くると同じ菓子なごを、澤山に與へたれば、悦びて、最と容易き役目なり、確かに守り侍るべしと言ふにぞ、さらば童女なごが、雪山に登らんと言へば、必ず之を制止せよ、若し聞き入れざれば、今話したる次第を説き諭せと、言ひ含め置きぬ。斯くて中宮御入内ありて、七日まで御側に侍り、それより家里に退り出でたるが、此の七日までの間も、雪山の氣懸りなるまゝに、禁中の奉公人、洗淨女、下司の老女なる長女な

御節供のおろしなごをやりたれば、ながみつる事なご、かへりてはわらひあへり。里にても、あくらすなばち、これを大事にして見せにやる、十日のほごには、五六尺ばかりありさいへば、うれしくおもふに、十三日の夜、雨いみしくふれば、これにぞきえぬらんご、いみしうくちをし。今日もまぢつけでさ、よるもおきゐてたげけば、きく人も物くるほしとわらふ。人のおきてゆくに、やがておきいで、げすおこさするに、さらにおきれば、にくみはら

ごを遣して、間断なく彼の庭木守に注意を與へ、七日の御節供の七種の粥なごの、御下げ物を遣りたるに、拜み喜べる事なご、使の者の歸り来て笑ひ合へり。此の日、家里に退り出でたれご、翌八日の夜明ると共に、早速使をして、雪山を見に遣りなごするに、十日には未だ五六尺の高さありと言へば、此の模様にては大丈夫ならんと、嬉しく思へるに、圖らずも十三日の夜は、大雨なりしかば、之が爲めに消えもやせんと思へば、甚く残念に堪へず、僅に中一日にて、言ひ當つべき十五日なるに、之をしも待たで消ゆらんかと、夜も

だゝれて、おきいでたるを  
やりて見すれば、わらうだ  
ばかりになりて侍る、こも  
りいさかしこう、わらはべ  
もませでまもりて、あすあ  
さてまでもさふらひぬべ  
し。ろく給はらんぞ申さい  
へば、いみしくうれしく、  
いつしかあすにならば、い  
ささう歌よみて、物に入て  
まゐらせんと思ふも、いさ  
心もさなうわびしう。まだ  
くらきに、おほきなるをり  
ひつなごもたせて、是にし  
ろからん所、ひたものいれ  
てもてこのきたなげならん  
は、かきすて、なご、いひ

寝られず歎息するを、聞く人は狂氣の沙汰な  
りと笑ふ。明くれば十四日の朝なり、起き出  
で行く人のあるに、己れも起き出で、下司を  
起さしむるに、更に起きざれば、憎く腹立た  
しくて、取り敢へず起き出である者を遣りて  
見せしむれば、歸り來て言ふやう、藁蓋の圓  
座ばかりの大きになり侍る、庭木守の老人は、  
いと實直に雪山を守りて、童女なども近寄せ  
ざれば、明日明後日までも消えずあるべし、  
御約束の祿をも頂戴し得んこそ、有り難けれ  
と申したりとの事なば、そは最と嬉し、明  
日にならば、早朝に起き出で、歌を詠み、雪

くゝめてやりたれば、いさ  
さく、もたせてやりつる物  
ひきさげて、はやううせ侍  
りにけりさいふに、いさあ  
さまし。をかしうよみ出て、  
人にも語りつたへさせん  
さ。うめきすんじつる歌も、  
いさあさましくかひなく、  
いかにしつるならん。きの  
ふさばかりありけん物を、  
よのほごにきえぬらん事  
さ。いひくんずれば、こも  
りが申つるは、きのふいさ  
くらうなるまで侍き、ろく  
を給はらんぞ思ひつる物  
を、たまはらすなりぬる事  
さ、手をうちて申侍つるこ

山の残れる雪を器物に入れて、中宮の御前に  
奉らんと思ふに付けて、明日まで待つ間の、  
心もさなく侘し。さても十五日になりぬ、未  
だ明けやらぬ空の、四邊尙ほ暗けれど、大な  
る折櫃を持たせて、彼の雪山の雪の、一向に  
白き所ばかりを入れて來よ、汚き所は掻き捨  
てよなご、言ひ含めて遣りたるに、使の者間  
もなく歸り來り、持ち行きたる折櫃を其のま  
、提げて、雪山は既に消え失せ侍りぬと言ふ  
にぞ、そは大變なり、残念至極なり、面白く  
歌詠み出で、中宮の御前に奉り、人にも評判  
せさせんと、呻吟き苦みて詠みたる歌も、淺

いひさわぐに、内よりおほ  
せ事ありて、さて雪は、け  
ふまでありつやそのたまは  
せられたば、いされたく口を  
しけれど、年のうち、つい  
たちまでだにあらじと、人  
々けいし給ひし、きのふの  
夕くれまで侍しを、いさか  
しこしとなんおもひ給ふ  
る。けふまではあまりの事  
になん、夜のほごに、人の  
にくがりてさりすて侍にや  
さなん、おしはかり侍るこ  
けいせさせ給へと、きこえ  
させつ。さて二十日にまる  
りたるにも、まづ此事を御  
前にもいふ。皆きえつ

ましきかな、全く徒勞となれり。昨日までは、  
圓座ほどの大さありしものを、如何なれば、  
夜の間に消え失せけん事よと、打ち屈して落  
膽すれば、使の者の言ふやう、庭木守の申す  
には、昨夕暮れ果つる迄は、其のまゝに侍り  
つるを、今朝になりて此の始末なれば、折角  
樂みにしたる御褒美物も、残念にも頂戴出来  
ずなりしとて、手を拍ちて無念がり申しつる  
と、言ひ騒ぐ折しも、大奥よりの御使にて、  
雪は今朝までありつるやと問はせ給へば、即  
ち御答申し上ぐるには、最と残念には侍べれ  
ど、雪は今朝まで残り侍べらず、但し年内さ

さて、ふたのかぎりひきさ  
げて、もてきたりつる。ほ  
うしのやうにて、すなはち  
まうできたりつるが、あさ  
ましかりし事。ものゝふた  
に、こ山うつくしうつくり  
て、白き紙にうたいみしく  
かきて、まゐらせんせし  
事なごけいすれば、いみし  
くわらはせ給ふ。おまへな  
る人々もわらふに、かう心  
にいておもひける事を、  
たがへたればつみあらん。  
まここには、四日の夕さり、  
さふらひごもやりて、さり  
すてさせしぞ。かへり事に  
いひあてたりしこそをかし

へも覺束なし、元日までは如何で消えざらん  
と、人々の言上し奉りたれど、昨日十四日の  
夕暮までは、確かに残り侍りたれば、賢くも  
言ひ當てたりと、思召し給はれかし。今日ま  
で残らんは、餘りに賢こすぎたればとてか、  
憎み妬む人のありて、夜の間に取り捨てられ  
しと、推し量り侍るとなん、言上し奉り給へ  
と、御使の者に言ひ遣りたり。さて廿日には、  
御前に参上したるに、先づ此の雪山の事を申  
し上げ、彼の十五日の朝早く、使をして雪を  
取り来よと、折櫃を持たせ遣り侍べれど、皆  
消えて残りもなしとて、空しく櫃蓋のみを提

かりしか。そのおきないで  
きて、いみしう手をすりて  
いひけれど、おほせ事ぞ、  
かのよりきたらん人に、か  
うきかすな。さらばやうち  
こぼたせんといひて、左近  
のつかさ、南のついでに、こ  
に、みなさりすてし。いさ  
たかくて、おほくなんあり  
つさ、いふなりしかば、げ  
に二十日までもちつて、  
て、えうせずば、こさしの  
初雪にも、ふりそひなまし。  
うへにもきこしめして、い  
さおもひよりがたくあらが  
ひたりと殿上人などにもお  
ほせられけり。さてもかの

げて、櫃の身を頭に戴き、帽子のやうにして  
他愛もなく歸り來つる時の淺ましかりし  
事、さては其の雪を器物の蓋に、小山のやう  
に美しく作り、雪の色に真似て、白き紙に歌  
を善く書きて、奉らんとせし事などを申し上  
ぐれば、甚く笑はせ給ひ、御前に侍ふ人々も  
皆笑はる。斯くて中宮の仰せらるゝには、其  
れ程までも心に入れて、用意しける事を、氣  
の毒にも手違させたるは、罪なる事なれば、  
包み隠さず告げ知らせんに、眞實は十四日の  
夕暮時、侍士どもに命じて、取り捨てさせし  
なり。十五日の朝の返事に、それとも知らず

歌をかたれ、いまはかくい  
ひあらはしつれば、おなじ  
こさかちたり。かたれなご。  
御まへにもたまはせ、人  
々ものたまへご、なにせん  
にか、さばかりの事をうけ  
給はりながら、けいし侍ら  
ん。なご、まめやかにうく、  
心うがれば、うへもわたら  
せたまひて、まごに年ご  
ろは、おほくの人のめりさ  
みつるを、これにぞあやし  
くおもひしなご、おほせら  
るゝに、いさごつらく、う  
ちもなきぬべき心ちぞす  
る。いであはれいみしき世  
の中ぞかし。のちにふりつ

言ひ當てたりしは、可笑しかりしよ。さても  
取り捨てん時、木守の翁出で来て、甚く手を  
摺り合せて、斷り申せしかご、上命なるぞ、  
邪魔いたすな、清少納言には必ず事の次第を  
告げ聞かすべからず、若し告げ聞かさば、廂  
懸けたる木守小屋を、打ち毀つべしと言ひ嚇  
して、左近衛の司人などして、彼の雪を左近  
衛の陣の南なる、築土塀の外に捨てたりしが、  
其の雪多くありて、最と高く積みたりと言へ  
ば、尙ほ廿日まで待ちて、消えざりせば、  
今年の初雪にも降り添ひて、何時までも残る  
ならんと思はれたり。此の事、主上にも聞し

みたりし雪を、うれしきおもひしを、それはあいなしきて、かき捨よなどおほせごご侍しがお申せば、げにかたせじとおぼしけるならんぞ、うへもわらはせおはします。」

召させられて、清少納言は、人の思ひ寄らざる正月十五日までなご、能くも言ひ争ひたるものかなど、殿上人などにも仰せ聞せありたりされば折角に詠みたる彼の歌を語り出せよ、今は斯く打ち明けて物語しつるからは、其方の勝ちたると同じ事なり、さ早く其の歌を言へよかしと仰せられ、御前に侍ふ人々も、同じく促し給へど、今となりては、申し上ぐるも詮なし、既に事の次第を拜聞し奉るからは、興も醒め果て、氣も失せて、啓し奉らんも力なしと御答申して、心憂き限りなるまよ、打ち萎れ居たるに、主上にも此處に渡御あら

せ給ひて、玉音畏くも、實に年來は、清少を人並々の者と見わたるに、斯くも日敷を言ひ當つるなどは、人に優れて奇特なりと思ひしなど、御褒の御言葉を戴きければ、恐れ多さの餘りに、却りて心苦しく、消えも失せたく、打ちも泣きなん思こそしたれ。さても世の中は、いみじくも哀れなるものぞかし。彼の雪山を作らせ給ひし後、元日になりて又た雪降り積りたりしを、天の祐けと悦び勇みしに、そは面白からずとて、新に降りたる雪を掻き捨てよとの、中宮の御前の御命ありしと、奏上し奉れば、主上には、そは氣の毒なり、實

上卷終

上卷終

に勝せまじと思して、然る事侍べりしならんと仰せありて、笑はせ在しまし〜けり。

中卷

中卷

四卷五十二段より成る

卷の五

四十五より五十に至る六段より成る

【四十五】めでたきものからにしき。かざりたち。つくり佛のもく。いろあひよく花ぶさながくさきたる藤の松にかゝりたる。」

六位の藏人こそなほめでた

【四十五】

めでたきもの

唐錦、蜀紅錦など。さては節會、内宴、御襖行幸の時、五位以上の王卿に佩用を聽許せらる、鏝太刀、栴檀、沈香などの名木にて作りたる佛像の木理の美はしき。花の色合申し分なく、花總いと長々と咲きたる藤の、緑なす松が枝に懸りたるなど。何れも皆見事なるものなり。更に見事なるは、六位の藏人なり。同じく六

けれ。いみしき君達なれどもえしもき給はぬあやおりものを、心にまかせてきたる。あないろすがたなど、いさめでたきなり。所のしう、ざふしき、たゞの人の子ごもなごにて、殿原の四位五位六位も、つかさあるが下に、うちゐて、何さ見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞ、あさましくめでたきや。せんじもてまゐり、大饗のあまくりのつかひなごにまゐりたるを、もてなしきやうようし給ふさま、いづこなりしあまくたり人ならんこそ

位なれども、地下の間は然も見すばらしき風姿なるに、藏人に補せらるれば、昇殿禁色を聴され、攝家清華などの高貴の公子も、尙ほ着るを得ざる綾羅の織物を、心任せに着て、青白の椽なる麴塵の袍とて、天皇の御常服なると同じ色の袍を着けたる姿は、實に見來なるものなり。其の始めは、藏人所の衆、又は雑色として、雑役に服し、或は身分なき人の子なごにて、物の數とも見えざりし者も、一朝にして藏人に昇進すれば、四位五位六位の有位無官の人々の上席に列するなど、餘りの見事さは、言語に絶する程なり。又た藏人頭

おぼゆれ。御むすめの女御后におはします、まだひめ君なご聞ゆるも、御使にてまゐりたるに、御文さりにるゝまよりうちはじめ、しきれさし出る袖ぐちなど、あけくれ見しものさもおぼえず、下かされのしりひきちらして。ゑふなるはいますこしをかしく見ゆ。みづから盃さしなごし給ふを、我心にもおぼゆらん、いみしうかしこまり、べちにぬし家の君たちをも、けしきはかりこそかしこまりたれ、おなじやうにうちつれありく。うへのちかくつかはせ

の承り奉れる宣旨を、六位の藏人が奉持して、直に其の旨を宣下する状の尊しく、或は大いに任せられたる人の、披露饗宴の大饗、之は左大臣は正月四日、右大臣は五日に行ふものにて、大納言以下、外記史官に至る迄を饗應するものなるが、此の時禁中よりは、甘栗の使とて、甘栗などを高坏臺盤に盛りて、其の新任大臣の許に遣はさるゝを、六位の藏人青色の袍を着て、勅使として其の邸に臨めば、主人の大臣恭しく應對して、懇ろに饗應し、且つ祿を取らせなごする其の時の藏人は、何處の天人なりやと思ふ計りの見事さな

給ふさまなど見るは、れたくさへこそおぼゆれ。御文か、せ給へば、御すりのすみすり。御うちはなごまり給へば、われつかふまつるに。みさせよさせばかりのほごを、なりあしく、物のいろよろしうてまじろはんば、いふかひなきものなり。かうふりえて、おりんこそちかくならんだに、いのちよりはまさりておしかるべき事を、其たまはりなご申て、まごひけるこそ口をしけれ。昔の藏人は、こそしの春よりこそなきたちけれ。今の世には、はし

り。又は攝家大臣などの御女にて、今は皇后に在りますが、まだ姫君にて御入内あらせられざる時、六位の藏人、禁中よりの御使にて参りたるに、其の姫君、先づ御文を受け取られて、さて座布團などを御使の藏人に進められなごするに、其の姫君の美々しき袖口の見ゆるなごは、平常の召物とも覺えず、今日は殊に着飾り給ひて、下襲の裾さへ長く引かれたるは、御使に對する御會釋にて、藏人の面目は言ふも更なり。尙ほ又た衛府の藏人として、左右衛門、左右兵衛などを兼ねたる者は、一層めでたき者にて、攝家などに参りても、主

りくらはをなんする。」

人手づから盃を差し給ふものから、藏人自からも、我身の程の有り難さを、心にしみとくと思ふなるべし。さては地下にありて、未だ藏人を拜命せざる頃には、攝家上達部の公達に對しては、甚く畏まりて同席も許されず、別間に控へゐたりしに、藏人になりては、勿論敬意を表しながらも、此等の公達と同席するは言ふ迄もなく、相携へて同じく連立ち歩くなご、一躍して高位に列せるは、實に芽出たき事ごもなり。殊に主上の御側近く召されて、天顔に咫尺するなごは、外の見る目も妬く羨しき程なり。即ち主上の御文書せ給ふ折



には、御硯の墨を磨り、暑さの砌にて御團扇を召し給へば、取り次ぎて主上に奉るなど、恐れ多き役目を承るものから、其の任期の三年四年の間は、せめては衣裳なども着飾りて、不敬に亘らざるやう注意せま欲しきものなり。さて其の任期満つれば、巡爵とて、五位に昇叙せられて藏人を退き、再び地下となるの例なるが、地下となりては、又た主上の御前に參る事も得ず、公達など、列座同行も出來ざれば、藏人退官の間近に迫り來るは、生命よりも何よりも惜かるべき筈なれば、昔の藏人は、今年の冬に退官の期なるを、其の春

はかせのさえあるは、いさめでたしさいふもおろかなり。かほもいさにくげに、げらうなれども、世にやんごさなき物におもはれ、かしこき御前にちかづきまゐり、さるべき事などさばせ給ふ、御文の師にてさふらふは、めでたくこそおぼゆ

よりして歎き悲めども、今の藏人は、巡爵の後、更に受領などを申請して、國司の任官に預からんものと、只管其の職を求むるに汲々として惑ひ煩ひ、互に獵官を競争するが如きは、興も醒めて見苦しきものなり。文章博士、大學博士、國博士などの學位ある者のみに限らず、儒家には、紀傳を専門とし、又た明經を世襲するもあるが、總べて博學にして才識秀絶なるは、芽出たき事言ふを待たず。大方學者などの顔は、苦み交りの憎げなるものにて、蕭洒たる美貌なるは少く、其の位とても低くして、文章博士は從五位下、大

れ。願文も、さるべきもの  
序つくり出して、ほめら  
るゝいさめでたし。」

法師のさえある、すべてい  
ふべきにあらず。持經者の  
ひざりしてよむよりも、あ  
またが中にて、時などさだ

學博士は正六位下相當の下臈なれども、其の  
才學を以て世の尊敬を受け、主上春宮の御前  
にも近く召されて、御下問に奉答するの光榮  
を荷ひ、又た御侍讀として、畏れ多くも一天  
萬乗の君の御師範たるは、洵に芽出たき限な  
り。されば神佛の御祈願文、其の他の詩序な  
ごを執筆して、御賞詞を賜はるが如きは、實  
に無上の面目にて、芽出たしとも亦た芽出た  
し。

法師の善知識なるも、亦た芽出たきこと言ふ  
計りなし。禁中にて御讀經の折など、一人し  
て讀まんよりは、多數の人々と共に、朝晝夕

まりたる御ごきやうなご  
に、なほいさめでたき也。  
くらうなりて、いづら御ご  
きやう、あぶらおそしなご  
さいひて、よみやみたるほ  
ご、しのびやかにつゞけぬ  
たるよ。」

後のひるのぎやうけい。御  
うぶや。みやはじめのさほ  
うしく、こまいぬ、大しや  
うじなごもてまゐりて、御  
ちやうのまへにしつらひす  
ゑ、内膳御へついわした  
てまつりなごしたる。ひめ  
ぎみなご聞えしたゞ人さこ

なごの時を定めたる御讀經に、善知識の法師  
の交れるは、尙ほ更に芽出たし。黄昏時にな  
りても、まだ讀經の聲すれば、そは誰にかあ  
らん、いと有り難き事かな、早く御燈明をと  
言はるゝ迄も、忍びやかに讀みつゝ居たる芽  
出たさかな。

皇后の晝の行啓、さては御出産時の御産殿な  
ご、芽出たく見事なるものなり。又た立后式  
の作法嚴かに、狛犬、大床子など持ち参り、  
狛犬は惡魔疾病除として、御帳の前に据えら  
れ、大床子は御食事の膳臺なれば、内膳司之  
を奉行し、御竈をも据え直しなごしたるが、

そ、露見えさせ給はれ。」

一の人の御ありき、春日ま  
うで、えびぞめのおりもの、  
すべて紫なるは、なにも  
くめでたくこそあれ。花  
もいさもかみも。むらさき  
の花の中には、かきつばた  
ぞすこしにくき、いろはめ  
でたし。六位のさのぬすか  
たのをかしきにも、むらさ  
きのゆゑなめり。」

皇后の御氣色を拜し奉るに、入内以前の姫君  
其の人ども、露ほども見えさせ給はず、いと  
尊嚴なる御状の、めでたき事限りなし。  
一の人なる攝政關白の他出の際、又は藤原氏  
の祖神なる春日の社に参拜の時などは、經は  
赤、緯は紫なる葡萄染の織物を着るが例なり。  
獨り織物のみならず、すべて紫は何物にても  
芽出たきものなり。花にても、糸にても、亦  
た紙にても、紫なるは好し。但し花の中にて、  
燕子花のみは、其の色の紫なるは芽出たけれ  
ど、花の形は餘りに感心出來がたし。六位の  
藏人の宿直姿の芽出たきは、禁色たる紫を其

ひろき庭に、雪のふりしき  
たる。」

今上一のみや、まだわらは  
にておはします、御をぢ  
に上達部などの、わかやか  
にきまげなるに、いだから  
させ給ひて、殿上人など  
めしつかひ、御馬ひかせ  
て御覽じあそばせ給へる、  
思ふ事おはせじと覺る。」

【四十六】 なまめかしき  
もの

の衣に許されたればなり。  
ひろくしたる庭前に、眞白なる雪の美しく  
降り敷きたるは、見事なるものなり。  
一條天皇の第一の皇子敦康親王は、未だ御幼  
少に在しますなるが、御母君は皇后定子の宮  
にましますせば、御叔父には、内大臣伊周卿、  
中納言隆家卿などの上達部ありて、まだ若や  
かに容姿清秀なる此等二卿などに、抱かれさ  
せ給ひて、殿上人など召し連れられ、木の馬  
引かせて、遊び給へる有様は、實に無邪氣に  
て芽出たきものなり。

【四十六】 なまめかしきもの

ほそやかにきよげなるきん  
だちの、なほしすがた。を  
かしげなる童女の、うへの  
はかまなど、わざさにはあ  
らで、ほころびがちなるか  
ざみばかりきて、くすだま  
など、ながくつけて、かう  
らんのもさに、あふぎさし  
かへしてゐたる。わかし人  
のをかしげなる、夏のきち  
やうの、したうちかけて、  
しろきあや、ふたあひ引か  
されて、手ならひしたる。  
うすやうのさうし、むらご  
の糸して、をかしくさちた  
る。柳のもえたるに、青き  
うすやうにかきたる文つけ

身の丈すらりとして細やかに、眉目秀麗なる  
公達の、直衣姿は優美なるものなり。又た愛  
らしき童女が、態々ならず表袴を着け、襟袖  
口などの廣く開き勝ちの上衣なる汗衫ばかり  
を、軽く涼しげに着て、薬玉の飾などを袂に  
長く付けて、欄干に凭りながら、扇を顔に翳  
し居る状の、なまめかしからでやは。或は宮  
仕の女房の顔美しきが、生帷子にて作りたる  
夏の几帳の裾を、帳臺に打ち掛けて、白綾と  
二藍の衣を重ね着て、静に机に向ひて手習せ  
る状。濃き薄き濃濃の色糸にて、面白く綴  
ぢたる薄葉紙の書物。柳の新緑の萌え出でた

たる。ひげこのをかしうそ  
めたる、五えふの枝につけ  
たる。みへがされのあふ  
ぎ、いつへはあまりあつく  
なりて、もさなごにくげ  
也。よくしたるひわりこ。  
しろきくみのほそき。あた  
らしくもなく、いたくふ  
りてもなきひはだ屋に、さ  
うぶうるはしくふきわたし  
たる。あなやかなるみすの  
したより、くちきがたのあ  
さやかに、いさつやゝかに  
て、か、りたるひもの、ふ  
きなびかされたるもをか  
し。夏の、かうのあざやか  
なるすのさの、かうらんの

る枝に、青色の薄葉紙に歌など書きたるを付  
けたる。竹の端を編み残して、鬚のやうにし  
たる鬚籠に、花を挿し入れて、五葉の松の枝  
に懸けたる。檜の薄板を骨として作れる檜扇  
の、公卿は其の骨廿五枚、殿上人は廿三枚、  
女官などは卅九枚なるが、其の扇の両方の上  
を、五重は厚きに過ぐるを以て、三重づゝに  
薄葉紙に包み、五色の糸にて綴ち結びたる其  
の扇の手元。上手に細工したる檜物作りの破  
籠。細き白の組糸。新しくもなく、又た左ま  
で古くもなき、檜皮葺の屋根に、端午の節供  
の菖蒲を、美しく置き渡したる。青々したる

わたりに、いさをかしげな  
るれこの、あかきくびつな  
に、白きふだつきて、いか  
りのをくひつきて、ひきあ  
はくもなまめいたり。」

御簾の下より、朽木形とて、人字形の繪形を  
書かれたる凡帳の、鮮かなるが見えて、御簾  
に垂れたる艶やかなる紐の、風に吹き流され  
たる夏景色。さては夏向きの縁取りしたる涼  
しげなる簾の外、欄干の邊りに、美しき猫  
の赤き頸綱したるが、白き札を其の綱に付け  
られたりとして、引き止められたる碇綱を、面  
白く戯れ啣へて、引き歩きける。いづれも皆  
なまめかしく優美なるものなり。さて此の碇  
綱は、碇を付けて物に懸けたる綱とも、亦た  
怒る氣色は無く、戯れ遊べる綱とも言ふも  
のあれど、そは何れも牽強にて、唯だ猫を引

五月のせちのあやめの藏  
人、さうぶのかづら、あか  
ひもの色にはあらぬを、ひ  
れくたいなごして、くすだ  
また、みこだち、かんだち  
めなごの、たちなみ給へる  
に、奉るもいみしうなまめ  
かしとりて、こしにひき  
つけて、ぶたうしはいし給  
ふも、いさをかし。ひさり  
のわらは、なみの君たちも、  
いさなまめかし。六位のあ

き止むるより、斯くは碇綱と呼べるまでにて、  
眞實の碇を付けたるにもあらず、さては怒る  
の意義にもあらざるなり。  
五月五日の菖蒲の節供に、禁中の儀式を奉行  
する内侍又は女藏人などが、赤紐とて、赤色  
の紗を疊みて、鮑結にして右の肩に一筋付け、  
更に又た赤紐の、其の赤色ならぬ青色の菖蒲  
の鬘を、頭に挿し飾り、衿には領巾とて、同  
じく飾の布帛を付け、裾には裙帯を施しなど  
したるが、皇子皇女上達部の人達の並び居さ  
せ給へるに、薬玉の美しく飾れるを奉るなど、  
極めて優美なるに、其の薬玉を腰に着けて、

をいろのそのあすがた。り  
んじのまつりの舞人。五節  
のわらは、なまめかし。

宮の五せち出させ給ふに、  
かしづき十二人。こさこさ

皇子皇女達の悦び舞ひ跳いせ給ふは、殊に芽  
出たし。或は五節の舞姫の禁殿に参る時、香  
爐を持ちて先に立つ一人の童女。さては小忌  
の君とて、新嘗、豊明、大嘗などの節會に齋  
戒して、白き布を粉張にし、山藍にて草、鳥  
などの模様を摺り出せる青摺衣を着たる殿上  
人の扮装こそ、また優美なるものなれ。又た  
六位の藏人の、青色の袍を着たる宿直姿。賀  
茂八幡などの臨時祭の舞人。五節の舞姫など。  
皆なまめかし。  
中宮の御方より五節の舞姫を出させ給ふに、  
其の舞姫の侍女十二人、之に付き添ふことな

るには、みやす所の人出す  
をば、わるき事にぞするこ  
きくに、いかにおぼすにか、  
宮の女房を十人出させ給  
ふ。今ふたりは、女院しげ  
いしやの人、やがてはらか  
ら成けり。たつの日の、あ  
をすりのからきぬ、かざみ  
をきせ給へり。女房にだに、  
かれてさしもしらせず、殿  
上人には、ましていみし  
うかくして。みなさうぞく  
したちて、くらうなりたる  
ほごに、もてきてきす。あ  
かひもいみしうむすびさげ  
て、いみしくやうしたるし  
るききぬに、かた木のかた、

るが、元來舞姫は、公卿受領などより出すが  
例なれば、中宮の御方より出すは常規に非ず  
と聞けど、如何なる思召にや、女房十人を侍  
女として出し給ひ、外の一人は、中宮の御妹  
にて、三條院の女御なる淑景舎と、同じく中  
宮の御伯母君にて、一條天皇の御母后に在ら  
せらるゝ東三條院とより出させ給ふ。殊に此  
の二人の女房は姉妹なり。斯くて舞姫の装束  
は、丑の日は赤色の唐衣。寅の日は青色の唐  
衣。辰の日は青摺の唐衣とて、白布を粉張に  
し、山藍にて草鳥などの模様を摺り出せるも  
のなるが、之を女房にも知らせず、勿論殿上

ゑにかきたる、おり物のか  
らきぬのうへにきたるは、  
まことにめづらしき中に、  
わらは、いますしなま  
めきたり。下づかへまで、  
つゞきたちいでぬるに、か  
んだちめ殿上人、おどろ  
き興じて、をみの女ばうこ  
つげたり。」

人には内密にて、日の暮るゝを待ちて、舞姫  
に辰の日の装束をさせ、汗衫などを其の上  
に着させ、赤紐を面白く結び下げ、侍女の女房  
は、小忌の扮装にて、白き衣に櫛木の模様を  
摺繪にしたるを、織物の唐衣の上に着たるな  
ご、洵に珍らしきが中に、舞姫は一段の美々  
しさにて、之に従ふ下侍女まで、列を作して  
出で立つ程に、上達部殿上人など、始めて之  
を見て、且は驚き、且は興がりて、小忌の女  
房と名づけなごせり。但し小忌と言ふは、殿  
上人などが、新嘗、豊明、大嘗、さては五節  
の節會などの神事の役名にて、皆青摺姿なる

をみのきんだちは、まにぬ  
て、ものいひなごす。五せ  
ちのつぼねを、みな、こぼ  
ちすかして、いさあやしく  
てあらする、いさこさやう  
なり。其夜までは、なほう  
るはしくこそあらめと、の  
たまはせて、さもまごぼさ  
す、きちやうごものほころ  
びゆひつゝ、こぼれ出た  
り。小兵備さいふが、あか  
ひものさけたるを、これを  
むすばやさいへば、され

を、今此の女房達の同じ姿に粧ひたれば、斯  
くは戯れて小忌の女房とは言ひけるなり。  
さて小忌の君達は、式場の外にありて、今し  
も式場に入らんとする舞姫の行列を見て、物  
言ひ懸けなごするもあり。斯くて辰の日の儀  
式も濟みぬれば、五節の式場たる局の装飾な  
ご、皆々取り毀ちなごして、其の俄に變る見  
苦しき有様は、殊の外異様の感あるものなる  
が、中宮には此の儀式を、尙ほ厭かず思召さ  
るゝものから、切めて此夜だけは、舞姫の装  
束を解かずして、其の儘に美々しくあるべし  
と仰せられ、早くも寝させ給はず、几帳の綻

かたの中將、よりてつく  
るふに、たゞならず  
あし引の

山ゐの水は  
こぼれるを  
いかなるひもの

さくろなるらん  
さいひかく年わかき人の、  
さるけそのほごなれば、  
いひにくきにやあらん、返  
しもせず。そのかたばちな  
るおきな人たちもうらすて  
つゝ、さもかくもいはぬを、  
みやつかさなどは、みよこ  
めてきよけるに、久しく  
なりにける、かたはらいた  
さに、こごかたよりいり

びを繕はせなごし給ふに、袖口などの色あざ  
やかに溢れ出づる衣の、美はしさ言はん方な  
し。此の時此の儀式に列したる侍女の一人に  
て、年若き女房なる小兵衛と言へるが、彼の  
赤紐の解けたるを結ばいやと言へる折しも、  
左中將實方卿寄り添ひて、其の紐を繕ひやり、  
氣色も嬉しげに、

あし引の山ゐの水はこぼれるを  
いかなるひものさくろなるらん

と詠みて、小兵衛の女房に言ひかけられたり。  
足引は山の枕詞にて、小忌の装束の山藍の摺  
模様の衣きたる其の山藍を、山井にかけて水

て、女ばうのもさによりて、  
なごかうはおほするなご  
ぞ、さゝめくなるに、四人  
ばかりをへだてゝおたれ  
ば、よく思ひえたらんに  
も、いひにくし。まして哥  
よむさしりたらん人の、お  
ぼろけならざらんは、いか  
でかさ、つゝましきこそは  
わるけれ。よむ人は、さや  
はある。いさめでたかられ  
ど、れたふさこそはいへさ、  
つまはじきをしてありく  
も、いさをかしかれば、  
うすこほり

あわにむすべる  
ひもなれば

と言ひなし、水より氷と言ひて、又た紐に懸  
け、我が思の結れたるは、猶ほ山井の水の氷  
れるが如くなるに、如何なる故にや、山藍摺  
の衣着たる其人の、赤紐の解けたるは、斯く  
言ふ實方に心を解きたるにや、其の返事こそ  
聞まほしけれと言ふ意なれど、小兵衛は年ま  
だ若きが上に、斯る晴がましき場所なれば、  
答へんにも言ひ悪ければ、何の返歌もせざる  
を、傍に並び居る年長の女房達さへ、其の儘  
に打ち棄て、何事も言はざれば、此の返し  
歌如何にと、耳を澄して侍ちたる中宮大夫以  
下の面々も、餘りの待遠しさに堪へ難くて、



かざす日かげに  
ゆるふばかりそ  
と、辨のおもささいふに、  
つたへさすれば、きえいり  
つゝ、えもいひやらす。な  
ごかくと、みゝをかたぶ  
けてさふに、すこしこさ  
もりする人の、いみしうつ  
くろひ、めでたしきかせ  
んと思ひければ、えもいひ  
つゞけすなりぬるこそ、中  
くはちかくす心ちしてよ  
かりしか。「おりのぼるおく  
りなごに、なやましといひ  
いれぬる人をも、の給はせ  
しかば、あるかぎりむれた  
ちて、こさにもにす、あま

人々の見ざる方面より、女房達の傍に寄り來  
て、何ぞ斯くも手持無沙汰に返歌もせざるや  
なご、耳語けども、己れは小兵衛との間に、  
四人ほごも隔てたれば、善き返歌を思ひ付き  
たれども、人々を差し措きては言ひ出し悪く、  
況して歌人と知られたる實方卿の、尋常一様  
ならざる歌に對しては、如何でか卒爾に返歌  
さるべきと、我ながら憶したるは、此の場合  
却りて宜しからざりしなり。されば中宮大夫  
の人々は、尙も一同に向ひて、苟も歌詠まん  
程の人は、何故に斯くも返歌せずやはある、  
たとひ善き歌ならぬものにも、返歌せざるは

りこそうるさげなめれ。「ま  
ひびめは、すけまさのうま  
のかみのむすめ。そめごの  
式部卿の宮の御おさうさ  
の四のきみの御はら、十二  
にていさをかしげなり。は  
ての夜も、おひかづきい  
もさわがす。やがてじやう  
殿よりさほりて、清涼殿  
のまへのひがしのすのこよ  
り、まひ姫をさきに、う  
への御つぼねへまゐりしほ  
ご、をかしかりき。」

妬きものなるに、さても斯程の名吟に、返歌  
する人なきは何事ぞやと、指弾して耻らしめ  
給ふものから、今は躊躇ふべきにあらずと思  
ひて、大夫たちの勸め歩くを可笑しがりつゝ、  
うす氷あわにむすべるひもなれば  
かざす日かげにゆるぶばかりぞ  
と詠みて、辨の御許と呼べる女房して、言ひ  
傳へさするに、此の御許消え入るやうに耻ら  
ひて、はかくしくもえ言はず。但し此の歌  
は、紐を氷に言ひ添へ、辰の日の青摺衣には、  
赤紐を右手に結び、日蔭鬘を飾るなるを、日  
の影に言ひ懸けて、實方卿の山井の水は氷る

と言はれたれど、其の氷は唯だ泡沫の氷りたるまでにて、薄きものなれば、即ち日影にゆるび解けんが如く、小兵衛の女房に深き思ありて、赤紐の解けたるにはあらざらめとの意なり。されど辨の御許の言ひ傳へ難き状なるを、實方卿を始め、中宮大夫以下の人々まで、如何にくと耳を傾けて問ふものから、唯さへ口吃る御許の、尙も吃るが上に、甚く其の聲を繕ひなごして、此の歌を善き歌なりと聞かせんとするに付けて、ますく言ひ續けえずなりたれば、之れそ己が爲めには耻を隠したる心地して、却りて辛なりしなり。偕

て此の五節の舞姫を送り迎へするに、或は所勞なりと申し入れたる女房までも、中宮の仰せ否みがたくて、皆々連立たれば、中宮より舞姫を出すさへ既に異例なるに、付添の女房餘りに多ければ、却りて煩さき迄なりしが、其の舞姫は、右馬頭助正の娘にて、母は染殿式部卿爲平親王の御息所の第四の妹君なるが、此の舞姫未だ十二歳にて、容儀端麗なり、五節の式の終りたる夜も、女房に負ひかづかれ行くにも、いと静にて騒ぐ氣色もなく、仁壽殿を打ち通り、即ち清涼殿の前の東の椽に差し掛けたる簀子の所より、舞姫を先に立

ほそだちのひらをつけて、  
きよげなるをこのもてわ  
たるも、いさなまめかし。  
むらさきのかみを、つゝみ  
てふんじて、ふさながき藤  
につけたるもいさをかし。  
だいりは、五節のほごこそ、  
すゝろに只ならで、見る人  
もをかしうおぼゆれ。この  
もりづかさなどの、色々の  
さいくを、ものいみのやう  
にて、さいしきつけたるな  
ごも、めづらしく見ゆ。清  
涼殿のそりはしに、もこ

て、中宮の御局へ参りたるぞ、  
洵に芽出た  
く面白かりける事どもなり。  
細劔に平緒つけて、容姿秀麗なる童男が、禁  
殿の中を持ち渡るさま。紫紙の文を包み封じ  
て、花房長き藤の枝に付けたるなど。又た優  
美なるものなり。  
大内裏にては、五節の時こそ流石に平常と異  
なりて、見る人毎に皆面白く覺ゆれ。主殿司  
女などが、種々に彩色したる細工物を、物忌  
付けたるやうに飾るなど、珍らしく見ゆ。又  
た元結とて髻を結ぶ組紐の、色の叢濃にて、  
美しく目立てる女官などが、清凉殿の反橋に

ゆひのむらご、いさげざや  
かにて、いでぬたるも、さ  
ましくにつけて、をかしう  
のみ。うへさふしわらはべ  
ごも、いみじき色ふしとお  
もひたる、いさごさわり也。  
山あぬ日かげなど、やない  
ばこにいでて、かうふりし  
たるをのこもてありく、い  
さをかしう見ゆ。殿上人  
のなほしぬぎたれて、扇や  
なにやさ、ひやうしにして、  
つかさまされどしきなみぞ  
たつさ、いふうたをうたひ  
て、つばねごものまへわた  
るほどほいみしく、そひた  
ちたらん人の心、さわぎぬ

立ち出でたるなど、何につけても面白からざ  
るはなし。されば殿上の雜司童女ごもは、五  
節の時を甚く面白く思ふも道理にて、山藍の  
青摺衣、日蔭鬘などを、柳篋に入れて、冠着  
けたる男之を持ち歩く状いと面白く、直衣を  
脱ぎ垂れたる殿上人が、扇又は笏などにて手  
拍子を取りながら、「司まさされど重波ぞ立つ」  
と言ふ歌を謠ひて、局々の前を行列し渡る状  
の、いみじく賑はしければ、此の五節の式に  
添ひ立たん人は、定めて心騒ぎするなるべく、  
況して行列の人々が、一度に颯と笑聲を揚げ  
たるなどは、多人数なれば恐ろしき迄に響き

べしかし。ましてさき一度にわらひなごしたる、いさおそろし。行事の藏人のかひれりがされ、ものよりこさにきよらに見ゆ。しこれなごしきたれど、申くえものぼりぬす、女房の出たるさま、ほめそしり、此ころはこき事はなかり。ちやうだいの夜、行事の藏人いさきびしうもてなして、かいつくろひ二人、わらはよりほかは、いるまじさおさへて、おもにくきまでいへば、殿上人など、猶これひさりばかりはなごのたまふ。うらやみあり、いか

渡るなり。さて式場には、取締行事の藏人ありて、諸人の亂入を禁じ居れるが、皆練とて表裏共に紅の練衣なるを下襲にしたる姿は、何物よりも勝れて立派に見ゆ。此の藏人、局などに入り来れば、坐布團など勧むるに、なか！憚りて其の上に坐を占めもせず、されど式に添ひ立ちたる女房を褒め貶るなど、すべて此頃は五節の沙汰のみなり。さて十一月の中の丑の日は、帳臺式とて、主上常寧殿に出御ありて、舞姫の歌舞を御覽あらせらるゝなるが、此の夜は、行事の藏人、殊に厳しく出入を警め、舞姫の侍女二人と、香爐などを

でかなごかたにいふに、宮の御かたの女房、二十人ばかりおしこりて、こころしくしいひたる藏人、なにともせず、戸をおしあけて、さよめきいれば、あきれて、いさこはすぢなき世かなごて、たてるもをかし。それにつきてぞ、かしづきさももみない。けしきいされたけなり。うへもおはしまして、いさをかしと御覽じおはしますらんかし。わらはまひの夜は、いさをかしのさうだいにむかひたるかほごも、いさうたげにをかしかりき。」

持ちて付き添ひ行く童女の外は、一切入ることを禁じて、面憎きまで厳しければ、殿上人などは、唯だ此の者一人だけ入れ給へよと言へど、一人を入るれば、他の羨みあれば、許すことならじと拒みける所へ、中宮の方の女房二十人ばかり押し懸け行くに、さしも事々しく言ひたる藏人も、中宮の御威光に恐れやしけん、拒みなごせざるまゝに、皆々戸を押し開けて騒ぎ入れば、是は爲ん術もなき次第かなとて、唯だ呆れ顔して立つのみなれば、侍女ごも其の後より皆入るに、藏人いと妬ましき氣色なり。主上既に出御ましませば、此

むみやうさいふびほの御こ  
さを、うへのもてわたらせ  
給へるを、見などして、か  
きならしなごすさいへば、  
引にはあらず、をなごをて  
まさぐりにして、これが名  
よ、いかにさかやなご、き  
こえさするに、たゞいさほ  
かなく、なまなしこのたま  
はせなるは、猶いさめてた  
くこそ覺えしか。

の有様を定めて可笑しと御覽せられたるなる  
べし。又た同じ五節の童舞の卯の日の夜は、  
其の童が燭臺に向ひて、燈火に映えたる顔な  
ご、いと愛らしくて面白かりしなり。  
無名と言へる琵琶を、主上の仰せにて、中宮  
の御方へ持たせ給ひけるを拜見して、己は固  
より弾くにはあらで、唯だ掻き鳴らすばかり  
なれば、其の絃を漸く手まさぐりなごしなが  
ら、此の琵琶の名は何と申さるゝにやと、中  
宮に窺ひ奉れば、墓なくも名も無き琵琶なり  
と仰せありて、其の名の無名なりとは打ちつ  
けに仰せられざりしこそ、なかゝに芽出た

しげいやなご、わたり給ひ  
て、御物語のついでに、  
まるがもさに、いさをかし  
げなるさうのふえこそあ  
れ、ここのえさせ給へり  
この給ふを、僧都のきみの、  
そればりうえんにたうべ、  
おのれがもさに、めでたき  
きん侍り、それにかへさせ  
たまへま申給ふを、きもも  
いたたまはで、猶こそ事を  
の給ふに、いらへさせ奉ら  
んと、あまたたび聞え給ふ  
に、猶物のたまはれば、宮  
の御まへの、いなかへじこ

く覺えまつりたれ。  
曾て中宮の御妹君なる淑景舎の女御も、中  
宮の御方へ入らせ給ひて、いろゝの御物語  
の序に、女御の御手許に稀代の笙の笛ありて、  
既に隠れさせ給ひし父君なる中關白道隆卿よ  
り譲られたる由御話あるを、兄僧都隆圓の君  
も其の座にありて、其の笙の笛を己れに譲ら  
れよ、其の代りには、己が手許にある世にも  
珍らしき琴を與ふべしと言ふを、淑景舎の君  
承諾ひ給はで、他事に言ひ紛はせられけるに、  
僧都の君は強ひて望み給ひ、幾度となく請は  
れられども、淑景舎の君無言のまゝにて、返

おぼいたる物をさ、のたまはせけるが、いみしうをかしき事ぞかぎりなき。此御ふえの名を、僧都のきみもえしり給はざりければ、たゞうらめしさぞおぼしためる。これは、しきの御ざうしに、おはしまし、さきのこさなり。うへの御まへに、いなかへじさいふ御ふえの候なり。御まへに候ものごもは、琴も笛も、みなめづらしき名つきてこそあれ。びは、げんじやう、ぼくば、あゝへ、あきやう、むみやうなど。又わごんなども、くちめ、しほかま、二貫な

答もし給はぬを、中宮それと察せられて僧都に向ひ、不替と思へるものを、然までな強ひ給ひそと仰せられけるこそ、洵に秀句なれ。そは此の笙の笛の名は、不替と言ひて、千金にも替へ難き至寶の義なるを、淑景舎の君の琴に替へざる心に言ひ通はせ給へるなりしが、僧都には此の笙の名を知り給はねば、唯だ連れなくも氣強き御詞かなと、恨めしく思召したる氣色なりし。但し之は中宮の御前の、未だ職の御曹司に在せし時の事なり。さて主上の御前にも、否不替と言ふ名の御笛ありて、琴も笛も、主上の御前にあるものは、皆々珍

ごぞきこゆ。すぬろう、こすぬろう、うだのほうし、くぎうち、はふたつ、なにくれさおほくきこえしかご、わすれにけり。ぎやうでんの一のたなにさいふこさぐさは、頭中將こそしたまひしか。

らしき名の物のみなり。琵琶は、玄上又た玄象、牧馬、井上、渭橋又た爲堯、無名なごあり。和琴には、朽目又た朽部、撫竈、二貫なごあり。笛には大水龍、小水龍、釘打、葉二。又た和琴には宇多法師、之は寛平法皇の愛せられ給ひしより、此の名あるに至りしなるが、檜を以て作られたる和琴の名物なりしを、一條天皇の御時、内裏の炎上と共に焼失せり。此の外尚ほ多くあれど、一々は記臆せず。さても善き樂器を褒むる詞に、宜陽殿の一の棚にと言ふは、頭中將齊信卿の言ひ始められしものにて、宜陽殿は、累代の御物樂器書籍な

うへの御つぼれのみすのまへにて、殿上人日ひさひ、こさ、ふえ、ふきあそびくらしして、まかでわかるゝほご。またかうしをまゐらぬに、おほさなぶらなさし出たれば、そのあきたるがあらはなれば、びほの御こさを、たゞさまにもたせ給へり。くれなぬの御その、いふもよのつれなる。うちき、又はりたるもあまた奉りて、いさくろくつやゝかなる御びほに、御その袖をうちかけて、さらへさせ給へ

ごを納め置かるゝ所なり。中宮の御局の御簾の前にて、或る日の朝より夕まで、殿上人寄り集ひて、琴笛などの合奏して遊び暮らし、さて退出ありたれど、未だ格子を下さぬに、燈火を参らせたれば、戸の開きたるが顯はに見ゆるものから、今まで琵琶弾きて在せし中宮には、弾く手を止めて、唯だ琵琶を持ち給ふのみなるが、世の常ならぬ紅の御装束の、氣高さは言ふも更なり、桂も紅にて、羅の張りたるなど、多く召させられたながら、色黒々と艶々しき琵琶を抱へられて、御袖を打ち懸けさせ給へる状の、美々し

るめでたきに、そばより御ひたひのほご、しろくげさやかにて、わづかに見えさせ給へるは、たさふべきかたなくめでたし。ちかくる給へる人にさしよりて、なかばかくしたりけんも、えかうはあらざりけんかし、それはたゞ人にこそありけめさいふなきとて、こゝちもなきを、わりなくわけいりてけいすれば、わらはせ給ひて、我はしりたりやさんおほせらるゝと、つたふるもをかし。」

く芽出たきに、御額のあたり、火影に榮えて、白く鮮麗なるが、傍より仄かに見えさへ給へるなど、其の優美の程は、何に喩へんやうもなければ、己れ傍なる女房に寄り添ひて、「千呼万喚始めて出で来り、猶ほ琵琶を抱きて半は面を遮る」と琵琶行にあれど、そは通常一般の倡家の女を形容したるにて、今此の中宮の御姿には及ぶべくもあらずと言へど、彼の女房は琵琶行の詞を知らねば、何の感じもなきに、詮方なくも人をして、此の由を中宮に申し上げさすれば、中宮には笑はせ給ひて、我は琵琶行の詞を知れりと思へるにやと仰せ

御めのさのたゆふの、けふ  
ひうがへくだるに、たまは  
するあふきごものなかに、  
かたつかたには、日いさ花  
やかにさしいで、たび人  
のあるさころ、井手の中  
將のたちなごいふさま、い  
さをかしうかきて、いまか  
たつかたには、京のかた雨  
いみしうふりたるに、なが  
めたる人なごかきたるに、  
あかれさす  
日にむかひても  
思ひいでよ

られたりと、取次の人の傳へ來るも面白かり  
き。

中宮の御父君なる道隆卿の隠れさせ給ひて、  
中宮の御兄弟なる内大臣伊周卿、中納言隆家  
卿など、左遷せられたる頃の事なるべし、同  
じ御兄弟なる兵部大輔周家の妻にて、小一條  
院の御宮達の御乳母なるが、世を見捨て、  
今日しも日向の國に下るに臨み、中宮より賜  
はりし餞別の扇なごの中に、一面には、日の  
華かに射し出でたるに、旅人ありて、井手の  
中將の館とも言ふべき邸宅などを、最と面白  
く描かれ、他の一面には、京の方に雨激しく

みやこははれぬ  
ながめすらんさ  
ことばに、御手づからかゝ  
せ給ひしあはれなりき。さ  
るきみをおきたてまつり  
て、さほくこそえいくまじ  
けれ。」

降れるを、人の眺め居る所なご描かれたるに、

あかねさす日にむかひても思ひいでよ  
みやこは晴れぬながめすらんさ

歌のやうにもあらぬ詞を、中宮の御自筆にて  
書き給ひしは、哀れども哀れなりき。此の歌  
の「あかねさす」とは、日と言はん枕詞にて、  
「日にむかひ」とは、日向國に赴くを言へる  
にて、「晴れぬながめ」は、時運の非なるを嘆  
くと共に、長雨の晴れざるに懸けさせられた  
るなり。一門御兄弟の左遷なごありて、頼み  
少き世を啣ち給へる中宮を、京に残し奉り  
て、心強くも日向に下らる、乳母の大輔かな、



【四十七】 れたきもの  
これよりやるも、人のいひ  
たる返しも、かきてやりつ  
るのち、もじひさつふたつ  
なごおもひなほしたる」さ  
みの物ぬふに、ぬひはてつ  
と思ひて、ほりをひきぬき  
たれば、はやうしりをむす  
ばざりけり。」又かへさまに  
ぬひたるも、いされたし。」

なみ／＼の人ならば、斯くも遠國へは、よも  
え行くまじと思はるゝなり。

【四十七】 ねたきもの  
此方より遣る歌も、人より言ひ寄來したるに  
返歌するにも、書き送りて後、一字二字ばかり、訂正の箇處を思ひ出したるは、既に其の  
甲斐なくて口惜きものなり。又た急ぎの衣服  
を縫へるに、漸く縫ひ終りて、氣も樂々と、  
最後の針を引き抜きたるに、何事ぞや、糸の  
尻を結びてあらざりしかば、針と共に糸も皆  
抜けたるなど、急ぎの場合、殊に妬くて悔し。  
さては斯る場合に、裏表を間違へて縫ひたる

みなみのぬんにおはします  
比、にしのたいに殿のおは  
しますかたに、宮もおはし  
ませば、しんでんにあつま  
りあて、さうくしければ、  
ふれあそびをし、わたごの  
にあつまりなごしてある  
に、これ只今さみのものな  
り、誰もたれもあつまり  
て、時かはさずぬひてまゐ  
らせよきて、ひらぬきの御  
ぞん給はせれば、みなみ  
おもてにあつまりあて、御  
ぞかたみづゝ、誰かかくぬ  
ひ出るさいごみつゝ、ちか

は、又た更に妬し。  
南院は、四條の北、壬生の西にありしが、  
後には六條の北、烏丸の西にもありて、小一  
條院の御領なるが、何時しか中關白道隆卿の  
邸宅と聞えたり。中宮いまだ此の南院に在し  
ます頃、本院の西の對屋に、父道隆卿の在し  
ければ、中宮も同じく西の對屋に在しませば、  
女房達は、新殿に集り居て寂しきまゝに、皆  
々立ち添ひ遊びなごして、廻廊に集りなごせ  
る折しも、中宮よりの仰せにて、之は急用の  
衣裳なり、誰も彼も手傳ひて、時を移さず縫  
ひ上げよとて、緯糸を籠めて織りたる模様な

くもむかはず、ぬふさまも  
いさ御ぐるほし。命婦のめ  
のさ、いさくぬひはて、  
うちおきつる。めだけのか  
たの御身をぬひつるが、そ  
むきさまなるを見つせず、  
さぢめもしあへず、まごひ  
おきてたちぬるに、御せあ  
はせんさすれば、はやうた  
がひにけり。わらひのし  
りて、これぬひなほせさい  
ふを、たれがあしうぬひた  
りさしりてかなほさん、あ  
やなごならばこそ、うらな  
見ざらん、ぬひたがへの人  
の、げになほさめ、むもん  
の御ぞなり、なにをしるし

しの絹、之を平縦といふなるが、此の平縦の  
御裳を給はせられたれば、南面の間に集りて、片  
身づゝを受取り、誰が最と早く縫ひ終るやと、  
其の遅速を競争しながら、互に遠く離れて坐  
を占め、顔も見合はせず、言葉も交はさずし  
て、一心不亂に縫ふ状は、さながら狂氣の沙  
汰とも見えたれ。斯くて命婦の乳母ぞ、第一  
番に縫ひ果て、御裳を打ち置きける。此の  
命婦は、左の片身を縫ひたるなるが、裏表を  
間違へたるを心付かず、綴目さへも忘れて、  
急ぎ差し置きて立ちければ、衣の脊筋を合せ  
縫はんとするに、縫ひ違ひたれば、合はざる

にてか、なほす人たれかあ  
らん。たゞまだぬひ給はざ  
らん人に、なほさせよとて、  
きゝもいれれば、さいひて  
あらんやとて、源少納言  
新中納言など、いひなほ  
し給ひしかほ、見やりてあ  
たりしこそをかしかりし  
か。これはよさりのぼらせ  
給はんさて、さくぬひたら  
ん人を、おもふさおほせら  
れしか。

も道理にて、笑ひ罵り、縫ひ直せよと言へば、  
命婦氣色ばみて、誰か始めより悪う縫はんと  
思ふものぞ、されば縫ひ違へたりとて、今更  
ら縫ひ直す者やある。綾などの紋あり模様あ  
るものならば、裏表をも見るべければ、之を  
縫ひ違へたる人こそ、縫ひ直すべき道理なれ。  
平縦の無紋の御裳は、何を裏表の印とせん、  
斯る印なきものを縫ひ違へたりとて、誰か縫  
ひ直す者やあるべき、唯だ未だ縫ひ終らざる  
人に直させ給へとて、聞きも入れぬを、女房  
達の中にて、源少納言、新中納言などは、命  
婦の誤りを、さまざまに言ひ直して、挨拶し

みすまじき人に、ほかへや  
りたる文さりたがへて、も  
てゆきたるれたし。げにあ  
やまちてけりさはいはて、  
口かたうあらがひたる。人  
めをだにおもはずは、はし  
りもうちつべし。」

おもしろき萩すゝきなごを  
うゑて見るほごに、ながび

給ふ顔を、皆々見守りゐたるこそ可笑しかり  
し。さても此の御裳は、中宮の今夜参内ある  
べき其の御料にて、疾く縫ひたる者を、感心  
に思召さるゝこの事なりしなり。  
其人の外には見せられざる手紙を、使の誤り  
にて、取り違へて他に持ち行きたるは悔し。  
而かも使の者は、己が過を詫びもせで、只管  
仰せのまゝに持ち行きしとて、固く争へるな  
ごは、若し人目なかりせば、走り出で、打ち  
擲きもしつべき程に妬し。  
枝振り善き萩、薄なごを植ゑて、明け暮れ樂  
み見てあるに、他に移し植ゑんとにや、長櫃

つもたる物、すきなごひき  
さげて、たゞほりにほりて  
いぬるこそ、わひしうれた  
かりけれ。よろしき人なご  
のあるをりは、さもせぬも  
のをいみしうせいすれど、  
たゞすこしなごいひていぬ  
る、いふがひなくれたし。」

すりやうなごのきて、なめ  
げに物いひ、さりさて我を  
ばいかゞと思ひたるけはひ  
に、いひ出たるいされたげ  
也。」

見すまじき人の、文をひき

なご持ち來り、鋤なごにて所嫌はず堀り散ら  
して持ち行くは、侘びしくも亦た口惜しきも  
のなり。高貴なる男の人達ありて制する時な  
ごは、斯る事もなければ、己等のやうに女ご  
もの制すればとて、怖る氣色もなく、唯だ少  
し計りなご言ひて、堀り散し行く状は、言ひ  
甲斐なく妬きものなり。  
國司など殿中に來りて、地方にて飛ぶ鳥を落  
す勢を其の儘に、無禮なる言葉遣ひをなし、  
我は苟くも受領なりとの顔付きにて、傲慢な  
る氣色なるは、憐れにも妬きものなり。  
他より寄來せる文の、人には見すまじきもの

さりて、庭にはにおりて見たて  
る。いさわびしうねたく、  
おひてゆげど、すのもまに  
さまりて見るこそ、さびも  
いでぬべきこゝちすれ。」

【四十八】

かたはらいた

きもの

まらうさなごにあひて物い  
ふに、おくのかたにうちさ  
げこそ人のいふを、せいせ

できくこゝち。」おもふ人の  
いたくゑひて、おなじ事し  
たる。きゝゑたるをもしら  
で、人のうへいひたる。そ  
れば何ばかりならぬつかひ  
人なれど、かたはらいた  
し。旅たびたちたる所、ちかき  
所なごにて、げすごものさ  
れかばしたる。にくげなる  
ちごを、おのれがこゝちに  
かなしおもふまゝに、う  
つくしみあそばし、これが  
こゑのまれにて、いひける  
事なごかたりたる。さえあ  
る人のまへにて、さゑなき  
人の、物おほえがほに、人  
の名なごいひたる。こゝに

を、奪うばひ取りて、庭にはに降りて立ちながら見て  
あるぞ、最いと佗わびしく妬ねたければ、追おひ行ゆけど  
も、簾すの外そとまでは出ることを得えざれば、追おひ  
も及およばず、空うなしく残念ざんねんがりて、簾すの所ところに立たち  
止とまりたるまゝ、怨うらめしく見遣みやりあるこそ、飛と  
び出いでまほしきまで、口惜くちをしくて妬ねたし。

【注意】

「すゞろなる事はらだちて」より、「なほこそ、  
こぼり給はぬなご、うちいひたるよ」までの  
一節は、特に削除す。

【四十八】

かたはらいたきもの

來客らいきゃくありて談話だんわするに、奥おくの間まにて男女だんじよの痴ち  
話わ喃なん々たるを、客きやくあるに何事なにごとぞと、制せいしたき  
は山々やまくなれど、客前きやくぜんにて然さる事も言いひ兼かぬれ

ば、心こゝろならずも其その喃々なんくを聞き居まることの、  
かたはら痛いたくも亦またた氣耻きはづかしさよ。或あるは己おのが  
戀人こひびとの亂醉らんすいして、同おなじ事ことを嘔々くどくしく繰かり返かへし  
言いへる。又または聞き居まることも知らで、其その人ひとを  
惡あしざまに言いひたるは、たとひ召使人めしつかひの身みの上うへ  
にて、何程なにほどの憚はづかりなきものとても、氣味善きみよか  
らぬものなり。旅たびに出いでたる先さき、たとへば旅宿りよしゆく  
なご。又または家いへにありても、己おのが耳みみに近ちかき所ところに  
て、下男げなん下女げじよどもの互たがひに戯あれ合あへるなご、聞き  
くもかたはら痛いたし。人目ひとめには憎にくげなる稚兒ちごを、  
さも愛いとしと思おもふものから、大切たいせつにして遊あそばす  
は善よけれど、其その稚兒ちごの言いひし事ことを、聲こゑまで